



2022 November

T-ACT
つくばアクションプロジェクト

TSUKUBA ACTION PROJECT REPORT

2021年度 活動報告書

原皮から始める羊皮紙作り



【第4回】食糧支援ボランティア募集！ T-PIRC 新興等 Food Pantry: Volunteer Recruitment!



外国籍子ども校外学習サポート教室



つくばミーティング!!



「障害者の生活に関するポスター」を作りました

目次

はしがき

アクション / プラン

BLUE ONE BEAT! ~ SDGs をもっと身近に~ (20009A)	1
筑波の春を取り戻せ 実行編 (20010A)	7
ドコイコ [Ver.1] (20011A)	9
アイシティ eco プロジェクト in つくば (20013A)	13
つくばミーティング!! (21002A)	17
つくばマナトピア~学びの祭典~ (21003A)	21
筑波大学かぶき會 (21004A)	26
チュートリアル教育をみんなで考えよう! (21005P)	30
「障害者の生活に関するボードゲーム」を作しましょう! (21010A)	33
原皮から始める羊皮紙作り (21012A)	38
筑波大学かぶき會 第二場 TSUKUBA DAIGAKU KABUKI-KAI DAINIBA ~ The 2nd scene ~ (21015A)	43

ボランティア

令和3年度茨城県警察大学生サポーター募集について (20003V)	49
外国籍子ども校外学習サポート教室 (21001V)	50
「矢中の杜 (旧矢中邸)」の保存活用 (19031V)	51
【学習支援ボランティア募集!】 貧しい子どもたちのための無料塾 (21003V)	52
【第4回】食糧支援ボランティア募集! T-PIRC 新米等 Food Pantry: Volunteer Recruitment! (21008V)	53
【第5回】食糧支援ボランティア募集! Food Pantry: Volunteer Recruitment! (21011V)	56

2021年度 実施状況報告	61
---------------------	----

編集後記

※成長度（自分は何のくらい成長できたと感じますか？）と充実度（やりたいことができた充実感はありましたか？）を5段階で自己評価している。

※学生の学年は活動報告書提出時のものである。

はしがき

「つくばアクションプロジェクト」(T-ACT)の『活動報告書(2022年11月発行)』をお届けします。本プロジェクトは、2008年度(平成20年度)に「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」に採択されて以来、学生の自主性と社会性の育成を図ることを目標に活動を続けてきました。令和4年度(2022年度)の今年は、15年目に入ったこととなりますが、一昨年度からの新型コロナウイルス感染拡大の影響はいまだに続いている状況です。

本報告書には、T-ACTで実施された企画・活動のうち、昨年度(2021年度)に「活動報告書」が提出されたものが掲載されています。そのうち、T-ACTアクションおよびプランの企画が11件、T-ACTボランティアの活動が6件となっています。一昨年度の活動は、前者が19件、後者が4件でしたので、コロナ禍の下、件数に限っては、低空飛行の状態が続いていると言わざるをえません。コロナ禍が収束して、「やってみたい」を実現させるべく、仲間と自由に集まれる状況が一刻も早く戻ってほしいと願うばかりです。

実際のところ、コロナ禍による様々な制限のために、学生さんは活動に困難を感じたり、不安を抱えたりすることが多かったようです。本報告書から、具体的な記述を少し拾うと、「会議をリモートにせざるを得ず、音声が届いて聞こえづらかったり、機器トラブルで会議がなかなか始まらなかったりと対面で行うよりも意思の疎通がスムーズにいかないことがしばしばあった」(ドコイコ)、「9割の授業がオンライン授業であり、大学内に知り合いがいない状態であったため、活動に不安があった」(アイシティecoプロジェクト)、「私にとってコロナ禍で友人を作るのが難しいと感じた」(つくばミーティング)、「始めはなかなか集まれなくて、方向性が見えなかったり、実際に顔が見えないこともあって不安な声が多かった」(つくばマナトピア)、等です。

一方、このコロナ禍だからこそ、T-ACTで活動を企画することに特別な意義を見出してくれた学生さんもおります。「学生間での交流会があれば参加したいと思っていましたが、なかなかそのような機会に恵まれず、結果的に自分で企画してしまおうと決断しました」(つくばミーティング)、「入学式や新歓、宿舎祭など楽しみにしていた行事は全て中止となり、授業もオンラインで家にこもりっぱなしだった私にとってT-ACTはととても輝いて見えました」(BLUE ONE BEAT)。そして、いろいろと工夫をこらしながら活動を進め、「LINEの投票機能を通じて、意思を確認するなど可能な限り、意思疎通を図れるようにした」(つくばマナトピア)、結果として予想を超える成果を挙げた活動も多かったようです。「「そうだ京都、行こう」のようなノリで実施できてしまったことに驚いています。(中略)実現できたこと自体が初めての体験で衝撃的でした」(羊皮紙作り)、「オーガナイザーの学生間でも新たな交流の場を生むことができました」(つくばミーティング)。

また、多くの学生さんがT-ACTでの活動を得難い経験と捉えてくれました。「何かを成し遂げるために必要となる時間や労力は、側から見るとずっと大きなものであるということを実感できる体験であった」(筑波の春)、「枠組みや下地を含めて、みんなで考える。一人ひとりの強みや持ち味を活かして役割を分担する、その大切さをこのマナトピアを通じて実感することができた」(マナトピア)。例年より数は減っておりますが、本報告書には、学生さんの(そして、少数の教員の)挑戦の物語がたくさん詰まっています。

本年度も皆様の変わらぬご支援とご助力をお願いいたします。

2022年11月

T-ACT推進室長
加賀 信広

● BLUE ONE BEAT! ～SDGsをもっと身近に～ (20009A)

T-ACT プランナー 天野 隼太 (比較文化学類1年)

活動目標

○動機

本企画は、地域の小中学生がSDGsについて深く学んでもらうことを目的とし、動画コンテンツの作成を行う。動画については、(1)大学生の視点から見た作成による、他のSDGs関連動画との差別化、(2)小中学生にとってSDGsをより身近なものに感じてもらうこと、以上2点を念頭に置いて作成する。

○来歴

2018年に活動した「BLUE ONE BEAT ～可能性を広げる～」では、小中高生を対象として『未来ディスカッション』というイベントを企画した。小中高生が多様な人々と交流し、自分の考えを深めることができるような学びの場を作りたいと考えた。2019年に活動した「BLUE ONE BEAT! 2019」では、茨城県教育委員会主催の「いばらき子ども大学」の事業の一環に携わり、小学校4～6年生を対象としてSDGsを学ぶイベントを実施した。活動は筑波大学のSDGsに対する取り組みとして紹介された。
(<https://www.osi.tsukuba.ac.jp/sdgs/effort/effort-960>)

○目標

- (1) 新型コロナウイルス禍であっても、小中学生にSDGsについて学ぶ機会を提供する。
- (2) 動画の視聴を通し、身近な場所で行われているSDGsへの取り組みを知ってもらう。
- (3) 動画視聴後に、私達一人一人ができるSDGsへの取り組みを考え、実践してもらう。

○企画名について

BLUE ONE BEAT! のBLUEは「青春」を表し、企画名は「青春時代における胸を高鳴らせるような一つの衝動」の意味合いを持つ。この活動が小中学生にSDGsを身近に感じてもらう一つの端緒になることや、小中学生だけでなく活動を運営する我々もワクワクするような学びの場を作りたいということを考えてこの企画名にした。

具体的な活動計画

○活動内容・動画構成

本動画では、小中学生にSDGsをより身近なものとして感じてもらうために、筑波大学が行うSDGsへの取り組み…(1)、つくば市が行うSDGsへの取り組み…(2),(3)についてインタビューを通して紹介する。なお、(2),(3)については、つくば市ならではのSDGsとの交流を考え、以下のキーワードにそってインタビュー項目を決めた。

キーワード：学園研究都市・国際性・筑波山

(1) 筑波大学

今回は、筑波大学のSDGsへの取り組みについてスポーツを通じた国際発展の視点から考える。

選定理由：筑波大学は、体育専門学群を有しスポーツを多角的な視点から研究している。来年度に行われる東京オリンピックを見据え、スポーツとSDGsのつながりを改めて理解する必要があると思ったため。

関連するSDGs：3/17すべての人に健康と福祉を16/17平和と公平をすべての人に

インタビュー先：山口拓先生(体育系)(予定)

インタビュー内容：スポーツを通じたSDGsとの関わり、筑波大学の実践

(2) 学園研究都市・国際性

選定理由：つくば市は、筑波大学をはじめとする大学機関や様々な研究機関を有し、世界中から多くの人が集まる研究都市・国際都市であるため。

関連するSDGs：11/17住み続けられるまちづくりを
インタビュー先：つくば市(予定)

インタビュー内容：「つくば市未来構想」に沿ってつくば市が行っている研究都市・国際都市(※)としてのSDGsへの取り組みについて(予定)(※)つくば市の国際性については、「つくば市持続可能都市ヴィジョン」の5本の柱の内、「②包括的な社会」を中心にインタビューする。また、多文化共生・国際性に関する筑波大学の対応について、筑波大学社会学類の明石純一先生にもインタビューする予定。



(3) 筑波山

選定理由：つくば市は、日本ジオパークに認定された筑波山域ジオパークを有し、自然豊かな町である。また平成24年度には環境モデル都市に選定され、つくば環境スタイル“SMILE”の下、二酸化炭素削減に向けた取り組みが行われているから。

関連する SDGs：13/17気候変動に具体的な対策を

インタビュー先：筑波山→筑波山地域ジオパーク推進協議会（※）(予定)

環境モデル都市→つくば市環境生活部環境都市推進課（予定）

インタビュー内容：筑波山地域ジオパークの豊かな自然を守っていくためにどのような取り組みが行われているか。また、環境モデル都市としての取り組みや現在までの成果について（予定）(※) 筑波山に関しては、筑波大学人文社会系の前川啓治先生にお話しを聞く可能性もある。

インタビュー後に、インタビューの内容を踏まえて私たちが SDGs のために何ができるのかを考え、新型コロナウイルス禍において実践できることを大学生が行う。（各インタビューにおいて私たちが実践できることを質問し、その解答を踏まえる）

○動画の配信について

①動画の内容：インタビュー・大学生の実践

②動画作成に関する新型コロナウイルス対策

インタビューについて

インタビューは新型コロナウイルス感染拡大防止に最大限つとめながら対面で行う。ただし、国や自治体、大学等から自粛要請などが発せられている期間は対面および外出を伴う活動を行わない。

そのために、

「筑波大学課外活動における団体活動開始ガイドライン」

「T-ACT 新型コロナウイルス感染対策チェックリスト」を参考にして、以下の感染対策を徹底する。しかし、インタビュー先が対面取材を望まない場合はオンラインで取材を行う。

<開催前>

①「T-ACT 新型コロナウイルス感染対策チェックリスト」を T-ACT 推進室に提出する。

②プランナーとオーガナイザーはインタビュー前 2 週間の体温測定を行い、体調の記録をする。また、健康管理担当者を定め、その記録をプランナーと健康管理担当者が責任をもって管理する。

③健康管理担当者は、インタビュー開始前日12:00までに体調の記録の確認を行い、メールにてパートナー及び T-ACT フォーラムに報告する

④プランナー・オーガナイザーに感染の疑いがある場合は、その時点で活動を停止する。参加者は 事前に登録した者のみとし、参加者には以下の項目を周知しておく。

状況によっては参加をやめさせること

活動中、マスクを着用すること

インタビュー実施前 2 週間に発熱、体調不良（風邪症状や息苦しさなど）の症状がないこと

<当日>

①当日およびインタビュー実施前 2 週間の発熱、体調不良（風邪症状や息苦しさなど）の症状の有無を確認すること

②活動履歴管理者を定め、日付、場所、時間（時～時）、参加者氏名、インタビューの相手、手で触れることの出る距離で15分以上の接触があったもの（学外者を含む）に関する情報を記録し、保管すること

③マスクの着用を徹底する→着用できない場合には、別の対策を講じる

④来場時やインタビューの前後で消毒を徹底する→消毒液の準備が困難な場合には、手洗いを徹底する

⑤ソーシャルディスタンス（2m程度）を保ちインタビューを行う

⑥十分な換気（常時換気が望ましいが、難しい場合の目安として30分 1 回の換気）を行う

⑦インタビュー中の飲食や大声でのやり取りは控える

⑧参加者の名簿を作成、管理する

⑨使用物品は、個々で持参し、共用しない

⑩インタビュー先などが定めるガイドラインに沿って行う

⑪インタビュー終了後は、使用したカメラ等の機材の消毒を徹底する

<開催後>

以下の内容について、T-ACT 推進室に報告を行う

①インタビュー実施終了の報告をすること

→各インタビューは12月・1 月中に実施予定

詳細な日程については実施日が決定次第、T-ACT フォーラムに報告する

- ②インタビュー実施終了後2週間の時点で参加者にその同居者を含めた感染の有無の確認を行うこと（濃厚接触者と判断された場合も確認する）→結果については、プランナーもしくは登録団体からT-ACT 推進室に連絡すること

<活動を通じて感染が疑われるものが発生した場合>

活動を通じて感染が疑われる者が発生した場合について、以下の対応が必要であること

- (1) 参加者が、以下の項目に該当した場合、「新型コロナウイルス感染が疑われる場合の本人の行動フロー」に従って行動する。
 相談、受診の目安に該当する体調不良の症状がある場合
 濃厚接触者に指定された場合
 同居者がPCR検査を受けることになった場合
 新型コロナウイルス感染者との接触があったことが判明した場合
- (2) 上記に該当する参加者は、プランナーへ、感染の疑いがある旨の報告をする。
- (3) 報告を受けたプランナーは、発生状況をパートナー及びT-ACT 推進室に報告するとともに、団体活動を停止すること。

以上の対策をインタビューごとに行う。

大学生の実践→外部・複数人では行わず、個人が室内で行えるような内容にする。

- ③動画作成の注意：情報倫理に気を付けた上で、

- (1) 取材を受けてくださる方々・実践する大学生には動画公開・出演にあたっての理解を得るようにする。
 (2) 企画で得た個人情報には企画以外の目的で使用せず、また第三者に口外しない。

- ④配信方法：作成した動画は視聴者にとっての利便性を考慮し、YouTubeで配信する。

○補足：選定したSDGsについて

今回選定したSDGsの項目は、17の目標の内、5・11・13である。

これを、SDGsを支える要素である5つのP（People, Prosperity, Planet, Peace, Partnerships）に当てはめると、

- 3 → People
 11 → Prosperity
 13 → Planet
 16 → Peace

となり、被らずに5つの内4つの要素を含むことができるため、一部の要素への偏りを避けることができていると考えられる。

○おおまかなスケジュール

- 10月：準備
 11月：アンケート案作成
 12月・1月：インタビュー
 2月：動画作成
 3月：まとめ

○定期ミーティング

- 活動場所：各自宅
 活動時間：毎週土曜日09:00～11:00
 活動方法：zoomを利用しオンライン上で行う
 活動内容：活動の進捗状況の確認や、今後進めていく活動について議論する

活動場所

オンライン（zoom等）

活動期間

2020/10/01～2021/03/31





対象

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：村上達哉（人文学類3年）、西村大祐（人文学類3年）、直井蒼太（教育学類3年）、高松柚子（日本語・日本文学類3年）、安藤萌華（人文学類3年）、田嶋尚晴（知識情報・図書館学類2年）、林遥都（人文学類2年）、工藤和哉（生物資源学類1年）、熊本ひかる（知識情報・図書館学類1年）

P：大林太朗（体育系）

備考

・新型コロナウイルス感染拡大を考慮してオンラインで行う。

活動報告

実際の活動内容

当初の企画書では、メンバーでSDGsについて学習し、それに基づいて質問事項を考える予定でした。しかし、実際に質問事項を作ってみると子供（小学生）の視点に立って質問を作ることの難しさに直面しました。そこで企画書を修正し、小学生にSDGsに関するアンケートを行うことに決めました。アンケートの作成ではT-ACTコンサルタントの黒田先生、配布に関してはつくば市教育局生涯学習推進課の渡邊さんに大変お世話になりました。様々な紆余曲折（「実施中に困ったこと」の欄に書かせていただきました）がありましたが、最終的に筑波大周辺の5つの小学校（要小学校、竹園東小学校、九重小学校、吾妻小学校、春日学園義務教育学校）の5年生（各学校1クラスずつ抽出）を対象にアンケートを実施することができました。本来ならばその後、その結果に基づきSDGsに関する取り組みを行っている有識者/団体にインタビューを行い、動画コンテンツを製作する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大による活動制限もあり、実行することができませんでした。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒50%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

大きく分けて2つあります。1つめは伝統を引き継ぐということです。私が所属するBLUE ONE BEAT!は、私が作った団体ではなく、先輩方が作ったものです。この企画自体もアイデアは先輩方が考えたもので、先輩方から様々なアドバイスをいただきながら企画書を作成しました。しかし、プロジェクトを始める時期が先輩方の引退時期と重なってしまったこともあり、仕事の引継ぎがないまま私たちの代になってしまいました。

2つ目は、アンケートについてです。アンケートの作成については数々の困難がありました。まず立ちがかった壁は質問事項の決定です。どうすれば子供たちからSDGsに対する関心・意見・疑問を引き出すかは最大の課題でした。質問内容によっては心が傷ついてしまう子供がでないよう十分な配慮も必要でした。壁は、アンケートの表記についても立ちふさがりました。漢字とひらがなの使いわけは、簡単そうに思えますが、小学生

がどの程度まで漢字が読めるのか、既に漢字を習得してしまった大学生が考えることは意外と難しいことでした。他にも、子供たちが集中して回答できる質問数や、選択式と記述式それぞれの質問配分などの壁があり、困難の連続でした。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

1つ目の引継ぎに関しては、毎週1週間に一度、普段のミーティングとは別で、先輩1人とメンバー全員が話し合う機会を作りました。先輩方がそれぞれ就活や院進などの準備で一度に引継ぎができる機会がなかったからです。そこでは、各回先輩方からBLUE ONE BEAT!で担当していた役職、BLUE ONE BEAT!のメンバーとして大切にしてほしいことなどを聞くことで、意識や思いをメンバー全員で共有し引継ぎをスムーズに行うことができました。2つ目のアンケート作成については、(動画で)紹介するSDGsのテーマごとメンバー1人1人が質問事項案を作成し、各ミーティングで話し合いました。そしてある程度質問事項案がまとまるとT-ACTの先生に添削していただき、フィードバックしていただいたご助言・ご指摘を次のミーティングで活かすというサイクルを何度も繰り返し、ようやく一つのアンケートを完成させることができました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

「大学生らしいことができる」、そして「社会貢献ができるかもしれない」。私がBLUE ONE BEAT!に所属したきっかけはとても単純なものでした。入学式や新歓、宿舍祭など楽しみにしていた行事は全て中止となり、授業もオンラインで家にもりっぱな私にとってT-ACTはとても輝いて見えました。所属後は、先輩方が温かく迎えてくださり、SDGsについて一緒に勉強し意見交換をする中で自分が大学生であることを大いに実感できました。加入から1、2カ月が経ったころ、新しい企画の話が持ち出され企画の作成及びプランナーという大役を任されることになりました。先輩方のアドバイスもあり承認までスムーズに進めることができましたが、企画を初めてからが困難の連続でした。というのも、企画が始まる同時期に先輩方が就活や院進の準備でほぼ引退状態となったからです。前企画でプランナーだった先輩からのサポートはいただいていたものの、役割の引継ぎが行われていない状況で企画が始まってしまったので、今振り返るとこの時期が一番つらい時期でした。ですが、T-ACTコンサルタントの先生の助けもあり何とかスムーズに引継ぎを行うことができました。アンケートについても、内容については他の箇所で作らせていただいているため省きますが、作成から配布・実施・回収までとても大変でした。今、活動を振り返ってみると、コロナ禍もあって多くの壁がありましたが、諦めずに試行錯誤を重ねて良かったと思えます。「大学生らしいことができる」、そして「社会貢献ができるかもしれない」という思いから始めた企画は「自分を成長させることができる」そして「社会貢献もできる」企画に変化しました。これらを踏まえ、私にとってとても貴重な経験をさせていただいたと思っています。

参加者への影響

参加したメンバーからは様々な意見をもらいました。以下はメンバーからの感想です。

メンバー1：この企画は、With コロナの時代だからこそ生まれたものである。「コロナ禍でありながらも、地域の子どもたちにワクワクするような学びを届けたい。」そのような思いから企画が動き出した。リモートでミーティングを行い、リモートで地域の小学生とつながった。未曾有の出来事の中で、企画に関する全てのアクションが試行錯誤の連続であった。そのような体験をメンバーと共有できたことが私の一番の収穫である。企画を実施するにあたって、つくば市教育局の方々や小学校の先生方、児童の皆様にご協力をいただいた。お世話になった方々への感謝の気持ちを忘れずに、この企画で得た経験や学びをこれからの人生に生かしていきたい。

メンバー2：コロナ禍でもオンラインで会議をして、アンケートの回収まで漕ぎ着けたことは今後の人生でも経験するか分からない出来事であり、とても貴重なものだった。大学の課題、アルバイト、外出自粛で行動が難しいなどの制限下でも、人々のつながりを意識しながら遂行することが出来た企画だったでないだろうかと思はれる。

メンバー3：小学校・小学生と関わりを持つことはこれからの人生において経験し難いもので、非常に貴重な体験をさせていただいた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

伝えたいことは、コロナ禍であっても活動はできるということです。企画の中には、新型コロナウイルス感染拡大の影響で断念せざるを得なかった企画もあると思います。しかしだからといって完全に活動ができないわけではありません。私達BLUE ONE BEAT!も、ゴールである動画コンテンツ作成までは到達できませんでしたが、アンケートの作成・配布・回収・集計までは何とか達成することができました。それは、オンラインのミーティングを何度も行い、少しずつではありますが前に進んできたからです。現在も感染拡大は予断を許さない状況で、今後どうなるかは誰も分かりません。しかし「コロナ禍だから」と最初から諦めず、できることから1つ1つ積み重ねることが大事だと私は信じています。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

利用して良かった点は、T-ACT コンサルタントの先生から手厚いサポートをいただいたことです。「実施中に困ったこと」で書かせていただきました通り、企画を行う上では多くの困難がありましたが、1つ1つ丁寧に相談に乗っていただきました。例えば、伝統を引き継ぐという点では、先輩方の意志を引き継ぎつつ新しいステップを踏み出すためには何が必要なのか何回かミーティングを開いていただき一緒に考えてくださりました。また、アンケート作成の際には、テーマごと質問事項案に目を通していただき毎週コメントをつけてフィードバックしていただきました。その結果、質問事項やレイアウトなどより質の良いアンケートを作成することができました。コロナ禍であっても活動を続けられたのは、もちろんメンバーのおかげではありますが、T-ACT コンサルタントの先生の支えがあったからこそでもあります。感謝しても感謝しきれません。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4



筑波の春を取り戻せ 実行編 (20010A)

T-ACT プランナー 水谷 奈都乃 (教育学類 1年)

活動目的

例年通りの春を迎えることが出来ず残念に思ったことから前企画「筑波の春を取り戻せプロジェクト」を立ち上げ、入学式で行いたい企画等に関するアイデア募集を行った。本企画はその続編として、コロナ禍で自分達に出来ることを模索しながら今年中のイベント開催を目指すものである。具体的には私たちが例年春に行われるイベントに求めているものを「区切り・記録・一体感」とキーワード化し、コロナ禍であってもそれを作り出すという方針のもとで企画を行う。

具体的な活動計画

期間：3月8日(月)～20日(土)
場所：カスミ筑波大学店 (通称平カス)
対象：全筑波大生 (学年・所属問わず)
内容：以下の物を設置する。

①「入学祝賀式」立看板

来訪者の動き：共に写真に写る

感染対策のために：

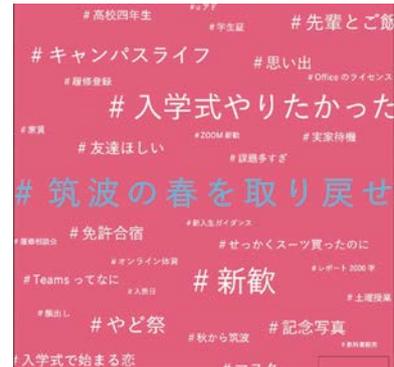
- ・マスク着用の徹底をお願いします。
- ・ソーシャルディスタンスを維持してください。
- ・当日、アマピエちゃん (感染対策アプリ) の使用にご協力ください。

②メッセージ記入スペース

来訪者の動き：メッセージ記入、記入したリボンを結ぶ、共に写真に写る

感染対策のために：

- ・マスク着用の徹底をお願いします。
- ・リボンに触れる前の手消毒は消毒してください。
- ・クラスター発生の場合に備えて、メッセージコーナーでの学籍番号登録 (個人情報の管理の全ては T-ACT フォーラムが請け負って、二週間後には廃棄) にご協力ください。



活動場所

カスミ筑波大学店

活動期間

2020/11/09～2021/03/31

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：安田彩乃 (心理学類 1年)、田宮保孝 (教育学類 1年)、滝口理奈 (教育学類 1年)、増村裕 (障害科学類 1年)、小山田琴美 (障害科学類 1年)、良本翠 (教育学類 1年)、遠藤友咲 (社会工学類 1年)

P：遠藤優介 (人間系)

活動報告

実際の活動内容

2020年度の春に相次いで中止となった入学式等のイベントの代わりに、一年生が主体となって何か出来ないだろうかと思いついたことから前企画「筑波の春を取り戻せ」を立ち上げた。そしてそれを行うなかで練り上げた内容を、イベントとして形にした。

具体的には、開催期間を3月8日～20日、場所をカスミ筑波大学店として、入学式風立看板とメッセージ記入コーナーの設置を行い、対象である筑波大生に広く呼びかけて参加してもらった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒95%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

開催時期を決定しようにも、コロナウイルスに関する世の情勢が読めず二の足を踏む場面が非常に多くあったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

プランを複数用意して、なるべく多くの状況に対応できるよう準備を進めた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

何かを成し遂げるために必要となる時間や労力は、側から見るとよりもずっと大きなものであるということを実感できる体験であった。また、この企画を通して、仕事を分担することの難しさやその一方で得られる成果、他者と触れ合うことでしか得ることのできない学びなど、仲間と協力することの重要性も再確認できた。

参加者への影響

士気が下がってしまう瞬間は多くの場合ある。それをどのように盛り立てていくかもリーダーの務めであると感じていた。一方でイベント実施期間に参加者と話をすることが何度もあったが、喜んでくれていたようであった。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

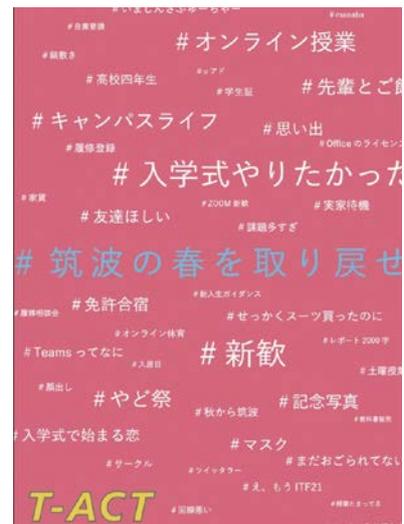
思い立ったら行動に移してみることをおすすめします。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

備品の充実度が高くありがたかった。加えて広報の面で、大学側に協力してもらいやすい点良かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒3



ドコイコ [Ver.1] (20011A)

T-ACT プランナー 熊谷 充弘 (工学システム学類3年)

活動目的

大学の食堂やキッチンカー等の店舗情報やメニューを、一括でアプリから見たり検索したりができるようにし、筑波大学の学食の活性化を図る。

具体的には以下に示す、今までは存在しなかった筑波大学周辺の飲食店に特化したメニュー検索サービス（アプリとWebサイト）をチームメンバーと共に開発する。

本サービスでは、複数の店舗のメニュー情報から、興味を持ったメニューを選択することで、提供している店舗情報などが閲覧することができるため、これまでの特定の店舗を決めてからその中でメニューを選ぶ検索方法よりもより網羅的な食事検索を可能とする。

さらに、マップ上で今まで行ったことのないお店を発見し、他者とその体験を共有することができるような機能を提供する。

店舗側には人気のメニュー情報や、エリアごとのユーザー層（男女比や年齢層等）のデータの表示を行い、広告掲載機能の提供を行う。

具体的な活動計画

2020年度に引き続き、T-ACT 実施期間ではフェーズ1のみを行う。

将来的には産学連携本部のベンチャー起業相談室等との相談をさせていただきながら進めていき、フェーズ2、3へと移行する予定。（右図参照）



【アプリ関連】

- ・マップとサーバーとの通信（バックエンド）の開発
- ・売上管理などのサイトを制作
- ・その他のページのデザイン

活動場所) 各自自宅、または対面

活動時間) 空き時間

活動内容) 各自自宅にてパソコンを用いて作業を行う

対面でのミーティングを行う際にはソーシャルディスタンスの確保やマスクの徹底検温や健康管理シートを持参し感染しないように最大限の努力をします。

【店舗へのアプローチ】

- ・2020年度に作成したパンフレット等を用いて、以下に示す新型コロナウイルス感染対策を万全に行なった上で、対面での実施を含めた筑波大学の学生食堂や周辺店舗への調査 / 打ち合わせを実施。その過程で店舗側のニーズを聞き出し、そのニーズに応えられるべくドコイコのサービスの軌道修正を行う。
- ・店舗側へ提供するサービスの模索
- ・お店のメニュー登録

活動場所) 各自自宅、またはつくばスタートアップパークを利用した対面での打ち合わせ

活動時間) 随時決定する

活動内容) 対象店舗にメールや Zoom にて、作成済みの本サービスの提案書を用いて現時点で提供したいと考えているサービス内容を説明し、その上で現状の不満点のヒアリングと本サービスに対してのアンケート調査を行う。

チームメンバーとの相談の後に、対象店舗からいただいた不満点を改善するシステムを本サービスに組み込み、ユーザーと店舗双方にとってより使いやすく、便利なサービスの模索を行う。

また、メニューの聞き取り調査を行い、その情報を本サービスに登録する。聞き取り調査の具体的な方法として、学生生活課の厚生チームの黒岩様にご相談をさせていただき、2020年度に作成したドコイコのパンフレットを用いて各学生食堂様との打ち合わせの企画を行う。その過程で店舗が現状抱えている問題点等をお聞きし、提供できるソリューションを考える。対面での話し合いについての新型コロナウイルス感染対策に関しては「活動場所」に記載した感染予防対策を行う。



【定期ミーティング】

- ・各種調査結果や進捗状況の共有
- ・サービス内容の議論

活動場所) 各自宅、または対面

活動時間) 毎週木曜日15時～16時(テスト前等を除く)

活動方法) zoom や teams を利用しオンライン会議で人と人の接触が生じないようにする。対面の場合は前述した上記の内容に留意し、感染症対策を万全に行います。

活動内容) 進捗の確認や今後進行していくことの取り決めを行ったり、サービスの内容を議論しあったりする

【作ろうとしているアプリケーションの概要】

[アプリケーション上でできること]

○ユーザー

食堂の場所やメニューの網羅的な確認<食堂の利用を活性化>
これまで知らなかった店舗情報やメニュー情報の確認

○お店のキャンペーン情報等の確認店舗

ポップアップ広告やバナー広告による集客

メニュー登録や売り上げ管理(同時並行で開発を行っている、ドコイコの店舗用サイトにて利用可能)

[サービスの魅力]

筑波大学生の食堂利用をより快適で柔軟なものにし、新たな食堂へ赴くきっかけになる。また、将来的に実装予定であるキャッシュレス決済機能により、番号の呼び出しが聞こえないといった不便さの解消に役立つ

店舗側は広告掲載機能やメニュー表示による、これまで距離が遠くて存在を知らなかった新規学生等の集客が期待でき、店舗情報(キャンペーンや営業時間のお知らせ)の掲載が可能となる。

さらに、将来的に実装するキャッシュレス決済機能により、利用者との接触の機会を減らす上に大声での呼び出し等の新型コロナ感染リスクを減らすことができる。

活動場所

基本的には各自自宅から Zoom や Teams を用いたミーティングや開発を行う。

国や自治体、大学等から自粛要請などが発せられている期間は対面および外出を伴う活動を行わない。

対面での打ち合わせや店舗様との交渉を行う際には、日程が決定後、すみやかに T-ACT に報告を行うとともに直近の二週間の健康管理シートを持参し、当日も参加者全員の検温を実施した上で37.5℃を超えていないことを確認し、超えていた場合は参加しません。

健康管理担当者は中村凌也が率先して行い、開催前日12:00までに体調の記録の確認を行い、メールにてパートナーおよび T-ACT フォーラムへ報告を行います。前後二週間はチームメンバーも人込みを避け、アルコールでの消毒をするなどの感染症対策には万全を期します。

なお、開催当日は参加者全員のマスクの着用と手の消毒を行った上で物品共有の回避、ソーシャルディスタンスを徹底し、飲食や大声でのやり取りは避けます。

活動履歴管理者である中村凌也が日付、場所、時間、参加者氏名、手で触れることの出来る距離で15分以上の接触があったものに関する情報を記録し、保管を行います。

換気やその他の会場が定める感染対策ガイドラインに沿います。

対面での活動が終了した際には T-ACT 推進室への報告を中村凌也が行い、その後2週間の時点で参加者にその同居者を含めた感染の有無の確認を行います。

万が一参加者に新型コロナへの感染が発生した場合、発生状況をパートナー及び T-ACT 推進室に報告するとともに、活動を停止します。

活動期間

2020/12/01～2021/06/01

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O: 飯塚友也(社会工学類3年)、中村凌也(社会工学類3年)、島村和惟(社会工学類3年)、表陸人(工学システム学類3年)、村上貴人(知識情報・図書館学類3年)、藤永弥太郎(情報メディア創成学類2年)、木村正経(人文社会科学ビジネス学院 人文社会科学研究群 国際公共政策学位プログラム博士前期2年)、須郷陽(社会学類2年)

P: 尾内敏彦(国際産学連携本部)

DOKOIKO



活動報告

実際の活動内容

【マーケティングチーム】

- ・筑波大学の学食と周辺の飲食店に対してメニュー、食品画像等の情報掲載の許可を電話、twitter や Instagram のダイレクトメッセージ機能を利用して呼びかけ。
- ・情報掲載の許可をいただいた店舗を中心にその店舗のメニュー情報や店舗の位置情報、HPの有無などの詳細な情報を Excel にまとめた。
- ・将来導入予定であるキャッシュレス決済におけるクレジットカードの決済手数料である3.6%が導入店舗にとって負担が大きすぎるということで、その負担をカバーできる仕組みや決済方法の考察。

【エンジニアチーム】

- ・メニュー、店舗情報の登録と、登録された情報の閲覧機能の開発
- ・マップ上での登録されている情報の表示機能の開発
- ・検索画面、メニューボタン、検索結果画面の UI デザインを開発
- ・フロントエンドのコードを laravel,Vue に対応

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒60%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

新型コロナウイルス感染症の拡大により会議をリモートにせざるを得ず、音声が届いて聞こえづらかったり、機器トラブルで会議なかなか始まらなかったりと対面で行うよりも意思の疎通がスムーズにいかないことがしばしばあった。

店舗に対して情報の掲載許可をお願いする際に、電話ではなかなかうまく伝わらない他、時間の都合が合わずコンタクトを取れないことがあった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

会議に関してはあらかじめ十分な時間が取れる日をお互いで調節し、話し合いを一人ずつ発言するようにして誰が何を話しているかがはっきりさせることで、時間はかかるが内容が対面の時と同じくらい充実するようにした。

店舗に対する情報掲載のお願いに関しては、連絡方法を電話だけではなく SNS のダイレクトメッセージ機能を用いることによって、パンフレットを送信して大まかな活動内容をより詳しく把握してもらい、店舗が都合の良い時にいつでもメッセージを見られるように工夫した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

コロナ禍において、オンライン会議システムを用いる等の慣れない環境の中でチームをまとめるということにとっても苦労しました。

また、協力をしていただく飲食店の方々と打ち合わせをさせていただき、チーム内の話し合いでは見えていなかった飲食店の現状を知ることができ、とても貴重な体験となりました。

参加者への影響

活動が進むにつれて、マーケティングチームとエンジニアチームでそれぞれ仕事が増え、大学での勉強との両立からなかなか全員がミーティングに集まるのが少なくなってしまうこともあったが、ミーティングの時だけでなく Slack を用いて頻繁にメッセージを送り合って仕事の進捗を報告し合うことで、直接会えない状態が続く中でも連携を取ることができるようになった。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

活動が進むにつれて浮き彫りになってくる問題点は増えていくが、生じた問題に対して誰かが気づいた段階ですぐにチームで共有して、チームで解決方法を考えていくことが重要です。共有せずに気づいた人たちだけで解決しようとするとう連携が崩れていくばかりか、生じた問題自体が大きくなってしまいます。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

この活動を推し進める上で、今私たちが持ち合わせている知識や経験で補うことができない視点からの意見やアドバイスをいただけて、非常に助かっています。また、頻繁に発表会やイベントを開催して私たちの活動をアピールする場を設けてくださることも、私たちにとって大きなプラスとなっています。

自分はこのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



アイシティ eco プロジェクト in つくば (2013A)

T-ACT プランナー 織田 くれは (看護学類2年)

活動目的

現在、新型コロナウイルス感染症の影響により、感染症拡大前にできていたボランティア活動を積極的に行うことが難しい状況となっている。そこで、このような状況下でも行える人との接触が少ないボランティア活動は何か考え、思いついたのが、使い捨てコンタクトレンズの空ケースを回収することであった。この活動では、回収ボックスを学内の様々な場所に設置して、回収を行うため、感染が拡大するリスクは低い。

また、使い捨てコンタクトレンズの空ケースは、ポリプロピレンという非常に純度の高いプラスチック素材でできているため、リサイクルに適している。これをリサイクルする活動を行うことは年々深刻化しているプラスチックゴミ問題の解決、SDGS 達成へ貢献できる。さらに、この活動は障がい者の方の自立支援・就労支援、角膜の病気による視力障害の方の視力回復などといったことへも貢献できる。

このように、使い捨てコンタクトレンズの空ケースを回収する活動は、現在のコロナ禍の中でも行うことができ、さらに多くの社会貢献もできる活動であるため、行いたいと思った。

具体的な活動計画

コンタクトレンズ専門店「コンタクトのアイシティ」が行なっている「アイシティ eco プロジェクト」* に参加し、活動する。

- ・回収ボックスの設置について
大学内の様々な場所に使い捨てレンズの空ケースを回収するボックスを6月中旬から9月中旬くらいまで設置する。ボックスは、アイシティから提供を受け、設置場所を決めるにあたっては担当部署としっかり相談し設置する。また、1週間に1度、それぞれの設置場所まで回収ボックスを確認しに行き、定期的にチェック、清掃などを行う。
- ・ボックスからの回収について
回収する期間としては、試しに1ヶ月程度回収ボックスを設置して、どのくらい回収できるか見たあと、具体的に回収する頻度を決めていきたい。回収したものは、近くのアイシティ店舗（アイシティつくばクレオスクエア Q't 店）へ持参する。
- ・運営ミーティングについて
オンラインで、活動を行う前後に行う。

※アイシティ eco プロジェクトとは

コンタクトレンズ専門店「コンタクトのアイシティ」が2010年から行っている使い捨てコンタクトレンズの空ケースリサイクル運動のことである。

使い捨てコンタクトレンズの空ケースは、メーカー問わず全てポリプロピレンという非常にリサイクルに適した素材で作られているため、このリサイクル活動が始められた。この活動により、二酸化炭素排出量を削減でき、環境保全へ貢献できる。

また、回収した空ケースをリサイクルへ回す準備の作業を障がい者の方へ依頼することで障がい者の方の「自立・就労の支援」を生むだけでなく、リサイクルにより得られた収益の全額は「日本アイバンク協会」へ寄付されるため、角膜の病気による視力障害の方の視力回復などといったことへも貢献する。

活動場所

カスミ筑波大学の入口付近、グローバルヴィレッジの管理事務室と各洗濯室、平砂学生宿舎の管理事務室、一の矢学生宿舎の管理事務室と共用棟、医学食堂の券売機付近、第一エリア食堂の券売機付近、第二エリア食堂の入口付近に回収ボックスを設置することについて許可が得られている。

活動期間

2021/04/01～2021/09/30

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：高津あゆみ（生物資源学類 4 年）、下地梨温（心理学類 2 年）、水谷奈都乃（教育学類 2 年）、田中千裕（生物学類 1 年）

P：水野智美（医学医療系）

備考**【設置及び回収、持参時の新型コロナウイルス感染予防対策】**

- ・プランナーとオーガナイザーは、健康観察記録表を用いて活動 2 週間前から体温測定を行う。健康管理担当者を定め、記録をプランナーと健康管理担当者が責任を持って管理する。活動前日までに健康観察記録表を T-ACT 推進室へ報告する。
- ・プランナー・オーガナイザーに感染の疑いがある場合、「新型コロナウイルス感染が疑われる場合の本人の行動フロー」に従って行動し、発生状況を健康管理担当者が T-ACT 推進室へ必ず報告すると同時に、活動を停止する。
- ・管理・回収を行う参加者は事前に運営側で把握した者のみとし、参加者には事前に、状況によっては参加が認められない場合があること、マスクを着用すること、開催 2 週間前に発熱や体調不良の症状がないことを周知しておく。
- ・活動当日には、当日および活動 2 週間前の発熱、体調不良の症状の有無を確認する。
- ・活動履歴担当者を定め、日付、場所、時間、参加者氏名、手で触れることのできる距離で 15 分以上の接触があったものに関する情報を記録し、保管する。
- ・活動中は、マスクの着用、消毒を徹底し、ソーシャルディスタンスを保ち活動を行う。
- ・十分な換気を行う。
- ・参加者の名簿を作成・管理する。
- ・使用物品は基本個々で持参し、共有しない。共有した場合は、使用後に消毒を徹底して行う。
- ・飲食や大声を出す者がいたら注意を促し、改善されなければ退室措置を行う。
- ・使用する学内や他の施設が定めたガイドラインに従う。
- ・活動終了後は、T-ACT 推進室へ活動終了報告を行う。また、プランナーは活動終了後 2 週間の時点で参加者に感染の有無の確認を行い、結果を T-ACT 推進室へ報告する。
- ・回収ボックスは、初めから上部に穴が空いているものであり、不特定多数の方がボックスに触れずとも、使い捨てコンタクトレンズの空ケースをボックスの中に入れることができるものを使用する。

**アイシティ ecoプロジェクトとは？**

使い捨てコンタクトレンズの空ケースを回収し、リサイクル工場にて再資源化。その対価は、視力をふたたび取り戻したいと願う方々のために「(公財)日本アイバンク協会」へ全額寄付しています。

**3つの社会貢献**

- 1 CO2の削減** 使い捨てコンタクトレンズの空ケース回収・再資源化によるCO2削減に貢献
- 2 障がい者の自立・就労支援** 雇用促進や小物の買取り等を通じ、全国の障がい者の自立・就労支援に貢献
- 3 日本アイバンク協会への寄付** 空ケースの対価を日本アイバンク協会に全額寄付し、人々の眼の健康に貢献

活動報告

実際の活動内容

コンタクトレンズ専門店「コンタクトのアイシティ」が行なっている「アイシティ eco プロジェクト」に参加し、活動する。

コンタクトレンズの空ケースの回収ボックスを大学構内の13箇所に（一の矢学生宿舎の共用棟に2箇所、平砂学生宿舎の管理事務室前に1箇所、グローバルヴィレッジの洗濯室と管理事務室に5箇所、第一エリア食堂に1箇所、第二エリア食堂に2箇所、医学食堂に1箇所、カスミ筑波大学店に1箇所）7月中旬から9月末まで設置する。ボックスは、アイシティから提供を受けた。

また、設置後は2週間に1度、それぞれの設置場所まで回収ボックスを確認しに行き、定期的にチェックを行なった。ボックスからの回収は、ボックスを確認しに行った際に、ボックス内が満杯になっていた時のみ回収を行なった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

企業の活動を学校内で行うにあたり、この活動が企業が主体となった活動ではなく、学生が主体となって活動を行なっているものであるということが分かるようにすること。

筑波大学構内はとても広く、様々な箇所に回収ボックスを設置するとすると、回収ボックスの確認に行くことに困難が生じると考えられた。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

企画は企業のものを取り入れるとしても、企画名には「inつくば」を加えることが必要であった。また、ポスターは企業が作成したものを使用せず、全て自分で一から作る必要があった。

また回収ボックスの管理としては、設置する場所を学生が使用する頻度の高い場所のみの設置とし、設置場所を極力少なくした。そして、回収ボックスの確認に行くことに困難が生じないように、プランナーとオーガナイザーの人数や住んでいる場所等をふまえ、設置場所も決めた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

私が、この活動を開始しようと思った時には、9割の授業がオンライン授業であり、大学内に知り合いがいない状態であったため、活動を始めることに不安があった。しかし、活動をしたいということをも T-ACT フォーラムの先生に相談したことによって、企画内容に関するだけでなく、どのようにしたらこの活動に参加してくれるオーガナイザーを見つけることができるかなどといったことに関して、様々なアドバイスをくださり、少しずつ企画を立てていくことができた。そのことから、私は「やってみたい」と思ったことを一人で思い続け考えていだけでなく、自分が話しやすい誰か一人に伝えることで、そのことは大きく実現につながると実感した。

また、この活動を考え始めた時には一人で、一人で行っている時には、他学類のことが分からず、どうすることがベストなのか、どのようにしたらより回収することができるのか、私が行おうとしている活動は無事実施できるのか、多くの不安があった。しかし、オーガナイザーとして参加してくれる方が増え、その方々と一緒に企画を考えていくと、不安を共有することができ、その不安に対してどうすべきか話し合うことができたことで、企画に対してより前向きに考えることができるようになった。

今まで私は、自分がしたいと思ったことは、自分でしっかりと計画等を考えあげた上でチームのみんなに伝え、自分が主導になってすべきだと考えていた。しかし、今回の活動で、チームのみんなを頼ることの重要性に気づいた。一人で考えず、チームのみんなで考えることで一人では考えられないようなアイデアが生まれる、みんなで考えることで企画に対して一丸となって活動を実施することもできる、そして企画を行うにあたり生まれる不安や喜びを共有することで不安は和らぎ、喜びは何倍も大きく感じることもできる。このように、一人で行おうとせず、チームみんなに頼り、行なっていくことは何かを行うにあたりとても重要なことである。今後ボランティア活動を行なっていく際、ボランティアだけでなく、看護学類で実習等を行なっていく際にも、今回気づいたことを活かしていきたいと感じた。

参加者への影響

この活動には不特定多数の方が、コンタクトレンズの空ケースを回収ボックスに入れるという形で参加してくださった。

筑波大学では多くの方がコンタクトレンズを使用されていると思うが、コンタクトレンズの空ケースがリサイクルに適した素材であること、障害者の自立・就労支援へと貢献できること、アイバンク協会へ寄付されることをご存知の方は少ないだろう。

この活動を通して、コンタクトレンズの空ケースを寄付することで多くのことへ貢献できることを知っていた

だけたら幸いである。また、コンタクトレンズだけでなく、コンタクトレンズのような自分が今使っている身近なものを捨てるのではなく、再利用できるような方法はないか考えるきっかけにもなっていれば幸いである。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

筑波大学で活動を実施していくことは、初めはとても大変で何からしたらいいのか分からず、やりたい気持ちがあったとしても実際にそれを行動に移すことが難しいと感じる場合が多いと思う。しかし、ほんやりとでもやりたいことがあれば、それを T-ACT の先生に伝えたり、仲の良い友達に話すことで、その企画は必ず実現へと近づけることができる。プランナーだからと、自分の活動に気負わずに、たくさん先生やオーガナイザーに相談して、企画の立案を進めて欲しい。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

自分が行いたいと思ったことがあったとしても、大学で行うとなると誰に言えば良いか分からず、結局行えずに大学生活が終わるということも多いと思う。しかし、T-ACT を利用したことで、大学であっても自分が行いたいと思った活動を実施することができて、とても大きな経験となった。また、T-ACT を利用する様々な学年、学類の知り合いができ、知見を広げることもできた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



アイシティecoプロジェクト
in つくば
eco
プロジェクト
in つくば

コンタクトの空ケース回収へのご協力をお願いします

3つの社会貢献
①CO2の削減 ②障がい者の自立・就労支援
③日本アイバンク協会への寄付

お願い
アルミシールは完全にはがしてお持ちください。

回収可能
アルミシール、
レンズの残りが無く
空ケースのみの状態

T-ACT
つくばアクションプロジェクト

プランナー：織田くれは
連絡先：tsuku.recycle@gmail.com

実施番号：20013A
開始2021/09/30まで



つくばミーティング!! (21002A)

T-ACT プランナー 高梨 宏祐 (生物資源学類2年)

活動目的

コロナ禍で入学式や対面授業が行われず、新たな友人関係が十分に環境しづらい状況にあった2020年度入学生(現2年生)を対象にゲームや自己紹介などを含んだイベントをオンラインと対面の双方から企画します。まだオンライン授業が多い中で、実際に通学可能となった際にイベント後も続くような友人関係を構築する手助けをすることが目的です。

具体的な活動計画

【活動内容】

○対面実施の場合

交流会(以下イベント)の参加者を募り、事前に趣味などをアンケートし、そのアンケートをもとに、イベントを行う。

イベントは第1部～第3部に分けられ、3日間で1部ずつ進行する。

第1部(1時間)

- ・受付、本人確認
- ・安全講習…友人関係を気づくにあたって注意すべき点を参加者に確認、理解してもらう。
- ・自己紹介ピンゴ…応募時に回答してもらったアンケートをもとにピンゴのマスをつくり、各マスの条件にあてはまる人物を探す。他の参加者に話しかける際は必ず自己紹介をする。

第2部(1時間)

- ・インディアカ…あらかじめ振り分けたチームごとにインディアカを行うことでチーム内での協力や交流を促す
- ・パートナー探し…「山」と「海」のように対になる2枚一組の紙を用意し、参加者の背中に貼る。参加者は自分の背中に書いてある単語をほかの参加者に聞いて回ることによって対の紙をもつ人を探す。但し、他の参加者に話しかけるときは必ず自己紹介をする。

第3部(1時間)

- ・宝探し…会場内に宝とヒントを隠し宝を見つける。ヒントは参加者にあらかじめアンケートで聞いた内容などから出題する。あらかじめ振り分けたグループごとに行う。
- ・イベント後アンケート記入
- ・解散

【具体的なスケジュール】

- ・6月下旬企画運営に関する準備
- ・6月下旬～7月上旬 イベント参加者募集、準備
- ・7月上旬～7月下旬または夏季休業中 イベント第1回開催

※2回目以降の開催は1回目の様子を見て予定

参加希望者が12人を上回る場合は複数回に分けて開催する

○オンライン実施の場合

オンラインの場合は1日のみの開催とする。

【イベントの時間設定】

①全体で簡単な自己紹介およびイベントに関する注意事項説明(15分)

②グループに分かれてミーティング(30分)

- ・自己紹介(5分)
- ・ゲーム(20分)

ゲームでは事前に回答してもらった複数のアンケートの中から各参加者が自分の所属するグループの共通点を話し合いを通じて探す1回目と、アンケート以外での共通点を探す2回目に分かれる。

- ・グループ内フリートーク(10分)

※対面実施かオンラインかの判断については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて慎重に判断する。開催1週間前にT-ACTと相談して決定する。

※対面実施時に雨天の場合はその日はオンラインでの開催とする。

※オンライン時は参加者全員がカメラをオンにするため、背景画像等に留意すること。

※参加希望人数が上限を超えた場合、1日に複数回開催する場合がある。

※原則飲食禁止であるが、他の参加者との距離を十分に保ったうえで、熱中症対策の観点から水分補給は可とし、参加者は各自熱中症対策を講じる。

【企画運営に関する話し合いについて】

基本的には Teams を用いてオンラインで行う予定。

【対面でのイベントに参加不可とする条件について】

- ・体調不良である場合
- ・参加者が過去2週間以内に新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者と判断される場合

【学則に違反する行為への対策について】

- ・イベント応募時に事前に学則に違反する行為の禁止を周知
- ・イベント開始時に参加者に学生証の提示
- ・イベント冒頭に学則に違反する行為に気を付けるよう呼びかけ
- ・大学の相談窓口を紹介
- ・グループに分かれる際にはオーガナイザーが必ず同席し、会話を確認
- ・オーガナイザーに学則違反行為対策担当者を任命しミーティング後1週間程度は新しい交友関係について参加者に困ったことがないか連絡を取る
- ・実際に参加者から相談があった場合は大学の相談窓口につなぐ

活動場所

対面実施時は虹の広場（学生生活支援室に許可取得済み）
オンラインでは Microsoft Teams を利用する予定

活動期間

2021/07/01～2021/09/30

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：松本いずみ（医学類2年）、菅原みく梨（知識情報図書館学類2年）、阿部響介（生物資源学類2年）、王梓涵（人文学類2年）、梶原陵雅（知識情報図書館学類2年）、畠山菜那（比較文化学類1年）
P：中村顕（生命環境系）

備考

- 感染防止対策
 - ・活動の前後で必ず手指の消毒を行う
 - ・マスクを着用し、パーティションを利用して行う
 - ・部屋の換気をし、密集・密閉を避け、飲食は禁止する
 - ・参加者は必ず過去2週間以上の健康観察記録をつけ、持参するとともに、担当者が記録表を管理する
 - ・受付時に検温し、体調不良者は出席しない。また、事前に登録した参加者のみ出席可能
 - ・話し合いにおいて接触があった場合は記録する。また話し合い後2週間は体調に憂慮し、報告する
 - ・物品の共用は避ける

つくば
ミーティング!!

コロナ禍で大人づくりが難しい状況は
2021年度の活動を再開し、活動を再開

8月29～31日
虹の広場

1日目自己紹介
2日目インディアカ
3日目宝探し

オンライン開催の場合
Microsoft Teamsを使って交流できる
ゲームを計画しています！
※感染状況、悪天候によりオンライン開催の場合有り

QRコード

参加費はごちから
連絡先: 2011275@tsukuba.ac.jp
プランナー 高橋宏祐
(生物資源学類2年)

承認番号: U20027
期間: 2021/9/30迄

T-ACT
つくばアクションプロジェクト

- ・活動記録担当者を定め、活動形態、活動場所、参加者、人数、活動内容などを記録する。
- ・感染症対策の観点から参加人数が12人を超える場合は複数回に分けて実施する。その他筑波大学およびT-ACTの設定した感染防止対策ガイドラインに従う

○その他注意点

- ・対面、オンラインに関係なくイベント内で自己紹介を行う際は個人情報（名前、所属学類など）を最小限にとどめ、あらかじめ自己紹介の項目は企画側から参加者に提示する。オンライン実施時には Teams で本名、連絡先などが確認できてしまう点をあらかじめ参加者に伝える。
- ・オンライン実施時には自宅からの参加が考えられることから、参加者にはあらかじめバーチャル背景や画面に映っても構わない場所から参加してもらうことを推奨する。
- ・参加者募集時には「オンラインのみ参加」、「対面のみ参加」、「両方参加」から選べるようにする。参加者の数に応じて実施するか決める。

活動報告

実際の活動内容

コロナ禍で入学した2020年度入学者向けに友人作りの場を提供する。具体的には虹の広場でのゲームなどを企画し、参加者どうしが交流できる場を設ける。プランナーやオーガナイザーはイベントの企画、運営および広報活動を行う。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒68%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

広報をしても実際に応募してくれる学生は少なく、想定人数よりも集まらなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

参加申し込みの締め切り日をイベント1週間前から前日に変更し、LINEなどを用いてイベント前日に呼びかけを繰り返した。その結果前日に応募者が増加した。



活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

私がつくばミーティング!!を企画しようと思ったのは実家から通学している私にとってコロナ禍で友人を作るのが難しいと感じたからです。大学周辺で生活をしている学生と実家から時間をかけて車や電車で通学している生徒ではライフスタイルが異なることが多いと思います。特に新型コロナウイルスの蔓延状況下ではオンライン授業が多く、大学になかなか通えていないという学生がいることも事実です。このような実態に即し、学生どうしで交流できる場が必要なのではないかと考えていました。私自身、コロナ禍での友人関係には非常に悩んでおり、学生間での交流会があれば参加したいと思っていましたが、なかなかそのような機会には恵まれず、結果的に自分で企画してしまおうと決断しました。

実際に企画してみると、自分にはオーガナイザーとして協力してくれる友人がいたことに改めて気づかされました。また他のT-ACTのイベントに参加して手伝っていただける学生を探したため、食糧支援事業などにも携わることができました。この食糧支援事業ではオーガナイザーとして協力してくださった留学生の王さんに出会うことができ、つくばミーティング!!を運営して頂いたオーガナイザーの学生間でも新たな交流の場を生むことができました。わずかながらも学生の方々にとってこのような場を創出することができたことは私にとって非常に貴重な経験になりました。

参加者への影響

オーガナイザーとして参加いただいた学生のみさんは他の学類の学生と話をしてみたいという方が多く、つくばミーティング!!を開催するモチベーションに繋がりました。特に王さんには企画終了後に、留学生にとってもなかなか学生と交流できる場は少なく、非常に良い経験になったとおっしゃっていただき本当に良かったです。普段生活している中では留学生の方と深く交流する機会是我々が積極的に行動しなければ得られません。しかし、つくばミーティング!!ではオーガナイザーにとっても、参加者にとっても応募するだけで様々な学生と関わることができるのということの一つの魅力ではないかと感じました。オーガナイザーは私のアルバイト先や部活などの縁で声をかけた学生が多く、オーガナイザーどうしで元から親交があった方は一人もいませんでした。しかし、運営や広報活動をとおして、一緒にイベントを考えたり、ポスターを張りにいたりするなかで仲が深まったのはとてもうれしかったです。

未来のプランナーに伝えたいことがあれば自由どうぞ

T-ACTの魅力はなんといっても「気軽さ」にあると思います。とりあえず先生に相談してみる。とりあえず企画書を書いてみる。とりあえずオーガナイザーを集めてみる。とりあえずいろいろ考えてみる。そうやって最終的に企画が破綻してしまっても誰も責めませんし、難しいなと分かればそこでやめてしまっても問題ありません。ですので、少しでも興味があること、やってみたいことがあれば挑戦してみた方が良いと思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

先生方がとても丁寧に支援してくださいました。初めはこんなことをしてみたいと T-ACT の担当教員だった先生にメールを一通送信しただけでしたが、そのあとにどんなことをすればいいのか、どうすればもっと良い企画になるのかを教えてくださいました。私があきらめない限りは熱心に接してくださいましたし、T-ACT の備品を借りることができたのも大きな魅力だと思います。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒4



T-ACT
つくばアクションプロジェクト

つくば ミーティング!!

日程:11月13日・14日(土日)
14:00から

場所:虹の広場
参加費:無料
対象:2020年入学生
内容:インディアカなどのミニゲーム

応募締め切り11/12 10:00まで!

学園祭に参加した人、
色々な学類の人と交流したい人ほせ!!

承認番号
U 20027

つくばマナトピア～学びの祭典～ (21003A)

T-ACT プランナー 本間 伸太郎 (生物資源学類3年)

活動目的

筑波大学には、25の学類・専門学群、250を超えるサークルがあり、110以上の国と地域からの留学生がいる。そして、様々な文化や学術を学ぶ環境が充実しているという特徴がある。

筑波大学で学んでいる学生が一人一人の持ち味を生かして、地域の子どもたちに、自分の「学び」を共有できる場を提供することが本プロジェクトの目標である。

この場合の「学び」とは、国語や数学といったいわゆる「教科」に限定されず、それぞれの専門分野の内容はもちろん、音楽やスポーツ、はたまたゲーム実況など、これまで経験してきた全てのものが対象になる。

マナトピアでは、サークルや有志と協力し、それぞれの得意分野を活かしたワークショップを開催する。子どもたちは、様々な分野に触れ、将来の「趣味・特技」になるものに会うことができる。そして、私たち大学生も、人に伝える力を向上させたり、サークル活動や趣味をより発展させたりすることができる。そういった「学びの祭典」の開催を目指していきたい。

その第一歩として、本企画では次の2つのワークショップを実施する。1つ目は、スケルトンエッグ。卵を酢などの液体に数日漬けることで、卵の中身が見えるようになる実験である。この実験はアメリカの理科の授業で行われており、海外の理科の授業を体験したり、卵を出発点として、生物学の面白さを実感することを目的とする。2つ目は、Let's introduce yourself in English!。英語で自己紹介できるようになるフレーズを習得し、自己紹介を通して、英語のコミュニケーションの楽しさを感じてもらうことを目的とする。

具体的な活動計画

【準備】

7月16日(金)：広報チラシ、説明資料 準備開始

7月26日(月)：広報チラシ・参加申し込みフォーム (Google フォーム) 完成

8月上旬：掲示依頼・参加申し込み開始 (メールアドレスを記載してもらう)

8月中旬：参加締め切り参加者へ案内と ZOOM の使い方説明を送付 (ZOOM の使い方 : ZOOM の基本操作とバーチャル背景の設定方法など)

【開催日】 8月28日(土) 8月31日(火)

8月28日(土)

・ Let's introduce yourself in English! 10:00～11:00 (開場 9:30)

・ スケルトンエッグを作ろう! 13:30～15:30 (開場 13:00)

8月31日(火)

・ スケルトンエッグを作ろう! 結果の共有 10:00～11:00 (開場 9:30)

【各ワークショップの当日の流れ】

8月上旬に ZOOM の URL と ZOOM の使い方説明を各参加者にメールを送付する。両日ともに、ZOOM を用いて行う。

原則、参加者・企画者ともにカメラをオンにして参加する。参加者にはバーチャル背景を設定してもらう。

ワークショップ中の補習や個別対応のためにブレイクアウトルームに最低企画者を1人配置する。

親御さんに ZOOM のセッティングを事前に準備してもらった上で当日、以下の流れに沿って行う。

【スケルトンエッグを作ろう!】

当日の流れ 実験と結果の共有を日を分けて行う。

実験日 8月28日(土) 13:30～15:30

- ① アイスブレイク (自己紹介、多様性ゲーム) (20分)
- ② 海外の理科授業紹介 (自然選択、顕性・潜性) (15分)
- ③ 実験の紹介と説明、注意事項の説明 (10分)
- ④ 実験 (容器に液体を入れて卵を入れる) (5分)
- ⑤ 休憩時間 (10分)

結果の共有日 8月31日(火) 10:00～11:00

- ① 完成図の紹介と解説 (30分)
- ② 学びの共有 (20分)

【Let's introduce yourself in English!】

開催者側は、基本英語で説明した後に日本語で訳を言う。

- ① Hello! を言う練習（5分）
- ② I'm__ と自分の名前（あだ名でも可）を英語で言う練習（5分）
- ③ Nice to meet you. を言う練習（3分）
- ④ Hello! I'm__ . Nice to meet you. を続けて参加者は親御さんと一緒に練習してもらう。（5分）
- ⑤ [ワードタイム]
 - (1) スライドで動物のイラストを画面共有し、英語の発音を講師が説明する。その間、参加者は親御さんと一緒に正しい発音で練習する。（8分～10分）(ゾウ、ライオン、ネコ、サル、ゴリラ、トリ)
 - (2) 全員で、ランダムにスライドに写った動物を英語で発音してもらう。（理解度確認・3分）
 - (3) ランダムに参加者全員または数名を指してスライドの色は英語で何だろうなクイズをして理解定着度を確認する。（3分）
- ⑥ ジェスチャーゲーム（10分）[ルール]

講師は動物のマネ & ヒントを英語→日本語の順で言う 例：（鳥が羽ばたく真似をしながら）I can fly in the sky!（私は飛べるよ！）

参加者は英語で正しい動物の名前を英語で言う→全部の動物で遊べるまで繰り返す

 - (1) 日本語でルール説明とデモをする。
 - (2) 質問はないか確認
 - (3) ゲーム開始
- ⑦ [フレーズタイム] ～「はい」と「いいえ」を英語で言おう！～（10分）
 - (1) “Yes” の意味と使い方を説明（3分）
 - (2) “No” の意味と使い方を説明（3分）
 - (3) ランダムに参加者全員または数名を指してスライドの色と講師が言った色は合っているかなクイズをして理解定着度を確認する。（5分）
- ⑧ まとめ

本日学んだことを復習する。

 - ・ Hello. I'm__ . Nice to meet you.
 - ・ 色の名前
 - ・ Yes. No.

課題

家族の方に、学んだ英語を使ってみる。



活動場所

参加者：ZOOM を用いて各家庭から参加する。

企画者：企画によって以下のように変える。

スケルトンエッグを作ろう！は、学内の教室（2D102～105）の任意の教室で行う。Let's introduce yourself in English! は、各自の家からオンライン参加する。

活動期間

2021/05/31～2021/09/30

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：Amehed Poplar Hana（生物学類3年）（スケルトンエッグ 発案者）、大山瑠璃香（地球規模課題2年）（Let's introduce yourself in English! 発案者）、佐久間弘人（人文学類3年）、関谷有希（化学類3年）、荒金志紀（社会工学類2年）、永島日向子（比較文化学類2年）

発案者が企画したワークショップについて、メンバー全員が協力して企画・運営を行う。

P：立花敏先生（生命環境系）

備考

【企画実施時・準備時の新型コロナウイルス感染予防対策】

・本企画において、参加者はZOOMを通して、各家庭から参加するため、参加者の健康管理は参加者自身或いは参加者の保護者が行うものとする。家庭単位での参加を呼びかける（例えば、友人同士の参加は推奨しな

い)。もし、感染の疑いがある場合は、参加を認めない。その旨を事前に伝達する。

- ・プランナー及びオーガナイザーは、健康観察記録表を用いて企画2週間前から体温測定を行う。また、対面で準備あるいはミーティングを行う際も同様に2週間前からの体温測定を行う。プランナーは健康管理担当を兼ね、健康観察記録の確認と管理を行う。
- ・企画前日までに健康観察記録表をT-ACT推進室へ報告する。
万に一つ、プランナー及びオーガナイザーに感染の疑いがある場合、「新型コロナウイルス感染が疑われる場合の本人の行動フロー」に従って行動し、発生状況を健康管理担当者がT-ACT推進室へ報告し、活動を停止する。
- ・当日の企画運営者は健康観察記録表において過去2週間の発熱・体調不良が認められない者のみとする。当日、健康観察記録表を通して、上記の旨を確認する。
- ・活動履歴担当者をおき、対面で行う企画・準備・ミーティングの日付、場所、時間、参加者氏名、手で触れることができる距離で15分以上の接触があったものに関する情報を記録し、保管する。
- ・対面での準備・ミーティング時にはマスクの着用、使用器具の消毒を徹底しソーシャルディスタンスを保ち、活動を行う。
- ・「スケルトンエッグを作ろう！」の実施にあたり、企画運営者は学内の教室に集合するため、ソーシャルディスタンスを保った上で、発表者のみマスクを外し、パソコンを通して参加者にプレゼンテーション・パフォーマンスを行う。その他の企画運営者はマスクを着用する。
- ・「Let's introduce yourself in English!」は企画運営者は各自の家から参加するため、マスクの着用は個々に一任する。企画運営者同士で集合することはしない。
- ・30分に1度、5分程度の換気を行う。
- ・参加者の名簿を作成・管理する。ただし、オンラインであるため、氏名とメールアドレスに止める。
- ・使用物品に対して、徹底したアルコール消毒を行う。
- ・活動終了後、T-ACT推進室へ活動終了報告を行う。また、活動終了後2週間時点の企画運営者の感染の有無の確認を行い、結果をT-ACT推進室へ報告する。

活動報告

実際の活動内容

【開催したワークショップ】

- ・ Let's introduce yourself in English!
- ・ スケルトンエッグを作ろう！

【企画までのスケジュール】

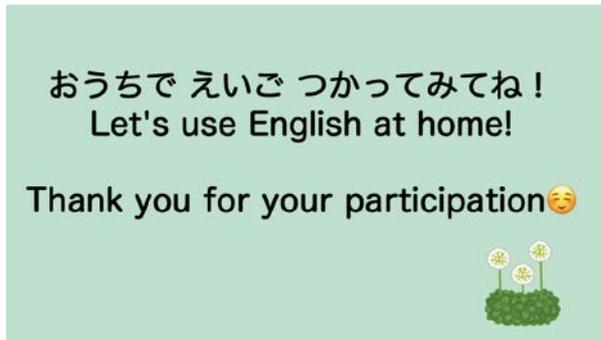
- 4~6月 : ワークショップ内容の立案、打ち合わせ
- 7月 : 開催日の決定、ポスターの作成
- 8/4~8/25 : ポスターの掲示依頼、参加者募集開始
当日のプログラム、ZOOMの使い方ガイド作成・配布リハーサル・当日のパワーポイント・教材づくり
- 8/28 : マナトピア開会
- 8/31 : スケルトンエッグを作ろう！ 実験結果の共有 マナトピア閉会

【企画準備】

- ・ ポスターの作成と広報
- ・ 参加者への案内送付
- ・ ワークショップの準備
- ・ ミーティング

【企画】

- ・ Let's introduce yourself in English!
- ・ スケルトンエッグを作ろう！



企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

オンラインだったこともあり、企画者全員が集まって話し合う機会がなかなか取れず、メンバーの意思確認が難しかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

昼休みの時間など、集まりやすい時間に集まって話し合ったり、LINEの投票機能を通じて、意思を確認したりするなど可能な限り、意思疎通を図れるようにした。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

私にとって、マナトピアは、「協育」を実感する体験だった。

マナトピアは当初、SNSで参加を呼びかけ、サークルの活動の一環として行う予定だった。しかし、コロナ禍ということもあって、なかなか動き出すこともできず、またその状況をメンバーに相談することができず、結局サークルの活動から切り離し、有志が集まって行う活動という形をとることになった。

その後は、メンバーでワークショップの内容や企画の日程、構成などを繰り返し相談したり、打ち合わせたりして、開催することができた。

決して、自分一人で企画や運営を全部やることはできない。枠組みや下地を含めて、みんなで考える。一人ひとりの強みや持ち味を活かして、役割を分担する、その大切さを、このマナトピアを通じて実感することができた。さらに、マナトピアを開催するにあたって、T-ACTの先生方、つくば市市民センターや生涯学習課の方々など、様々な方々からご協力をいただいた。イベントを開催するにはたくさんの方々との連携することが重要であり、そのつながりが強く、広いものになればなるほど、充実したイベントが開催できるのだなと思った。その上で、情報共有や相談をあまりできなかったことは大きな反省点である。一人で抱え込まず、まずは周りに相談する。連絡事項や決定事項をすぐに共有する。これは自分の生活の中ですぐに実践するべき行動だと感じる。

また、実際にイベントを開催する中で、参加者から我々自身が学ぶことも多々あった。スケルトンエッグを作ろう！で中学生の参加者や観察記録をエクセルにまとめていたり、Let's introduce yourself in English!の幼稚園の参加者が新しいフレーズを覚えたりと、「学び」は人それぞれ多様な広がり方があるのだなと実感した。

このように、周りの人と協力する、そして学び合う、という「協育」の大切さを活かして、今後の大学生活や教師生活に活かしていきたいと思う。

参加者への影響

一緒に活動してくれた仲間も、マナトピアに参加して下さった方々も、学ぶことの楽しさや教える（伝える）ことの楽しさを実感してくれていた。

特に、参加者の多くは、イベント終了後に学んだことを活かして、更なる学びへと発展させようとしていた。幼稚園児の参加者は、「Let's introduce yourself in English!」の後、学んだ英語を保護者の方と練習し、英文「I have four legs.」をいえるようになった。中学生の参加者は「スケルトンエッグをさがそう！」のスケルトンエッグの観察で、卵の変化の様子を数時間ごとに細かく観察し、その様子を写真とともにエクセルに記録するなど、こちらの想像を遥かに超えるレベルで観察記録をつけていた。

また、一緒に活動してくれた仲間も、始めはなかなか集まれなくて、方向性が見えなかったり、実際に顔が見えないこともあって不安な声が多かった。しかし、「子どもが好き」、「教えることが楽しい」という思いはみんな共通していて、リハーサルをやったあたりから、徐々に楽しい雰囲気になり、本番では、全員が笑顔で、参加者が楽しめるように各々の力を発揮していた。

未来のプランナーに伝えたいことがあれば自由どうぞ

行動すれば、叶います。「こんなことやってみようかな」、「これ面白いな」と思ったらまず、T-ACTに足を運びましょう。田中先生や木田先生、佐藤先生をはじめ、T-ACTの先生方が力になってくれます。企画や広報の作成、市役所との連携など、様々な場面でお世話になりました。

しかし、一番大切なのは「動く」ことだと思います。これは私の大きな反省点ではありますが、迷ったら周りのメンバーやT-ACTの先生方に相談する。これが大切だと思います。コロナ禍ということもあって、なかなか一歩踏み出せずにいましたが、意外とやってみると多少の失敗はあるかもしれませんが、うまくいくこともあります。

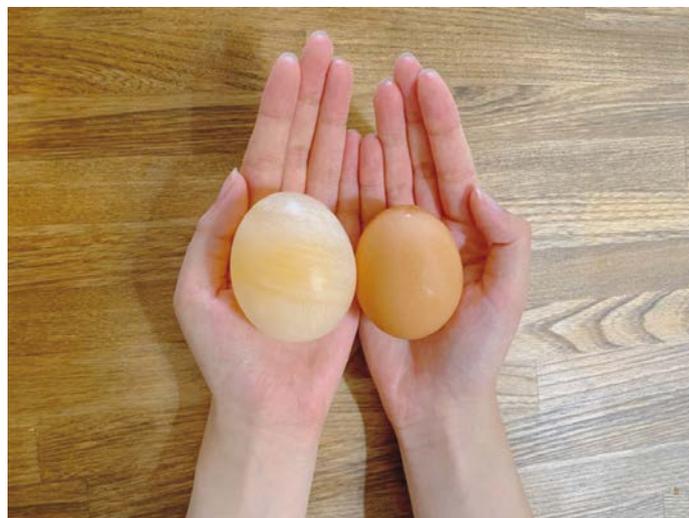
T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

企画段階から実行段階まで様々な場面でお世話になりました。ほとんど内容や計画が決まっておらず、迷っていたときに、この活動のコンセプトに共感してくださり、「企画」という形にしてくれました。T-ACTの先生方のお力なしでは、きっと「計画倒れ」になっていたと思います。また、企画実現までのスケジュールや必要なことを逆算してくださるなど、企画全体のマネジメント面でも非常に助かりました。また、市役所や市民活動センターなど学外の方と繋いでくださったり、印刷機を利用させていただいたりなど、学生だけの力ではなかなかできない面もサポートしていただきました。

最後に、田中先生や木田先生、佐藤先生をはじめT-ACTの先生方には本当にお世話になりました、ありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4



筑波大学かぶき會 (21004A)

T-ACT プランナー 加藤 悠介 (障害科学類2年)

活動目的

私は肢体不自由の障害があり、リハビリテーション・習い事の一環として日本舞踊・歌舞伎に親しんできた。その中で、歌舞伎の魅力をより多くの人を知ってもらいたいという思いが生まれた。筑波大学には、能や狂言の研究会はあっても、歌舞伎の研究会はない。

最近はさまざまな新作が上演されているが、まだまだ「敷居が高い」「難しい」というイメージが強いのが現状である。

歌舞伎は色々なジャンルの劇に分かれており、それぞれの特徴もとてもユニークである。

本企画では、さまざまな人と交流を深めるとともに歌舞伎の面白さや幅広さ・奥深さを共有することを目的とする。

具体的な活動計画

加藤が持っている歌舞伎の映像と、YouTube チャンネル『歌舞伎ましょう』にある映像のいくつかを抜粋し、オンラインで鑑賞する。

「歌舞伎とは何か・どのような歴史があり、ジャンルに分かれるのか」についてスライド等を用いて説明し、その後鑑賞に移りたいと考える。学群や学年・言葉の垣根を超えて、さまざまな方と交流を深めるきっかけにもしたい。

なお、映像使用については、松竹株式会社と日本俳優協会に問い合わせし、6月20日の時点で許可を得ている。

第1回は8月30日を予定している。

【当日の流れ】Microsoft Teams で行います。

- | | |
|-------------|-------------------------|
| 14:00~14:10 | 挨拶・運営陣自己紹介 (オーガナイザー主導) |
| 14:10~14:55 | スライドと参考資料・映像を用いた発表 (加藤) |
| 10分 | 休憩 |
| 15:05~15:40 | 映像鑑賞 (解説付き) |
| 15:40~ | 交流会、小道具紹介 |
| 16:00 | 解散 |

15:40からの交流会では、音声をオンにさせていただいて楽しくお話しできればと思います (カメラのオン・オフについてはご自身の判断にお任せします)。発表中でも、チャット画面での感想・つぶやきの共有やリアクションボタンは大歓迎です！参加して下さるみなさんのリアルタイムでの思いをぜひお聞かせいただき、楽しく歌舞伎を知る場としてこの「かぶき會」が機能すればいいと考えております。

ご興味を持ってくださった方は、以下のリンクから事前アンケートに答えていただくとありがたく存じます。

https://docs.google.com/forms/d/1L6lksTIYjD4AFvH9r-4q-V_SJDT-rJRyniaFfV9eS-8/

そのほか、ご質問等ございましたら s2011887@s.tsukuba.ac.jp までご連絡ください。



活動場所

参加者：Microsoft Teams を用いて各家庭から参加する。
企画運営者：プランナーの居室からオンラインで参加する。

活動期間

2021/08/01～2021/09/30

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：佐々木湧人（障害科学類 2 年）、野月和（教育学類 2 年）
P：大倉浩先生（人文学群）

備考**【企画実施時・準備時の新型コロナウイルス感染予防対策】**

- ・本企画において、参加者は Microsoft Teams を通して、自宅から参加するため、参加者の健康管理は参加者自身が行うものとする。もし、感染の疑いがある場合は、参加を認めない。その旨を事前に伝達する。
- ・プランナー及びオーガナイザーは、健康観察記録表を用いて企画 2 週間前から体温測定を行う。また、対面で準備を行う際も同様に 2 週間前からの体温測定を行う。プランナーは健康管理担当を兼ね、健康観察記録の確認と管理を行う。
- ・企画前日までに健康観察記録表を T-ACT 推進室へ報告する。
万に一つ、プランナー及びオーガナイザーに感染の疑いがある場合、「新型コロナウイルス感染が疑われる場合の本人の行動フロー」に従って行動し、発生状況を健康管理担当者が T-ACT 推進室へ報告し、活動を停止する。
- ・当日の企画運営者は健康観察記録表において過去 2 週間の発熱・体調不良が認められない者のみとする。当日、健康観察記録表を通して、上記の旨を確認する。
- ・活動履歴担当者をおき、対面で行う準備および企画当日の日付、場所、時間、氏名、手で触れることができる距離で 15 分以上の接触があったものに関する情報を記録し、保管する。
- ・対面での準備時、企画当日にはマスクの着用、使用器具の消毒を徹底しソーシャルディスタンスを保ち、活動を行う。
- ・参加者の名簿（氏名とメールアドレス）を作成・管理する。
- ・企画当日は、運営者はプランナーの居室に集合するため、ソーシャルディスタンスを保った上で、発表者のみマスクを外し、パソコンを通して参加者にプレゼンテーション・パフォーマンスを行う。その他の企画運営者は隣の部屋に移動し、マスクを着用する。
- ・参加者は自宅から参加するため、マスクの着用は個々に一任する。
- ・30分に 1 度、5 分程度の換気を行う。
- ・使用物品に対して、徹底したアルコール消毒を行う。
- ・活動終了後、T-ACT 推進室へ活動終了報告を行う。また、活動終了後 2 週間時点の企画運営者の感染の有無の確認を行い、結果を T-ACT 推進室へ報告する。



活動報告

実際の活動内容

第1回・第2回ともに、前半では作成した英語スライドに日本語での説明を加えながら、参考映像とともに歌舞伎の起源・歴史から今日に至るまでの変遷、また歌舞伎俳優の活躍について紹介した。10分間の休憩時間では、YOASOBIの楽曲と日本舞踊がコラボレーションした映像を流した。後半では、第1回は「助六由縁江戸桜」第2回は「助六由縁江戸桜」「助六曲輪初花桜」「伽羅先代萩」を自身の解説付きで断片的に鑑賞した。

第1回の交流会では感想を交換し合いながら小道具の紹介を行い、第2回では前回の内容に加えて「見得」「隈取」の実践を行った。両日とも大いに盛り上がり、予定時刻を10分ほど超過した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

私の解説音声、演目の音量にのみ込まれて思うように聞こえなかったこと。(準備期間)画面切り替えを含め、YouTube映像を流すまでに少し時間を要してしまったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

オーガナイザーとの話し合い・試行錯誤の末、PCとヘッドホンマイクの音量を調節するとともに、ところどころ映像を止めて解説することとした。準備の時間を2回設けたことが奏功した。

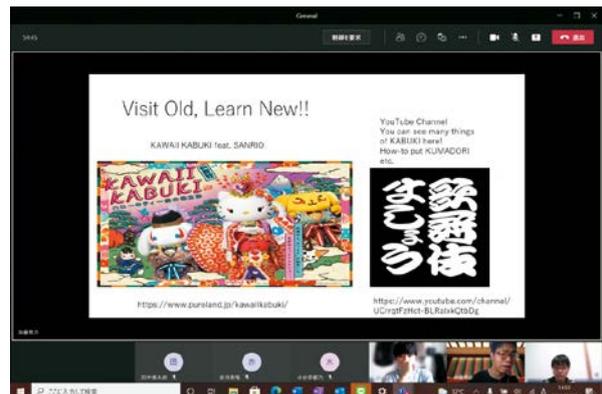
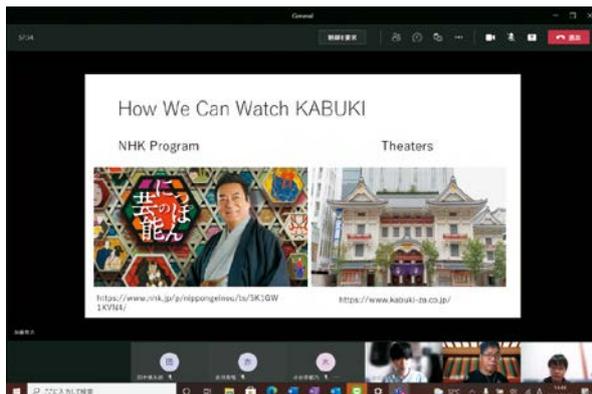
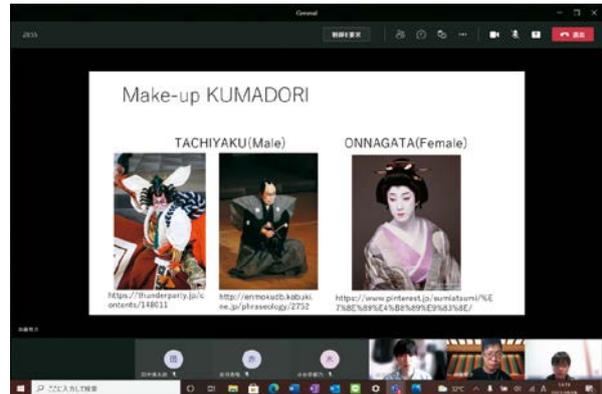
第1回のときにパートナーの先生から「あらかじめ映像を起動して一時停止状態にしておく」とアドバイスを受け、第2回で実践したところスムーズに進んだ。

上記2点について解決できた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今回かぶき會を通して、自分の好きな歌舞伎を広める経験ができ非常に良かったと思っている。学群生・大学院生、教職員など、さまざまな立場や国籍の人が来ることを想定して英語でスライド・アンケートを作成し発表したが、Jactat先生に「とても助かりました、理解がしやすかった」と言っていただけた。今後もこの方法で作成していきたい。さらに、Teamsのリアクションボタン・チャット欄を活用としたつぶやきも、會を進めていくうえでとても効果的だったなと感じている。リアルタイムで参加者の皆さんの反応を読み取り返信できるので、進行役としても非常に行きやすかった。



また、単なる演目の解説（＝インターネットで検索すればわかること）ではなく、歌舞伎役者さん側の工夫や知恵・演出にも焦点を当てて説明したところ、非常に好評であった。スライド作成の過程で、テレビドラマ・映画を例に現代の歌舞伎役者さんの活躍を紹介しようと思いつき実行してみたところ、とても良い反応をいただくことができた。「現代との接点」という視点は、伝統的なものを伝えるうえで非常に重要なのだと感じた。

會そのものの周知については、運営陣の個人の SNS で T-ACT に関する情報を発信するとともに、T-ACT の公式アカウントの方でも手助けをいただいたが、サイトからメールで申し込むことを知らない学生さんが多かったり、「参加したかったけど時間が合わない」「アルバイトが…」という方が多くいらっしまった。特に第 1 回開催日には教職課程の必修の集中授業が開講されていたとのことで、参加を見送られる方も多かった。

次回もし開催する際は、（集客数がすべてではないとはいえ）時間帯ならびに日程を今一度熟慮し決定していく必要があると感じた。周知方法については、オーガナイザーの佐々木さんから「かぶき會の公式 SNS アカウントを作ってみるのはどうか」という提案があったので、公式アカウントを作って活用していきたいなど考える。

かぶき會の運営・発表ができ、改めて「好きなものを人に伝える」ことの難しさ・楽しさを感じたが、伝えられる！という自信にもつながった。

日本の伝統文化を盛り上げていくため、今後も地道にコツコツとかぶき會の活動を続けていきたいと心から考える。

参加者への影響

オーガナイザーの二人は、当初歌舞伎俳優さんの名前を少し知っているという感じで、「Tim の発表を見て僕たちもいろいろと知りたい！」と興味を持ってきていたので、プランナーとしてはとてもありがたかった。

予行練習では全編を通すことはあえてしていなかったが、演出や音声の面でさまざまな意見や解決策を提案してくれ、二人と一緒に運営ができてよかったと感じた。會の最初では、簡単に 3 人が自己紹介をする予定だったが、予行練習で「歌舞伎にハマったきっかけや、この会の目的を少し詳しく説明してもいいかも」との提案があり、スライドを作って 4 分程度の自己紹介をすることにした。すると、そのスライドに興味を持って交流会で質問して下さる参加者の方もいらっしまったため、3 人で意見を交換し合い、すり合わせていくことの重要性を感じた。

参加者の方に事前アンケートを取ったところ、歌舞伎を趣味で見に行ったことがあるという方はほとんどおらず、学校の鑑賞会あるいはテレビで少し見たという方が多かった。が、活動の中で見得や立廻り・隈取などの技法を説明しつつ発表を行ったほか、ユーモアあふれる場面を鑑賞したことにより、事後アンケートでは全員が「歌舞伎のイメージが（大きく／少し）変わった」「次回があればぜひ参加したい」

「もっと歌舞伎を鑑賞したい」と答えてくださり、とても嬉しく感謝の想いに包まれた。活動の核となる「興味の扉を開く」というところを効果的に行えたと感じている。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

私のように、好きなことを工夫して伝えるということでも、また学問に関することでも、幅広い「やってみたい」を受け入れ、実現に向けて歩いていけるのが T-ACT です。「これでいいのかな」と悩む前に、自由に発想し、積極的に行動に移してみてください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

コンサルタントの先生を始め、サポートして下さったスタッフの皆さんが何回も親身に相談に乗って下さり導いて下さったおかげで実行へとつなげることができました。ありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● チュートリアル教育をみんなで考えよう！ (21005P)

T-ACT プランナー 坪内 孝司 (教学デザイン室長)・土井 裕人 (人文社会系助教)

活動目的

本ワークショップは、筑波大学の指定国立大学法人構想に盛り込まれたチュートリアル教育について学生の皆さんと一緒に考えることで、学生の意見やニーズをチュートリアル教育の導入に向けた今後の検討に役立てることを目的とします。

本学が構想するチュートリアル教育は、個々の学生(学群生)にチューター教員がついて寄り添って、これまでにない学びを実現しようとするものです。とはいえ、本当にそんなことができるのか、どうやるのかといった疑問や、筑波大学の教育はこうなってほしいなどの期待も学生の皆さんにはあるでしょう。本ワークショップでは、今後の筑波大学で目玉になりそうなチュートリアル教育と、筑波大学の教育の未来について一緒に考えたいと思います。

具体的には、学生と教職員がともに参加するオンラインセミナーを開催して、チュートリアル教育を中心に学生からのアイデアや意見を募ります。また、オンラインで可能な範囲で、筑波大学の教育の未来を当事者目線で考えるワークショップを行います。

具体的な活動計画

日時：2021年9月17日(金) 14:00~16:30 (予定)

場所：オンライン (Teams を予定)

対象：本学学生 (及び関係教職員)

【プログラム (予定)】 ※詳細は変更の可能性有り

- (1) 開会挨拶・趣旨説明 5分
- (2) チュートリアル教育について 15分
- (3) なぜ筑波大学でチュートリアル教育か? 10分
- (4) 学生からの発題「チュートリアル教育に期待すること」 25分
 - (a) 学類生から
 - (b) 大学院生から
- (5) 教員からの発題 25分
 - (a) 本学出身教員から
 - (b) 他大学出身教員から
- (6) 休憩 5分
- (7) アイデア出しワークショップ 60分
 - (a) チュートリアル教育でできるとよいこと
 - (b) チュートリアル教育を実現していくための方法
 - (c) チュートリアル教育に限らず、筑波大学がより魅力的になるためのアイデア
- (8) クロージング 5分

計 2 時間30分

【参加方法について】

参加を希望する本学学生は、9月16日(木) 正午までに下記フォームからお申込みください。オンライン参加の方法については、開催日前日までに、ご登録いただいた皆様の大学アドレス (u アドレス) 宛てにご連絡いたします。

参加登録フォーム：<https://forms.office.com/r/ELChXi2Efa>

※参加登録には本学の Microsoft 365 アカウントへのログインが必要です。

活動場所

参加者・企画運営者：各自オンライン (Teams) で参加。

※対面や外出を伴う活動は行いません。

活動期間

2021/08/05~2021/12/31

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：東田梓（総合学域群第1類1年）、三河優（総合学域群第2類1年）

備考

- ・メールアドレスは教育機構支援課のものです。
- ・新型コロナウイルス感染予防対策について：本プランでは対面や外出を伴う活動は行わないためチェックリストが対象とする活動には該当しない。（教職員・学生とも、通常の業務・生活上の感染予防対策を行う。）

活動報告**実際の活動内容**

9月17日に学生参加型のオンラインイベントを開催。チュートリアル教育に関する大学からの説明、教員及び学生からの発題の後、オンラインツールである Miro（ホワイトボード）と CommentScreen（掲示板）を活用してアイデア出しワークショップを行った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

- ・夏季休暇期間中であったためイベントの広報が課題であった。
- ・アイデア出しワークショップ中は予想を大幅に上回るコメントをいただいたため、Miro 上でのアイデアの整理が追い付かずスムーズな進行が難しかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ・広報について：教職員提案企画として TWINS 掲示板及び T-ACT ツイッターを活用するとともに、プランナーの周囲の学生に対する広報を行った結果、オーガナイザーを含めて計30名の参加学生が得られた。
- ・進行について：ファシリテーションを担当したプランナーが臨機応変に対応した。また、当日拾い切れなかったコメントについてはイベント開催後に主催者側の振り返りを行うことで総括した。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

- ・チュートリアル教育について学生から予想を超える量のコメントをいただいたことで、今後解決すべき課題や検討すべきアイデアを発見することができた。
- ・また、より一般的に本学の学士課程教育の現状について学生からの率直な意見を聞くことができたことで、学生と共に筑波大学の教育を考える良い機会となった。
- ・さらに、今後同様のチュートリアル教育に関する企画があった場合に連携を図るための学生とのネットワークを構築することができた。



参加者への影響

- ・アンケート回答者の23名中、23名全員から本ワークショップに参加して良かったと回答が得られた。(23名の内訳：学生18名、教員3名、職員2名)
- ・アンケートでは、今後の本学の教育の仕組みを考える機会に参加できたことが嬉しいといった内容のコメントが寄せられた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

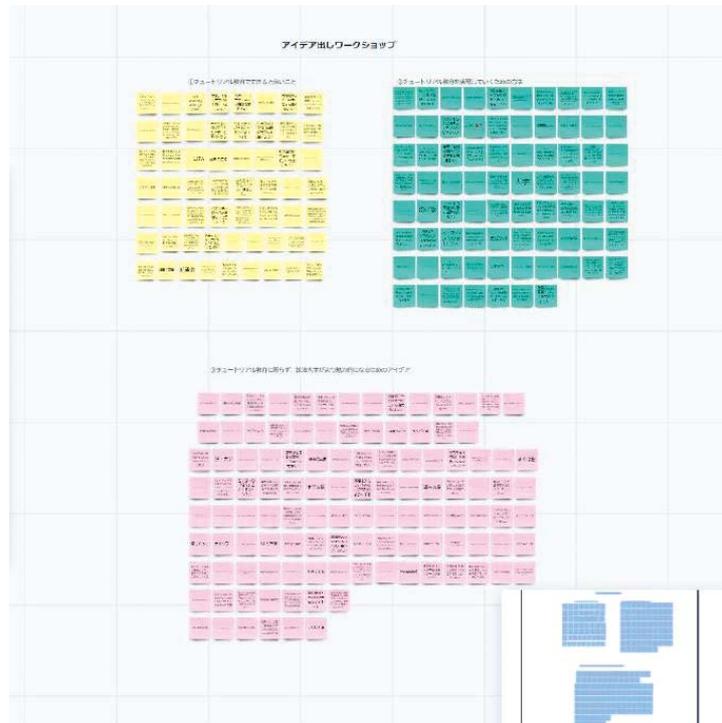
チュートリアル教育では学生の内発的動機づけに基づく主体的な学びが実現されることが重要と考え、T-ACTを通じた学びとも大いに共通する要素があります。今後も学生発信で様々な企画が提案され、チャレンジされることを期待しています。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

有志教員によるT-ACTプランとしたことで、通常の大学主催の企画よりも学生から身近に感じてもらうことができたのではないかと思います。T-ACT推進室のスタッフの皆様のご協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



「障害者の生活に関するボードゲーム」を作りました！（21010A）

T-ACT プランナー Lam Yan Tung（障害科学類2年）

活動目的

筑波大学やその周辺の研究学園地区では、留学生・外国人研究者の受け入れ拡大に伴い、夫婦や子ども連れで来日したり、来日後に結婚・出産をしたりして、子育てをしながらつくばで暮らす外国人の世帯が増えています。

教職員・学生・大学院生と子育て家族がチームになって懇話会開催を企画し、子育て世帯の外国人にとって、つくばでの生活に必要な情報や、子どもの教育等に関して困っていることなどを共有し、課題の解決にむけて一緒に考えることを目指します。

具体的な活動計画

【企画の意図】

「合理的配慮・環境整備とは何か」を考えてもらうよりも、障害者の困り事に気づき、こうすれば対応できるという形で具体的な対応を知ってもらい、ゲーム内で一例として提示します。

【背景】

町中で障害者を見かけた際に、目を逸らしたことがありますか。「障害者にあんなことを言うてはいけない」という差し障りやタブーなどは未だに社会に根ざしているのではないかと考えています。このことがきっかけで、障害者の生活を描いたボードゲームを作りたいと考えました。そして、差別解消にあたって最も有効な手段は理解促進だと考えるため、ボードゲームを通して、障害者の日常生活を知ってもらい、障害のない人も障害者の権利や尊厳を守るようになればと思います。また、「障害」に関する概念を幅広い年齢層に伝えるには、ボードゲームのような気軽に参加できる手段が相応しいと考えます。遊びながら障害者に対する理解を深め、自分も差別解消の一環として自覚することを目指します。

【ゲームの概要】

合理的配慮マスまで進んでいき、合理的配慮の任務を達成し、「共生社会」を意味するポイントで勝敗を決める。

【ゲームの目的】

ボードゲームを通して、障害をもつ人の困りごとや障壁に触れ、今までこれらに無関心だった人でも障害者の困り事や具体性を伴った合理的配慮を理解し、「障害者はこんな困り事があるよ」、「こうすれば対応できるんだ」といった一人一人が差別解消の一環として自覚していただきたいです。

【具体的なゲーム内容】

ゲームの対象年齢は小学校高学年からと設定し、障害の有無にかかわらず、すべての人を対象としながら、色弱のある人でもできるようにゲームの道具の色を調整しております。ゲームの内容は、内閣府の資料を参考に、視覚障害や聴覚障害、発達障害など様々な障害種別のある人が「店・役所・学校・職場・交通機関」といった5つの場所で直面している困り事をまとめ、それに対応する具体的な合理的配慮や環境整備をゲームの「任務」として達成していただきます。ゲームの中に提示した「合理的配慮」の内容は「最適解や正解」ではないことを強調するとともに、カードに「このときにはどんな配慮が必要とされているか？」等を考えてもらえるように誘導する文章を追加します。こういったゲームの内容については、人間系の名川勝先生に確認していただき、障害者の権利や尊厳を守るよう配慮します。

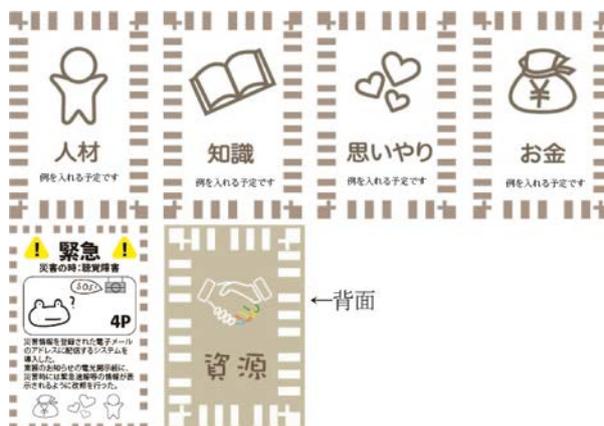
「ゲームの中で『任務』として使用する障害者の困り事や合理的配慮、環境整備の例」として以下に示す通りであり、カードにイラストで情報を示す。（画像参照）内閣府の資料等をもとに作成します。

①場面：店

障害種別：重度心身

困りごと：「車イスがリクライニングタイプのため、スーパーの会計時にレジに並ぶこともレジ横を通ることも難しい。」

提供できる配慮：レジにおいて、会計の順番が来るまで店員が買物カゴを預かり、順番



カードのイラスト：ゲームの中で『任務』として使用する障害者の困り事や合理的配慮、環境整備の例

になったときに声をかけるようにし、それまでは広いところで待てるよう配慮した。

②場面：教育

障害種別：LD

困りごと：「字を書くことが苦手なので試験でパソコンを使って解答したい。」

提供できる配慮：別室受験にして、パソコンの設定を確認した上で使用を許可する。試験内容についてはデータで提供、解答もデータで提出することを許可する。

③場面：職場

障害種別：内部

困りごと：「定期的に通院する必要があるため休暇取得日数が多くなり、同僚に対して気が引けてしまう。」

提供できる配慮：本人の希望を踏まえて、内部障害があることや必要な配慮について職場で説明を行うなど、本人が休暇を取得しやすい職場の雰囲気づくりを行った。

④場面：役所・行政

障害種別：肢体

困りごと：「カウンターが高いと話づらく、上の書類も見えない。」

提供できる配慮：低くて車椅子の入るスペースのあるカウンターの設置

【ゲームの流れ】

1. ボードにすべての合理的配慮マス置く。
(注) 違う色同士が隣り合ってはいけない・中心付近の白いマスには置けない
- 2.じゃんけんで順番を決める。
3. 中心のスタートマスにコマを置く。
4. 自分の番が来たら資源カードを2枚引き、さらに好きなところに1本道を引く。
(注)資源カードの引き方は、①資源カードの山から2枚引く②資源カードの山から3枚引いて1枚捨てる(捨てられた資源カードの総数は最大5枚)③捨てられたカードの中から1枚選び、資源カードの山から1枚引く、の3種類である・資源カードを引いた際にクエストが出た場合は全員でそのクエストに取り組む・クエストを引いた者は、クエストを除いて2枚資源カードが手元に来るように調整する・最初に引く道は中心から出ている部分とする
5. 4を繰り返すことで、合理的配慮マスまでたどり着くようにする。
(注)合理的配慮マスの直前の道を作ったら、次の番に回ってきた時にその合理的配慮マスにコマを置くことができる
6. 合理的配慮マスにコマを置いたら資源カードを2枚引き、止まった合理的配慮マスと同じ色の合理的配慮カードを山から取る。さらにその合理的配慮がクリアできそうなら取り組む。
(注)資源カードの引き方は変わらず3種類・合理的配慮マスにコマを置く場合は新たに道を作ることはできない・自分の手元に資源がなく合理的配慮カードにすぐに取り組めなかったとしても、自分のターンになったらいつでもクリアできる時に取り組むことができる
(注)「人材」は支援者や店員、職員のマンパワーを指します。
(注)ゲーム内に提示した対応はあくまでも一例です。
7. 4, 5, 6を資源カードがなくなるまで繰り返す。

【勝敗】

- ・合理的配慮に取り組んだ際にもらえるポイントとクエストに取り組んだことによるポイントを合計して勝敗を決める。
- ・取り組めなかった合理的配慮カードは、そのカードに記載されている資源数分のポイントをマイナスする。
- ・同じ色の合理的配慮カードはボーナスになる。
(注)2枚→+4、3枚→+7、4枚→+9

具体的な活動計画

障害者の生活に関するボードゲームの試作品を作ります。

下に記載された写真はまだ開発中のものになりますが、その形で進んでいきたいと考えています。

今後のスケジュール：

ゲームのデザインを進め、やゲームにおける「合理的配慮や環境整備」の内容を整理します。ゲームの内容については、人間系の名川勝先生に確認していただき、障害者を権利を守るように配慮します。秋学期は、学生やメンバーと対面、及びオンラインを活用し、ゲームの内容や修正を進みます。

企画の参加は予約制とします。参加希望者は前日までに [s2013010@s.tsukuba.ac.jp] までメールしてください。参加希望数が教室の定員を越えた場合は、その次の開催日程を案内いたします。

活動場所

秋学期以降の予定

- 10月13日（オンライン）、27日（対面の予定）
- 11月17日（オンライン）、24日（対面の予定）
- 12月8日（オンライン）、22日（対面の予定）
- 1月12日（オンライン）、26日（対面の予定）

の18時から20時までです。

オンラインと対面を活用し、対面の際は参加人数に応じて、2A棟の教室を確保します。教室については人間支援室と交渉済みです。参加希望数が教室の定員を越えた場合は、その次の開催日程を案内いたします。

活動期間

2021/07/27～2022/01/26

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：伊藤圭希（障害科学類2年）、渡辺奈桜（障害科学類2年）、野嶋日菜子（障害科学類2年）、渡辺陽（障害科学類2年）

P：名川勝先生（人間系）

備考

【新型コロナウイルス感染予防対策】

- ・活動当日には、当日および活動2週間前の発熱、体調不良の症状の有無を確認する。
- ・プランナーとオーガナイザーは、健康観察記録表を用いて活動2週間前から体温測定を行う。健康管理担当者を定め、記録をプランナーと健康管理担当者が責任を持って管理する。
- ・健康管理担当者は、原則、開催前日（T-ACT フォーラム閉室日を除く）12:00までに体調の記録の確認を行い、メールにてパートナーおよびT-ACT フォーラムへ報告をすること
- ・プランナー・オーガナイザーに感染の疑いがある場合、「新型コロナウイルス感染が疑われる場合の本人の行動フロー」に従って行動し、発生状況を健康管理担当者がT-ACT 推進室へ必ず報告すると同時に、活動を停止する。
- ・活動中は、マスクの着用、消毒を徹底します。
- ・ゲーム中は感染防止対策の観点から、2メートルのソーシャルディスタンスを保ちながら行います。
- ・十分な換気を行う。
- ・参加者の名簿を作成・管理する。
- ・使用物品は基本個々で持参し、共有しない。共有した場合は、使用後に消毒を徹底して行う。
- ・飲食や大声を出す者がいたら注意を促し、改善されなければ退室措置を行う。
- ・使用する学内や他の施設が定めたガイドラインに従う。
- ・活動終了後は、T-ACT 推進室へ活動終了報告を行う。また、プランナーは活動終了後2週間の時点で参加者に感染の有無の確認を行い、結果をT-ACT 推進室へ報告する。



活動報告

実際の活動内容

ゼロから合理的配慮に関するボードゲームを作り、メンバーと共に政府や市町村の資料を参考にしつつ、当事者にインタビューして意見を収集し、顧問の名川先生と話し合った。カードデザインやボードデザインなどについては、既存のボードゲームを見ながら、色弱の人でも見やすいように調整していた。

対面の際は学類生を招いて遊んでみた。企画中では、参加者の意見を踏まえ、カードデザインや遊び方を調整し、わかりやすいものを目指して作っていた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策

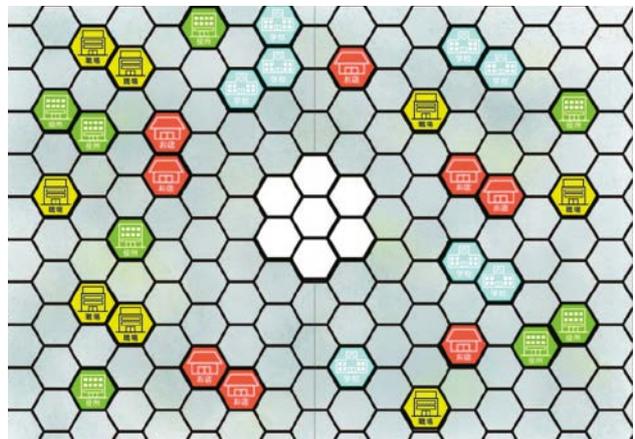
実施中に困ったこと

障害者に関連するボードゲームであるため、日常の困り事や合理的配慮の文言をどのように客観的に取り扱いか難しかった。また、合理的配慮の本質に反しないよう、「交渉」や「調整」という概念をどのように正確に伝えるか、ボードゲームを通して参加者にどのようなイメージを与えるかを予想することが困難だった。それから、ゲームとしての楽しさと障害者に関する知識のバランスを調整することが難しかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

内閣府や市町村の資料を参考にしつつ、合理的配慮の例を集め、先生の意見を踏まえて当事者の意見を取り入れた。障害者の気持ちを尊重し、障害者に対する偏見や誤解を招かぬ文言や描写に注意し、客観的な内容をゲームカードに入れた。

また、ボードゲームの流れやルールの複雑さを考慮し、「社会に合理的配慮の情報を提供すること」を今回のボードゲームの目的とし、「交渉」や「調整」という概念を追加せずに、合理的配慮に関する具体的な例を提示し、2種類のゲームを作った。



活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今回のボードゲーム会を通して、障害科学類の2年間で学んだ知識を実践で活用した経験だと考えた。今までの授業で「合理的配慮」について、様々な内容を学んだが、実際社会でどのように実施しているか、当事者にとって「合理的配慮」というのはどのようなものかなどをより深く考え、社会状況を踏まえて具体的に理解できた。とりわけ、ゲームの中で「合理的配慮」の要素を「資源カード」として使用したい際、改めて合理的配慮の中で不可欠な「モノ」をメンバーと共に話し合った。本質的に考えると、合理的配慮は互いに調整し合って提供するモノで、障害者の権利であるため、最初考えていた「思いやり」と矛盾しているのではないかと当事者に質問された。この質問について、グループの中で合理的配慮に関する意見を交わし、合理的配慮の出発点や要素を考えながら、ボードゲームで取り扱う言葉の選び方を再考した。このように、言葉の選び方が参加者に誤る情報を提供することにもなりうる実感した。今回のボードゲーム作りを通して、障害者に関する情報を発信する際に、当事者の気持ちや実態を正確に伝え、一般の人でも理解できるように伝えることが重要だと感じた。それから、ボードゲームと情報提供のバランス調整が難しく、「交渉」などの内容も追加したいところだが、ゲームとしてどのように成り立つかが結論に至らず、今回は具体的な例を提供する目的に作った。

参加者への影響

一緒に活動していたメンバーたちも合理的配慮についてより深く理解し、授業では考えたことのない本質的な問題についても議論できた。活動に参加した人の中では、障害者に興味を持っている人とボードゲームに関心を持っている人がいる中で、一つの空間で合理的配慮のことを具体的に理解できたのではないかと考えた。

コロナ禍で他学類の人との交流が少なく、今回のボドゲ会を通して、他の学類において合理的配慮に対してどれほど理解しているか、授業で取り扱っているかなどのお話もできて、障害科学類と全く違う立場で理解している意見もあったため、とても貴重な機会だと考えた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

自分が考えたことが実現できた時の満足感はとて大きいです！色々大変だと思いますが、頑張ってください！

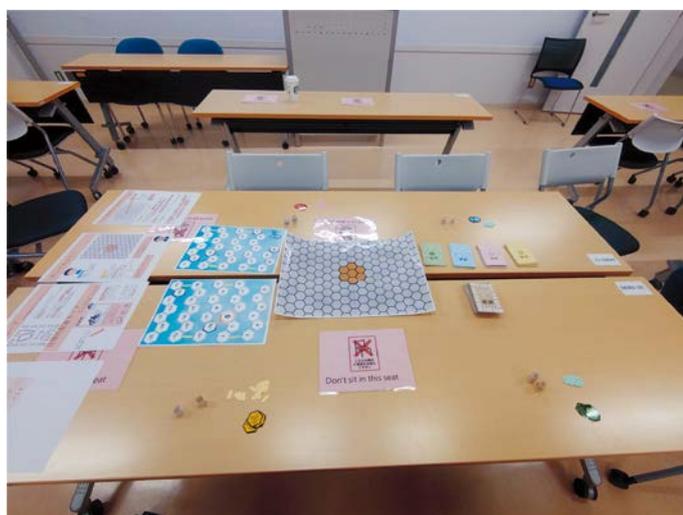
T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

最初の段階で懸念されることが提示してくださったおかげで、ボードゲーム作りのうち配慮すべきことがより把握しやすくなり、順調に進めた。

ボードゲームに使用されるゲームカードやボードなどがカラー印刷できて、対面での実施を実現した。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● 原皮から始める羊皮紙作り (21012A)

T-ACT プランナー 藤川 朋伽 (芸術専門学群)

活動目的

企画の目標は、羊皮紙を作ることです。

私は中世ヨーロッパの美術や歴史を調べていて、羊皮紙に興味を持ちました。

どのような使い心地なのか、作るのにどれだけ手間がかかるのかを実際に体験して知りたいと思っています。活動を通して羊皮紙に興味を持つ人を見つけ、一緒に試してみたいです。また、大学で学ぶ様々な学群・専攻の人達とも一緒に行うことで、色んな視点から理解を深められるのではないかと考えています。

また、将来的には没食子インクや羽ペンなどを用いて写本制作を行うことも視野に入れていきます。

羊皮紙は中世ヨーロッパの大学でも用いられていて、大学生のための写本制作を職業とする人もいたと聞きます。現代の筑波大学で、筑波大生が作った羊皮紙で筑波大生が写本を作るという活動は面白いのではないかと考えています。

具体的な活動計画

○準備段階 (8月~9月)

開催当日までにプランナーは以下の手順を行う

<原皮の準備>

1. 羊の原皮を処理するため、以下の物品を用意する
バケツ、消石灰、酸性洗剤、ビニール袋
2. 原皮の購入 (ワークショップ1日目の10日前を目安とする)
羊の原皮は「石田めん羊牧場」で購入予定
3. 原皮をよく洗い、塩と汚れを落とし、2日ほど水に浸ける
4. 原皮を石灰溶液に1週間程度浸け、毛が抜けやすいように処理する

※使用した石灰水はアルカリ性であるため、沈殿した消石灰は不燃ごみとして廃棄し、石灰水は多量の水で希釈してから流す。作業の際は保護メガネと手袋を着用する。

<ワークショップの準備>

- ・参加人数分 (5人を想定) の材料や器具を用意
必要物品: 角材、ビニール手袋、木枠、針金か糸、ペンチ、円カッター刃消毒用ウェットティッシュ等、ごみ袋、感染対策用品
- ・羊皮紙作りの工程について説明する資料作成
- ・参加募集は Google フォームで行うため、フォーム作成・整備する
応募フォームリンク: <https://forms.gle/rEEiTWRb423jYALH9>

<広報>

10月中は参加者を募るために宣伝を行う

作成したポスターをコピーし、各エリアに掲示したり、配布する予定である。

○ワークショップ (11月、12月)

・全2日間の日程で、2回行う

第1回は11/6と11/20、第2回は11/21と12/5の開催を予定している。予備日を1月中に設ける。

<1日目> (13:00~16:00)

内容: 羊皮紙、作業工程の説明、原皮の処理

- ・運営側は1時間ほど早めに集合し、床にビニールシートを敷くなど準備する
- ・受付、本人確認、健康観察記録回収

原皮から始める
羊皮紙作り

羊皮紙は羊や山羊の皮などから作られています。
皮から毛を除去し、皮を木枠に張って伸ばす作業を
実際にやってみませんか?

日時 第1回 11/6(土), 20(土)
第2回 11/21(日), 12/5(日)
定員 各回5名ずつ 場所 5C棟302教室

※感染症対策の上、対面を実施する予定です。
※感染症等により企画内容の変更・中止の可能性あります。
予めご了承ください。その場合、メールでご連絡いたします。

ご応募はこちらの
Google フォームから!
<https://forms.gle/rEEiTWRb423jYALH9>

承認番号: _____
期間: _____

連絡先 藤川朋伽 (芸術専門学群2年) s2010122@n.tsukuba.ac.jp

- ・羊皮紙や、制作の工程についての説明（1時間程度を予定）
…参加者にはメール等であらかじめ資料を配布し、各自スマホ等で見てもらいながら説明する（実際に印刷して配布などは行わない）
- ・原皮の毛をそぎ落とす作業（2時間）
…あらかじめ用意しておいた原皮を参加者に配り、角材等を用いて毛を削ぎ落とす作業を行う。
その後、水に浸して作業終了。
- ・その後、運営側で処理して貰った皮を再び石灰液に浸ける作業を行う（10～2週間程度）

<2日目>（13:00～16:00）

内容：羊皮紙を作る

- ・運営側は1時間ほど早めに集合し、準備する
- ・受付、本人確認、健康観察記録回収
- ・前回処理した羊皮を木枠に張る
…木枠に針金やペンチを用いて張る
ナイフなどで削りながら引っ張り、乾燥させ、を繰り返す



後日

- ・制作物を参加者に郵送する
定形外郵便物として発送する予定



〇予算について

羊の原皮が1枚当たり7,700円程度とやや高額であるため、参加にあたって1人当たり1,500円の参加費をお願いする。

予算案：https://o365tsukuba-my.sharepoint.com/:x:/g/personal/s2010123_u_tsukuba_ac_jp/EXOdL6rULkBAiBqgDdMqyRgBtpcXWu9RFk4pOZartD0jPQ?e=pe32u6

活動場所

5C316教室を予定（収容人数108人規模の教室。着席可能な座席数：30）

（体芸エリア支援室の方に、教室を企画で使用する許可を頂いた。ワークショップ当日の1か月前に利用申請を行う。）

活動期間

2021/09/01～2022/01/01

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：江原実祝（芸術専門学群）

P：長田年弘先生（芸術系）

備考

<感染防止対策>

- ・対面で行うワークショップであるため、実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。
対面の活動を中止する要請が出た場合、企画を中止・延期する。
- ・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員およびT-ACTに確認する。
企画を実施するかの判断については、開催1週間前にT-ACTと相談して決定する。
- ・前日に体調の記録確認をパートナー教員及びT-ACTに報告する体調不良がある場合は活動を停止する。
- ・参加者は過去2週間以上の健康観察記録を付ける当日は担当者が会場で記録を回収、管理する。
（いつでも提出できる状態にしておく）
- ・活動の際は出入りの際、物品を触る前などで随時手指の消毒を行うまた、ハンドソープも用意しておき、手洗いをしてもらう。
- ・各自マスクを着用する。
- ・部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。



- ・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。また、事前に申し込みした参加者のみ出席可とする。
 - ・参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス（2m）を考慮して予め設定しておく。
 - ・物品の共用を避けるため、人数分の作業道具を用意する。
 - ・活動の以後2週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
 - ・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。
 - ・感染症対策の観点から参加人数が5人を超える場合は複数回に分けて実施する。
- その他筑波大学およびT-ACTの設定した感染防止対策ガイドラインに従う。

<参加者向け注意事項>

- ・実際に動物の皮を使用するため、多少匂いがすると思われることをあらかじめ伝える。
- ・アルカリ性の液体や酸性の洗剤を扱うので、皮膚が弱い方へ注意を促す。
(ビニール手袋をして扱い、対策は行います)
- ・一応、汚れてもいい格好で来てもらう。
- ・参加費（1,500円）を頂くことを予め伝える。

活動報告

実際の活動内容

<準備段階>

- ・羊皮紙の作り方を調べ、必要なものを揃える
ヨーロッパでの羊皮紙の歴史や利用を書籍、インターネットで調べた
羊の皮を入手する必要があるため、北海道の牧場に連絡して購入したり
羊皮紙制作上で必要な器具（木枠や紐、ペンチやカッター、石灰やバケツ、レジャーシート）を購入した。
- ・羊皮紙の下準備
毛を抜きやすくする・脱脂のための処理（石灰水に浸ける）や参加者に配りやすいように切ったりした
- ・実施場所の確保
雙峰祭とも重なったり、自身の授業日程等で変更が生じたためその都度場所を探し、その貸出し申請や調整を行った
- ・ワークショップの際に使用する説明スライドを PowerPoint で作成
- ・広報
ポスターをデザイン、印刷して学内に掲示したり、Twitter 上で参加者を募った
また、応募は Google フォームで受け付けたため、フォームを作成したり管理を行った

<実施段階>

- ・教室の準備（レジャーシートを敷き、必要な器具を揃える・プロジェクターの用意）
- ・全2日の日程で2回行った（内容は2回とも同じ）
1日目：羊の皮から毛を抜き、ある程度まで脂肪を除去する作業
2日目：羊の皮を木枠に張り、両面を削る作業
両日とも一緒に同様の作業をしながら説明する形で進行了ました
- ・教室の後片付け（机の配置を戻したり、落ちた毛や脂肪を取ったりの清掃、一応消臭剤をスプレーするなど）

<実施終了後>

- ・各回とも、木枠に張った羊皮紙を乾燥させ、浮いた脂を拭いたり表面に炭酸カルシウムをまぶしたりする多少の加工を行ったうえでそれぞれに郵送しました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒90%



実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ①教室の予約が集中授業とダブルブッキングしており、当日急に教室変更を行うことになってしまった雙峰祭とも被ったため5C棟が利用できず、教室を探すのに苦労した
また、自身の集中授業の関係で土日に実施できなくなり、平日に行うことになったが、その場合教室が使えないため他の場所を探した
- ②自分自身の理解不足で、説明が上手くできなかったこと
実際に羊皮紙を作ってどんなものか知る、という自分の実験を企画化したものであり、そもそも知らないことが多かった
- ③機材関連
プロジェクターを扱い慣れておらず、操作やファイル形式だとかが上手くできなかった。
- ④トラブル（参加者の怪我、上手く羊皮紙を作れなかった、日程関係）
今回はカッターを使用する機会があり、参加者の方が指を少し切ってしまった
羊皮紙作り自体コツと力が必要で難しいのだが、自分もどうすればうまくできるか分からず説明できなかったため、紙らしく作れなかった人もいた。
日程に関し、非常に忙しい期末の時期に開催したため直前に出席を見合わせたり、忙しい中時間を縫って参加した人もいた
- ⑤運営そのもの
案内の連絡や、教室申請の関係で情報を出すのが遅くなったり、いちいち訂正部分があったりと、スムーズな運営をする為に必要な細事が私は非常に苦手であることが分かり、難しかった

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ①集中授業と被っていたことが当日判明した際は、先生が使っていない横の教室を使って良いと言って下さり、事務室の方にも確認までして頂いて、何とか実施することができた
また、オーガナイザーの友達と相談しながら使える教室・場所を検討して申請した平日に教室が使えないため、友人の提案で総合交流会館の会議室を利用した
- ②及ばなかったが出来る限り書籍等で勉強をした。2回開催したため、第2回では第1回での経験や学びを生かした説明ができた
- ③事前に資料をメールで送付したり、いっそプロジェクターを使わず分かりやすい説明を考えることで対応した
- ④怪我に関して、第2回では注意喚起を強調した。
また、単調な作業が多く、夢中に取り組んでしまった結果だと思われるので、作業時間や構成を再検討する必要がある。(未解決) 作り方に関して、第2回では成功例なども示しながら説明することができ、第1回よりうまく作れた人が多かったと思う
日程に関しては先を見通したスケジュール管理と、早めの告知や連絡が必要だった(未解決)
- ⑤オーガナイザーの友達に多大な協力を頂いた。
メールの文面を確認して貰ったり、考えて貰ったりして、文面を悩む時間のロスを減らすことができた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

ここ数か月とにかく忙しく、毎日羊皮紙や企画の事務的なことで頭がいっぱいだった気がします。参加された方には力が及ばず迷惑を掛けてしまったところも多々あり、もっとよい企画に出来たのではないかと申し訳ない思いがあります。秋学期末の忙しい時期を縫って材料を揃え参加者に案内し実施し資料を作り…と、ひと段落した現在ではよくこなせたものだと驚いてるところですが、本当にスケジュール管理の難しさと重要さを実感しました。参加者の方も多忙のため断念されたり忙しい中出席してくれた方もいたため、自分も参加者も気楽にできるようなスケジュール管理の工夫が必要だとよく分かりました。また、手を貸してくれる人を探すこと、上手く手を貸してもらえる工夫というか、借り方を考えるのが必要だと思いました。

しかし、面白い企画だとか興味があると言って下さる方や、ラジオやら新聞やら普段ならまず出会わなかっただろう方、色んな学群の参加者の方々に会ったり、様々な知見を得られたことがとても良かったです。不備も多い企画でしたが出会いとか経験とか何か形に残るようなことをたくさん出来ているような感じがして、充実感というか達成感がありました。

また、企画実践を通して羊皮紙や関連する諸事（羽ペンや装飾写本）に更に興味を持つようになり、現在は卒論のテーマを装飾写本に関するものにしていかと考えているくらいで、将来の仕事や研究に大きな影響を与えることになったと思います。

ワークショップの内容を芸術系の教授と話して理解が深まったり、中世美術の研究をされている教授と話さきっかけになって、羊皮紙写本の研究や先生について教えてもらったほか、興味深い話を聞くことができました。今回の羊皮紙作りでは正直中世当時の作りと比べて失敗した部分も多かったのですが、そういった失敗物やどのよ

うにしたら失敗するのかという記録はまず残らないため、実践ならではの学びができたのではないということを知り、実際に試してみる意義や面白さを知ったような気がします。

また、将来は専攻である美術に関わる仕事がしたいとは考えており、ワークショップは博物館などで行うものもあるため、今回のトラブルも含めた様々な経験は非常に良い学びとなったと感じています。参加者への説明や、直前で教室が使えなくなるトラブルやそれに対する対応など、実際仕事でそういったワークショップをする際にも直面しそうな課題を実践的に取り組むことができ、非常に大変であった反面、方法や遣り甲斐、楽しさを知ることができました。

考えたり妄想していたことを実際にやることは殆どなかったのが「そうだ、京都行こう」のようなノリで実施できてしまったことに驚いています。周りの人や T-ACT 制度といった環境ありきのこととはいえ、実現できたこと自体が初めての体験で衝撃的でした。

事の発端は好きな中世の皇帝が見たであろう羊皮紙文書を再現してこの目で実際に見てみたいという趣味から生じた調べ物であり、それがこのような形で色んな人を巻き込んだ企画になったり今後の企画まで妄想することに繋がると思いはしなかったため、自分にとって RPG で表現すればとても経験値が上がった体験であったと思います。

参加者への影響

情報メディアや比較文化の人等にとって、恐らく情報伝達手段として羊皮紙写本やパピルスの巻物を知る機会があったと思うのですが、羊皮紙という美術的・素材的な視点から触れる体験は殆どなく、珍しい機会になったのではないかと思います。自身の興味のある分野を美術的な視点から見てみたり、実践を行うこともできるという考えを示すことができたのではないかと考えています（ただし今回フィードバックを得る機会を設けず参加者の考えや気持ちが分からなかったため、これは殆ど想像となっております）

また、羊皮紙作り・写本にも興味を持った、興味があると仰ってくれた参加者もいらしたので、新しい趣味を開拓出来たりしているかもしれません。

一緒に運営してくれた友人は実は彼女の方がワークショップや連絡といった事務にも手慣れており、色々と助けてもらいました。その過程で、自分が苦手な業務が人にはそうでないこともあり、逆に自分の方が得意な業務もあったりすることを知ることができ、手の借り方というか協力の仕方を確認できたというか、学びがお互いあったのではないかと思います。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

趣味を突き通した企画でしたが案外何とかなったり、似たような趣味を持つ人が来てくれたりしたので、同志を探すのによいかもかもしれません。

誰も興味ないだろうと思っていたら、案外そうでもなかったりすることが分かりました。（ただ今回は興味というより物珍しさが勝った印象はあります）

＜開催場所に関する覚え書き＞

総合交流会館は平日なら利用可能です。様々な機材をレンタルすることもできます（プロジェクターやコンセント、スクリーンなど色々あります。ただしプロジェクターは HDMI か USB-A だけ B だけしか合わず、私の時は使えませんでした…）

※申請書を総合交流会館で貰い、支援室に提出して確認して貰った上（1週間程度）で総合交流会館にも提出する必要があります。早めの申請が吉です。

教室を使って企画する際は余裕をもって予約や申請を行うのがよいとつくづく思いました。

また、平日はシラバス上で授業が無かったとしても教室を借りることができません。（少なくとも体芸エリア支援室の方曰くできないとのことでした）放課後や土日のみとなります。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

＜良かったと感じられたこと＞

- ・初めての企画運営で何をどうすべきかも全く分からず、拙い企画案を提出したのだが、細かく必要なアドバイスを沢山いただいたこと。
- ・貸出し可能な機材が多い（今回は先に用意してしまったので利用しなかったが、アルコールや石鹸といったものもあるのが嬉しい）
- ・面白い企画と言っただけなので自信が持てたり、実施のモチベーションというかやる気に繋がった

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



筑波大学かぶき會 第二場 ^{だいにば} TSUKUBA DAIGAKU KABUKI-KAI DAINIBA ~ The 2nd scene ~ (21015A)

T-ACT プランナー 加藤 悠介 Yusuke "Tim" KATO (障害科学類2年)

活動目的

私は肢体不自由の障害があり、リハビリテーション・習い事の一環として日本舞踊・歌舞伎に親しんできた。その中で、歌舞伎の魅力をより多くの人に知ってもらいたいという思いが生まれた。筑波大学には、能や狂言の研究会はあっても、歌舞伎の研究会はない。最近はさまざまな新作歌舞伎が上演されているが、まだまだ「敷居が高い」「難しい」というイメージが強いのが現状である。

一方、海外とのつながりを考えると、過去十数年の間にニューヨークやラスベガス、パリでも海外公演がなされているほか、外国の人が歌舞伎の劇場を訪れることも多く、諸外国から高い関心が寄せられている。歌舞伎は色々なジャンルの劇に分かれており、それぞれの特徴もとてもユニークである。

第二場となる本企画では、留学生の参加を積極的に歓迎するとともにさまざまな人と交流を深め、歌舞伎の面白さや幅広さ・奥深さを共有することを目的とする。

Purpose of KABUKI-KAI

Hello! This is Yusuke Tim KATO, a planner of TSUKUBA DAIGAKU KABUKI-KAI.

I have a physical disability called Cerebral Palsy and getting to know KABUKI with classical Japanese dance as one part of my rehabilitation. In that process, I have developed a desire to spread the appeal of KABUKI to as many people as possible. There are clubs for Noh and Kyogen, but no study groups for KABUKI at The University of Tsukuba.

Recently, a variety of new KABUKI performances have been produced and performed, but most people still have strong images of KABUKI as "difficult" or "too old to enjoy it".

On the other hand, in terms of overseas, it has been performed overseas in New York, Las Vegas, and Paris over the past decade. People from other countries often visit theaters of KABUKI, which describes that many of them started having an interest in it.

KABUKI is divided into various genres of drama, each with its own unique characteristics.

At this event, we are very welcome international students, and exchange with a variety of people actively and share the fun, breadth, and depth of this traditional entertainment.

具体的な活動計画

本企画は、2022年2月21日(月)、2月28日(月)、3月3日(木)、3月7日(月)の計4回実施する。

加藤が持っている歌舞伎の映像や書籍、YouTubeチャンネル『歌舞伎ましよう』にある映像のいくつかを抜粋し、オンラインで鑑賞する。今回は、夏季に実施した会で発表した「歌舞伎とは何か・どのような歴史があり、ジャンルに分かれるのか」に関する各資料を参考資料として引き続き用いるとともに、歌舞伎の役柄や化粧・衣装・名前のパリエーションについてスライド等を用いて説明し、その後鑑賞に移りたいと考える。英語に精通したオーガナイザーとの協力のもと、歌舞伎を楽しく理解してもらえるよう可能な限りの工夫を施すとともに、日本文化を通じた国際交流をテーマに、学群や学年・言葉の垣根を超えて交流を深めるきっかけにもしたい。なお、画像と映像の使用については、松竹株式会社と日本俳優協会に問い合わせし、初回開催前の6月20日の時点で許可を得ている。

第二場の初回は2月21日を予定している。企画開催に先立ち、公式Twitter・Instagramを開設し運用を行う。(「第二場」とは、同じ物語の二つ目の場面という意味である)

Outline

We will watch online excerpts from some of KABUKI videos and books, and videos from YouTube channel, KABUKI MASHO (which means "Shall we doing KABUKI in some good ways?")

This time, we will continue to use reference materials which expresses the history, genres, and the origin of KABUKI, then move on to watching performances.

We are going to do everything to make KABUKI fun and understandable for all audiences included international students.

We would also like to create this event as a good opportunity to exchange internationally with various people beyond the boundaries of academic groups, grades, and languages in co-operation with an organizer who speaks English fluently. The theme of this event is "An international exchange through Japanese culture"!

For the use of photos and videos, we have contacted Shochiku Co., Ltd. and Japan Stage Players

Association. We obtained the permission from them as of Jun. 20, before the first session.
 The first session of DAINIBA of KABUKI-KAI is scheduled for Feb.21.
 Prior to the start of the project, official Twitter and Instagram will be launched and operated. (DAINIBA means that the second scene of the same story.)
 We are going to hold this event at Feb. 21, 28, Mar. 3 and 7.

【当日の流れ Time Schedule】 Microsoft Teams で行う。

- 13:00～13:10 挨拶・運営陣自己紹介（オーガナイザー主導） Introduction
- 13:10～13:40 スライドと参考資料・映像を用いた発表（加藤）
Presentation with reference videos and materials
- 10分休憩 Ten-minute break
- 13:50～14:40 映像鑑賞（解説付き） Watching performances with commentary
- 14:40～ 交流会、小道具紹介 A Get-together, showing some KABUKI props
- 15:00 解散 Finale

14:40からの交流会では、音声をオンにさせていただいて楽しくお話しできればと思います（カメラのオン・オフについてはご自身の判断にお任せします）。発表中でも、チャット画面での感想・つぶやきの共有やリアクションボタンは大歓迎です！参加して下さるみなさんのリアルタイムでの思いをぜひお聞かせいただき、楽しく歌舞伎を知る場としてこの「かぶき會」が機能すればいいなと考えております。なお、映像鑑賞は、古典歌舞伎と新作歌舞伎双方の鑑賞を予定しております！

興味を持ってくださった方は、以下のリンクから事前アンケートに答えていただけるとありがたく存じます。そのほか、ご質問等ございましたら s2011887@s.tsukuba.ac.jp までご連絡ください。

We hope you will enjoy talking with others with the mic on during the social event starting at 14:40 (we leave it to your own choice to turn on/off the camera). Welcomed to share your thoughts, tweets, and reaction buttons on the chat screen even during the presentation! We would love to hear your feedback and some interesting comments! Now we are planning to watch both classic and new KABUKI films at this session! If you are interested, we would be grateful if you could fill out a survey in advance by clicking on the link below.

When you have any other questions, please don't hesitate to contact the planner (Tim KATO) s2011887@s.tsukuba.ac.jp.

For those who are from outside of Japan, or worried about speaking Japanese: Please never mind about it, you can join and talk with us in English!

Survey URL:

https://docs.google.com/forms/d/1onz8EjUsSsgPvKWBhfWgbwf26cY_kgR3KpXtH2QbeZA/edit

活動場所

参加者：Microsoft Teams を用いて各家庭から参加する。
 企画運営者：プランナーの居室からオンラインで参加する。（新型コロナウイルス感染症の状況によっては、Microsoft Teams を用いて各家庭から参加する。）感染が緩和した際には、対面での実施を検討する。

Participants: Attend to Microsoft Teams from each household.
 Planner and organizers: Participate online from the planner's living room. (Depending on the circumstance of the COVID-19 infection, we will prepare and participate from each household using Microsoft Teams.) We consider to hold this event face-to-face once the infection abates.

活動期間

2021/12/01～2022/03/31

対象

学生・教職員



T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：佐々木湧人 Wakuto SASAKI（障害科学類 2 年）、野月和 Yamato NOZUKI（教育学類 2 年）、
サヴィジ・リディア Lydia SAVAGE（看護学類 1 年）
P：大倉浩先生 Professor Hiroshi OKURA（人文社会系）

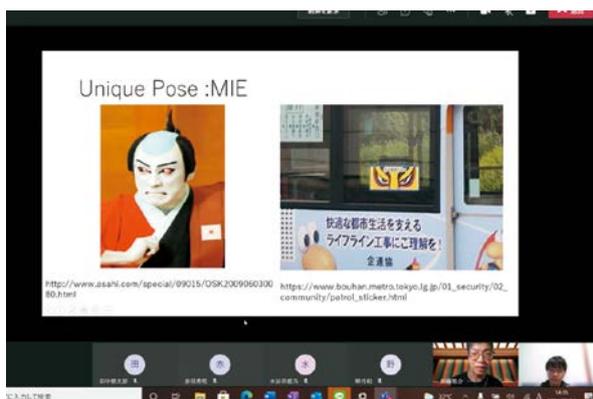
備考**【公式 SNS】**

（公式 Twitter）https://twitter.com/itf_kbkofficial

（公式 Instagram）https://www.instagram.com/itf_kbkofficial/

【企画実施時・準備時の新型コロナウイルス感染予防対策】

- ・本企画において、参加者は Microsoft Teams を通して、自宅から参加するため、参加者の健康管理は参加者自身が行うものとする。もし、感染の疑いがある場合は、参加を認めない。その旨を事前に伝達する。
- ・プランナー及びオーガナイザーは、健康観察記録表を用いて企画 2 週間前から体温測定を行う。また、対面で準備を行う際も同様に 2 週間前からの体温測定を行う。
- ・企画前日までに健康観察記録表を T-ACT 推進室へ報告する。
万に一つ、プランナー及びオーガナイザーに感染の疑いがある場合、「新型コロナウイルス感染が疑われる場合の本人の行動フロー」に従って行動し、発生状況を健康管理担当者が T-ACT 推進室へ報告し、活動を停止する。
- ・当日の企画運営者は健康観察記録表において過去 2 週間の発熱・体調不良が認められない者のみとする。当日、健康観察記録表を通して、上記の旨を確認する。
- ・活動履歴担当者をおき、準備および企画当日の日付、場所、時間、氏名、手で触れることができる距離で 15 分以上の接触があったものに関する情報を記録し、保管する。
- ・健康管理担当者をおき、健康観察記録の確認と管理を行う。
- ・対面で準備を行う場合には、企画当日にはマスクの着用、使用器具の消毒を徹底し、ソーシャルディスタンスを保って活動を行う。また、30分おきに 5 分程度の換気を行う。
- ・参加者の名簿（氏名とメールアドレス）を作成・管理する。
- ・企画当日は、運営者はプランナーの居室に集合するため、ソーシャルディスタンスを保った上で、発表者のみマスクを外し、パソコンを通して参加者にプレゼンテーション・パフォーマンスを行う。その他の企画運営者は隣の部屋に移動し、マスクを着用する。
- ・参加者は自宅から参加するため、マスクの着用は個々に一任する。
- ・活動終了後、T-ACT 推進室へ活動終了報告を行う。また、活動終了後 2 週間時点の企画運営者の感染の有無の確認を行い、結果を T-ACT 推進室へ報告する。

筑波大学かぶき會 第二場

活動報告

実際の活動内容

第一場で用いた英語スライドの内容を加筆修正し、日本語・英語での説明を加えながら、参考映像とともに歌舞伎の起源・歴史から今日に至るまでの変遷と歌舞伎俳優の活躍について紹介した。10分間の休憩時間では、YOASOBIの楽曲と日本舞踊がコラボレーションした映像や、松竹が提供している歌舞伎に関わるビデオのハイライト（5分40秒ほど）を流した。後半では、見得の実演・セリフの実演（日英双方）を行った後、各演目の映像を自身の解説付きで断片的に鑑賞した。

交流会では感想を交換し合いながら小道具の紹介を行うほか、質疑応答・歌舞伎に関するトリビアを共有した。交流会は前企画と同じく大いに盛り上がり、予定時刻を超過した。

【鑑賞した演目】

2/21

・歌舞伎座 こけら落とし公演 助六由縁江戸桜（助六）

演：十一代目市川海老蔵ほか 2013年3月公演

2/28

・闇梅百物語

演：二代目澤村藤十郎ほか 1992年8月公演3/3

・雛祭り

演：九代目中村福助、八代目中村芝翫ほか 2020年3月公演3/7

・通し狂言 源氏物語

演：十一代目市川海老蔵、堀越勸玄ほか 2018年7月公演

・義経千本桜 四段目 川連法眼館の場

演：四代目市川猿之助ほか 2022年1月公演

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ①新しく観に来てくださる人と、前回からのリピーターの数が推測できず、前回は発表した歌舞伎の基礎の話をするかどうかで迷った。
- ②改めてひなまつりの説明をするかどうか思案した。
- ③オーガナイザーの二人が急用のため参加が難しくなった。(3/3,3/7)
- ④留学生の参加人数が多くなかった。(学生1名)

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ①運営陣と相談し、継続するに至った（しかし、基礎の説明を毎回同じスライドで行うと飽きてしまうことが予想されるため、次回以降はその点も考慮し工夫を重ねていきたい）
- ②リディアさんと話したところ、「私たち二人も完璧にひなまつりを理解しているわけではないし、自分たちが振り返るうえでもスライドがあった方がいいかも」という意見をもらい、説明することとした。実際に説明スライドで出た話題が舞踊の冒頭で使われていたため、この説明は非常に有効であったと感じている
- ③セッションに参加できない人の役割を私自身が担当することでカバーした。最終日は参加者が1名だったため、私とリディアさんとで説明等の流れを工夫し、無事終えることができた。
- ④日本人の参加者の方やプランナー自身も、英語での伝え方のバリエーションを知り楽しむことができたため、英語での説明をは結果的には奏功した。周知として、本学の異文化交流サークルであるCASAに所属する友人に情報共有を依頼したが、今後はさらなる工夫が必要だと感じた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

かぶき會第二場の運営・実施を通して、より分かりやすい伝え方を意識することができたと考える。前回と同じく、学群生・大学院生・教職員（今回は特に留学生も含む）など、さまざまな立場や国籍の人が来ることを想定して英語でスライドとアンケートを作成したほか、オーガナイザーのリディアさんの協力を得て日本語・英語での発表を行った。外国出身の先生方や留学生の方から「理解がしやすかった」と言ってもらえたほか、私としても「英語でこのように表現すると伝わりやすいのか」と新たな知見を得ることができた。

さらに、前回同様 Teams のリアクションボタン・チャット欄を活用した。第一回のセッションに参加してくださった方から、「私は歌舞伎の知識がそれほどないので、独特の用語や役者の名前が使われると漢字変換に戸惑うこともありました。運営側でチャット欄にリアルタイムで流していただけるとありがたいなと思いました。」

というご意見をいただいたため、第二回以降は、自身のスマートフォンからチャット欄に役者名・演目名を打ち込むようにした。チャット機能を用いる頻度はそれぞれの参加者さんによって異なるが、リアルタイムで皆さんの反応を読み取ることができるため、今後も積極的に活用していこうと思う。

また、単なる演目の解説（＝インターネットで検索すればわかること）ではなく、歌舞伎役者さん側の工夫や知恵・演出にも焦点を当てて説明したほか、テレビドラマ・映画を例に現代の歌舞伎役者さんの活躍を紹介した。今回は歌舞伎役者さんが多く出演している大河ドラマが同時期に放映されているため、前回より関心を持っていただくことができたように感じる。

今回新たに挑戦したこととしては、セリフと見得の実演である。快諾してくださる方とそうでない方がいらっしゃることは想定しつつ、参加者の方にカメラとマイクのオンをお願いした。見得に関しては、ステレオタイプの「変顔」ではなく、不動明王が天と地を同時に見つめたということに由来する旨を説明した。Jactat 先生ほか数名と一緒にやってくれたが、どなたもとても上手だった。セリフの実演においては、石川五右衛門という大泥棒が京都の町を眺めて言った「絶景かな、絶景かな」というセリフを英語にも翻訳して実演したほか、「〇〇にごぞりまする」という自己紹介を参加者さんとともに読み上げた。また、歌舞伎の口調において重要な鼻濁音（Nasalsonant）や、に・を・がなどの助詞の前で息を吸い込む説明のところでは、「筑波大学」や「未来を想え」などの本学で聴きなじみのある言葉を例に説明した。

この試みの結果、もっと歌舞伎のセリフやお化粧について知りたい！第三場では是非見せてほしいというお声をいただき、前回よりも興味の扉に向けた効果的なアプローチができたのではないかと考えた。

鑑賞に関して、第一場でも鑑賞した「助六」を初回セッションで取り上げ、そののちは毎回違う演目を見ていただけるよう努めた。特に3月3日には雛祭りという文化についての振り返りを行った後に、同名の舞踊を一本丸ごと鑑賞した。年中行事やお芝居の種類に合わせた説明によって、参加者の方に少しでも楽しんでいただけたならば非常に嬉しい。

また、運営体制の変更点として、各オーガナイザーに業務を割り振らせていただいた。（佐々木さん：活動記録、野月さん：運営記録、リディアさん：英語説明）このことで、コミュニケーション及び運営陣の情報共有が活発化した。また、まん延防止等重点措置が発令され、プランナーの居宅に集まったの運営が難しくなったタイミングで話し合いを行い、運営陣の LINE グループを活用して作成資料の共有を行った。幸いにも PC が不調をきたすことはなく、安堵した。また後述するが、運営陣で Zoom ミーティングを開き、事前に歌舞伎の演目をいくつか鑑賞できたこともよかった。

會の周知については、自身の SNS アカウントならびに前回開催後に開設した公式 SNS を活用した周知を行い、他学類の友人にも積極的に活動を紹介した。（T-ACT 公式 Twitter でのリツイート、ありがとうございました。）爆発的に Teams メンバーの人数が増えたというわけではないにせよ、お一人お一人に興味を持って観に来てくださっていることが非常にありがたいと感じる。イベント終了後も積極的な情報発信を心がけ、次回以降の開催に向けた人数の基盤を整えていきたい。現時点では、これまでの文字での発信はもちろん、音声での発信（歌舞伎の口調で話す「スペース」を Twitter 上で行うなど）に焦点を当て、周囲へのインパクトを増大させてみたいと考えている。

第二場の運営・発表を通して、改善点・良かった点を日々見つめることができたほか、いろいろな人が伝統芸能を知ろうとし魅力を伝えあうこと（＝伝承）の大切さを再確認することにもつながった。日本の伝統文化へのアプローチのひとつとして、今後も地道にかぶき會を続けていきたい。

参加者への影響

前回も協力してくれたオーガナイザーの二人は、今回も協力を快諾してくれた。突如のお願いにも関わらず、リディアさんも「私にできることがあれば！」と言ってくれ、とてもありがたかった。なかなか全員の予定が合うことが少なかったが、2月上旬に運営陣だけで歌舞伎を見る Zoom ミーティングを主催した。リディアさんはこのミーティングで歌舞伎を見るまでは、「歌舞伎」という名前を知っているだけであつたらしいのだが、これをきっかけに興味を持って翻訳のイメージが膨らんだと後に話してくれた。

予行練習の時間は十分に取れず、流れを確認するだけで終わってしまったが、今回も3人は演出や音声の面で意見や解決策を提案してくれた。今回は、各セッション開始の10分前（12:50）に Teams のかぶき會の部屋を開き、イントロダクション用のスライドを表示することとした。そのため、12:20から Zoom での簡単な情報共有ミーティングを行った。（どなたがいらっしゃるか、観劇する演目は何かなど）

セッションの最初では、簡単に4人が自己紹介をする予定だったが、私の自己紹介に関しては前回も用いたスライドを英訳・表示したうえで日本語での自己紹介をしてはどうかと提案され実行したところ、参加者の方から好評をいただいた。また、外国出身の方がいらした場合は、各自最初に1・2言英語で自己紹介をすることも決めた。4人での意見交換が活発にできたことで、運営をスムーズに進められた。

参加者の方に事前アンケートを取ったところ、前回と同様に歌舞伎を趣味で見に行つたことがあるという方はほとんどおらず、学校の鑑賞会あるいはテレビで少し見たという方が多かった。活動の中で見得や立廻り・隈取などの技法を説明しつつ発表を行ったほか、バラエティーに富んだ場面を鑑賞したことにより、事後アンケートでは、留学生の方や前回も参加して下さった方を含めた全員が「歌舞伎のイメージが（大きく／少し）変わった」「次回があればぜひ参加したい」「もっと歌舞伎を鑑賞したい」と答えて下さった。また、お化粧の方法や

実演部分で紹介した事柄に興味を持ってくださる参加者の方も多く、次回以降の開催に活かせるようなアイデアを得ることができた。貴重な業務の合間や春休みの2時間を割いてかぶき會を観に来てくださったことへの感謝の想いに包まれた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

歌舞伎を伝えたい！という一人の思いから始まったこの活動が、周囲の人々を巻き込み・共感をいただいて第2弾を実現することができました。

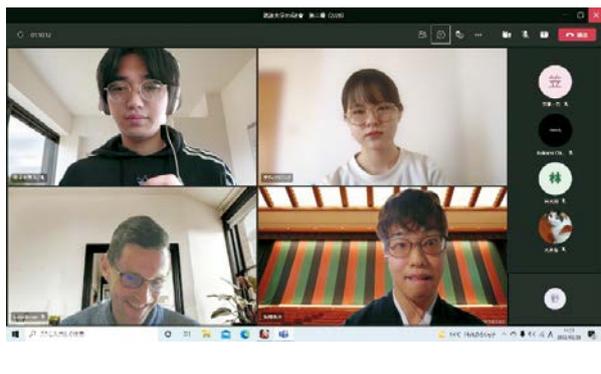
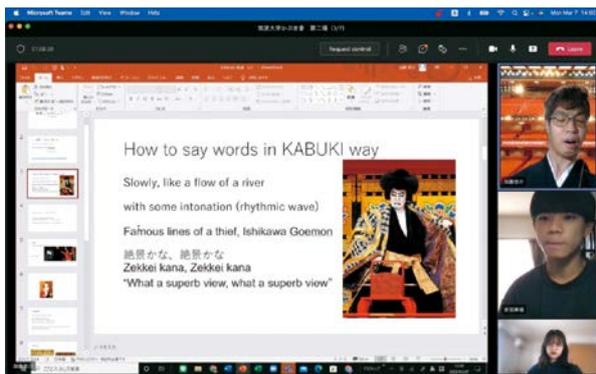
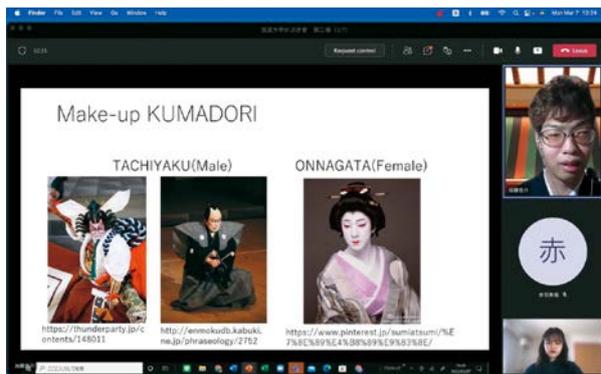
私のように、自分の趣味の原点に立ち返り工夫して伝えることでも、また学問に関することでも、幅広い「やってみよう」を受け入れ、実現に向けて歩いていけるのがT-ACTです。「これでいいのかな」と悩む前に、自由に・壮大に発想し、まずは積極的に行動に移してみてください。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

コンサルタントの田中先生を始め、興味を持って観に来てくださった加賀先生、木田さま、サポートしていただいたスタッフの皆さんが優しく導いてくださったおかげで第二場を実施することができました。ありがとうございました。

自分は何のくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



An Importance of Handing down tradition

It is difficult for us to carry on the skills of KABUKI itself directly.

And I cannot fully explain the depth of this art in just two hours. However, KABUKI can be more changed and evolved by trying to know it, sharing its charms with someone else, which we can do it!

Carrying On (継承 Keisho)

Handing down with changes and advancement (伝承 Densho)

KABUKI-KAI is an activity of "Handing down". That's why I believe it is worth keeping going.

All of us here are carriers of the tradition!



令和3年度茨城県警察大学生サポーター募集について (20003V)

受入団体名：茨城県警察少年サポートセンター (13005G)

活動内容

令和3年4月12日 大学生サポーター委嘱式・研修会、街頭補導
 令和3年7月29日 当職員と共に街頭補導活動
 令和3年5月中頃 広報ポスター作成 等を行いました。

活動場所一覧

- ・街頭補導：主に水戸、つくば、土浦市内
- ・非行防止教室等：県内の小、中、高校等
- ・立ち直り支援活動：県内の農場、スポーツ施設、当センター等
- ・キャンペーン：主に水戸、つくば市内

活動期間

2021/4/1～2022/3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：4人 (延べ人数)

活動報告

●受入団体担当者

近年、子供を対象としたSNSを起因とする犯罪が多発していることから、広報啓発ポスターを県内の各学校へ配布するため、デザイン画の作成を行った。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

薬物被害防止のポスターを作成したり、つくば市や土浦市周辺の見回り活動をおこなった。

今後の課題

個人的な問題だが、平日の活動が多かったため、授業と重なってあまり参加できなかった。来年も継続するので、2月以降に積極的に参加したい。



茨城県警察大学生サポーター



外国籍子ども校外学習サポート教室 (21001V)

受入団体名：非営利ボランティア団体 伴の会 in Tsukuba (18010G)

活動内容

外国からつくば市に転校してきた子どもは、日本語が不自由で、コミュニケーションの難しさや文化の違いに、学校での学習と生活に戸惑うことが多くあり、学校で満足な学習ができないこともあります。私たちの校外学習サポートにより、安心感を持てる居場所を作ることで、子どもがのびのびと自己表現したり、不安な気持ちや緊張を取り除くことができます。子ども達の心身の健全な成長を見守るとともに、日本一の教育都市に貢献し、安心で魅力ある「国際都市つくば」を目指して活動しています。吾妻交流センターにて有志の方が市内外国籍小中学生を対象に日本語、学校の授業、宿題のお手伝いを行っています。

日時：毎週日曜日（15:00～16:30）
場所：吾妻交流センター

活動期間

2021/4/1～2022/3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：13人（延べ人数）



活動報告

●受入団体担当者

外国人小学生に宿題や漢字の書き順、国語作文、音読などに工夫して教えてくださり、生徒さんに日本の折り紙等伝統的な遊びも一緒に楽しく活動していただきました。子どもたちにとって学校外に楽しく日本語サポート教室となったのではないかと思います。



●学生参加者：匿名希望

活動の成果

ボランティアの内容としては、外国人児童の宿題等の学習のサポートを行い、主に小学2年生の男の子を担当していた。第二言語の子どもたちに対しての接し方や指導の仕方等、様々なことが初めてであったが、段々となれてきて、モチベーションの上げ方等わかるようになってきた。成果としては、相手に合わせた言葉遣いや教え方が身についたと思う。また、元々の目的が、外国人児童の学習について現状を知ることであったが、今年一年間、様々な子たちと関わり、現状や課題を見ることができたと思うので、目標達成度としては、かなり高い。

今後の課題

第二言語ということもあり、漢字の意味や言葉の意味の説明が難しかった。今後は、よりわかりやすく説明できるように努力していきたい。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

日曜日の午後外国籍児童に対して、学習支援や日本語教育の支援を行った。外国籍児童の関心や集中力に応じて、折り紙などの学習以外の活動を織り交ぜながら活動した。

今後の課題

低学年の外国籍児童は学習に対して長い間集中できず、遊びたがることが多かった。ただ学習をさせるだけではなく、相手と話そうと心がけたり、できたことをほめたりすることで、集中できる時間を伸ばすことが出来た。



「矢中の杜（旧矢中邸）」の保存活用（19031V）

受入団体名：特定非営利活動法人「矢中の杜」の守り人（16008G）

活動内容

国登録有形文化財の歴史的建造物（矢中の杜）の保存活用と週末の邸宅公開。新しい活用方法の提案も歓迎します。

平成20年に旧矢中邸の所有者が変わったことをきっかけに、所有者や筑波大学の学生が中心となり邸宅の保存活用活動を開始、平成22年6月にNPO法人を設立しました。定期的な邸宅公開や自由アイデアによる活用事業により、地域とのつながりも深めています。設立時の学生は現在、社会人として活動を支えており、今後も学生の活躍の場になればと思います。

1 邸宅公開（夏期・年末年始休業あり）

毎週土曜日 : 10時～16時（およそ）

第二・第四日曜日 : 12時～16時

・邸宅の一般公開の受付・案内、公開時の邸宅の清掃、軽微な修繕、庭園の整備 など

2 その他

・イベントの企画や準備・実施、邸宅活用の企画立案・実施 など

地域との活動に興味がある方、文化財に興味のある方、建築や庭園、美術品などに興味のある方、ボランティアという形で一緒に楽しみたい方などなど、大歓迎です！

活動期間

2021/4/1～2022/3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：6人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

矢中の杜で開催された「暮らしのなかの陶」展のスタッフとして、公開準備から受付、片付けまで一般のボランティアスタッフと一緒に活動していただきました。会期中は受付台のレイアウトや来場の呼び込みなど、各自の目線でどんどんアイデアを出して実行、具体的な改善に貢献してくれました。大変積極的に参加していただいたおかげで、来場者数も伸び、運営もスムーズに行えました。ありがとうございました。

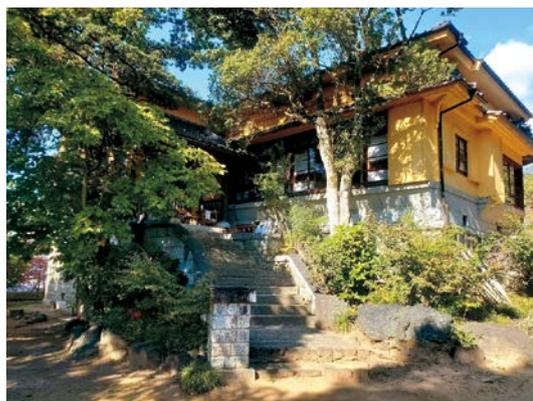
●学生参加者：匿名希望

活動の成果

旧矢中邸の邸宅公開補助活動に取り組みました。文化財とその保存活動への興味から参加を決定しましたが、有形文化財の保存活用を通して地域住民が一丸となって取り組む地域活性化・人的交流の中心地的な雰囲気も肌で感じることができました。つくば市北条の活性化活動から学びを得られることを期待し、長期的に参加したいです。

今後の課題

矢中の杜が市内でも認知度があまり高くないため、矢中邸の保存活動の継続と北条の地域活性化のためにもつくば市内での周知活動から積極的に行う必要性を感じた。



【学習支援ボランティア募集！】 貧しい子どもたちのための無料塾 (21003V)

受入団体名：特定非営利活動法人居場所サポートクラブロベ (16006G)

活動内容

つくば市初！NPOによる無料塾「ROBEつくば学習会」
多忙もしくは経済的に子どもに勉強機会が与えられない…
子どもを塾に行かせたいが経済的に難しい…
でも子どもには高校・大学に行ってもらいたい！そんな子達を救うための塾です。

Robeでは学習を通じ、居場所を与えることで、子供たちの自己肯定感を高めることを目的としています。生きる力を育みます。最終的な目的は、「貧困の連鎖のストップ」です。

学習においては、無学年教材を使用し、その子の学習状況に合わせた指導・学習を行います。また、居場所支援としてストレスマネジメントでこころとからだの調整も行います。話を聞いてあげたり、一緒に将来の夢を描いてみたり。一緒に子供たちの可能性をひろげませんか？

活動日：毎週土曜日、10時～12時が基本的な活動時間になります。

活動場所：万博記念公園駅前教室

活動期間

2021/4/12～2022/3/31

参加学生

T-ACT ボランティア：36人

活動報告

●受入団体担当者

貧困家庭の子どもたちに、学習支援を行った。そのような家庭の中には学校の勉強についていけない子や、発達障害と呼ばれるような特性を持つ子供も多い。工夫を必要とされる教育現場の中で、それぞれが柔軟な発想にて様々な角度からの支援を行った。

●学生参加者：野月和（教育学類 2年）

活動の成果

今年度のROBEでは主に中学生の勉強を見ていました。どのように教えればいいのか（例えば、パワーポイントを使った方がいいのかプリントを作ってきた方がいいのかなど）を考えながら子供と接することを意識しました。子どもの点数もやや上昇傾向ですので、来年度もこのペースで頑張っていきたいと思っています。

また、ROBEの学習塾は勉強だけでなく、居場所支援の側面も併せ持っています。進路の話や学校生活の話にも耳を傾けながら、子どもにとっての安心空間が形成できるよう努めたつもりです。

今後の課題

子どものほめ方について少し課題が残ったという印象があります。例えばテストの点数がよかった時に「点数を誉める」のか「頑張りを誉める」のかで子どもが受け取る印象はだいぶ異なってくると思います。来年度はそういったほめ方についてよく考えていきたいと思っています。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

小学生や中学生の学習支援を行い、授業で理解出来なかった学習分野を共に解明し、学習に対する意欲の向上の手助けを試みました。また、学習意欲の高い生徒の意欲維持を試みました。

今後の課題

限られた時間内で、学習面での補助を試みましたが、人間関係や悩みなど精神的な支持ができればと考えています。子どもたちの細かな感情の変化に着目し、寄り添えるようになりたいです。



【第4回】食糧支援ボランティア募集! T-PIRC 新米等 Food Pantry: Volunteer Recruitment! (21008V)

学内組織名：学生部学生生活課、T-ACT

活動内容

T-PIRC（つくば機能植物イノベーション研究センター）において新米及びサツマイモが収穫され、また一般の方から新米の提供があったため、本学学生への支援目的のため、希望する学生へ食糧支援を行った。

【活動内容】 会場設営、搬入搬出作業、支援物資の配布、アマピエちゃんまたは接触確認アプリ COCOA 案内等
【支援物資】

- (1) T-PIRC：新米 5 トン、サツマイモ 500kg。
※新米は 5kg を 800 袋用意し配布。サツマイモは 1 人 2 本程度を配布。
- (2) 一般の方から：新米（30kg × 3袋、※5kg にして配布）

【日時】 設営 11月24日(水)
配布 11月25日(木)、26日(金)

【場所】 平砂学生宿舍共用棟 1 階食堂

【配布対象】 希望する在学生

【配布予定】 1 人あたり：サツマイモ 1～2 本、新米 5kg

【配布方法】 待ち時間の短縮及び新型コロナウイルス感染症対策強化のため、事前登録制による配布とする。

【募集人数】 各日 5 人程度

活動期間

11月24日(水)～26日(金)

参加学生

T-ACT ボランティア：13名（延べ人数）

活動報告

●学生部学生生活課：石塚正彦

第 4 回目となる本事業では、一般の方からご提供いただいた新米、T-PIRC で本学の学生と教員が育てた新米を学生達に届けるため、教職員と学生ボランティアが協同しこの支援事業に取り組みました。新型コロナウイルス感染症対策のため、配布希望者に事前に Web 予約を行っていただくことで、参列者の密を防ぎながら待ち時間を短縮でき、円滑に支援活動を行うことができました。ボランティアに参加してくださったみなさん、ありがとうございました。

また、今回初めて学内ボランティア活動に参加してくれた学生からは、コロナ禍で人とリアルで接する機会が少なく、卒業も間近のため、何か自分ができることをしたかった、普段交流のない教職員や色々な人に出会えて良かったという声をいただき、食糧支援の場がみなさんにとっての交流の場になっていることにも改めて気づかされました。

これまでと同様に今回も地元地域のみなさまをはじめ、学内外の方々からたくさんのご協力・ご支援をいただきました。改めて感謝の気持ちをお伝えいたします。



● T-ACT ボランティアアドバイザー：木田江里華

一般の方からご提供いただいた新米と、T-PIRCで学生・教職員が育てたお米・サツマイモを学生に届けることができました。少ない人数でも創意工夫を凝らしながらボランティア学生にも協力いただき、本支援事業を行うことができました。前回に引き続き多くの方々からあたたかいご支援をいただき感謝します。

ボランティアに参加した学生からは、感想や本活動への意見・改善案等を沢山いただきました。みなさんからのご意見を基に、今後の活動が更によくするよう努めて参ります。また、今後もT-ACTでは学生のみなさんがボランティア活動を通して学内外の方々と協働し、自身の能力や経験を更に活かすことで地域社会に貢献し、活躍の機会を得られるようフォーラムスタッフ一同でサポートして参ります。ボランティアに関する質問や、ご相談等ありましたらいつでもT-ACTまでお問い合わせください。

● 学生参加者：宮本大翔（人文学類 1年）**活動の成果**

食糧支援に訪れた方への案内、食料の配布。一緒に行ったボランティアの留学生の方とも話すことができた。

今後の課題

英語で対応しているのがかっこよかったので、私もできるようにしたい。

● 学生参加者：谷口萌香（芸術専門学群 1年）**活動の成果**

筑波大学の学生を対象とした食糧支援で、入り口で来場者にいばらきアマビエちゃんとcocoaの登録の案内をしました。混雑時は特に一人一人に丁寧に対応するのが大変でしたが、来てくださった学生の方々が協力的で気持ちよく案内できました。

今後の課題

混雑してきたときに登録の案内のために外まで列ができて、寒い中待たせてしまいました。

● 学生参加者：田中千裕（生物学類 1年）**活動の成果**

食糧支援のボランティアとして、サツマイモを新聞紙に包んで渡したり、来場者を誘導したりした。食糧支援に来た人は留学生が多く、拙い英語ながらもいばらきアマビエちゃんやCOCOAの登録をお願いすることが出来た。米やサツマイモを受け取った方から、「ありがとうございます。」と言ってもらったことが嬉しかった。

今後の課題

今回は一般の方からもご厚意で米やサツマイモを配給していただいたが、次は支援してくださった方々への恩返しができると思う。

● 学生参加者：生田響（国際総合学類 2年）**活動の成果**

食糧支援に訪れた方への案内、食料の配布を行った。

今後の課題

人員配置に工夫が必要だと感じた。忙しさに波があり、暇な時間を有効活用できるようボランティア学生の配置を臨機応変に変えられると思う。

● 学生参加者：細谷綾乃（看護学類 3年）**活動の成果**

会場入口でのアプリダウンロードの確認、サツマイモと新米の配布手伝いを行った。

● 学生参加者：匿名希望**活動の成果**

会場入口でのアプリダウンロードの確認、サツマイモの配布を行った。

今後の課題

想定より来た人が少なく、配布が余る見込みだった。今後は学群からも支援の案内メールを送るようにしてもらうなど、周知を依頼した方が良いかもしれない。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

I joined the food distribution event at Hirasuna Dining Hall from ~3 pm to ~6pm. I helped with distributing rice and packaging potatoes. The students came slowly at the beginning, and when I left there are more students coming.

今後の課題

I need to leave early due to my family (wife and kids) already hungry. They joined me to the event



【第5回】食糧支援ボランティア募集! Food Pantry: Volunteer Recruitment! (21011V)

学内組織名：学生部学生生活課、全代会、T-ACT

活動内容

新型コロナウイルス感染拡大の影響で実家からの仕送り、アルバイトの激減等により困窮する学生を支援するため、また、この度 SMC (株) 筑波技術センター様から災害用備蓄食料の提供があったことから、全代会の協力運営の元、希望する学生に対し支援を行った。

なお、今回提供された災害用備蓄食料の活用には、食品ロスの削減、食を通じた循環型社会の構築や、2015年に国連で採択された SDGs (持続可能な開発目標) の達成に貢献するとともに、学生の防災意識の向上にもつながるものであった。

【活動内容】会場設営、搬入搬出作業、支援物資の配布、アマピエちゃんまたは接触確認アプリ COCOA 案内等

【支援物資】食料品はレトルト食品を中心に缶詰類等、当該社からの寄附の支援物資

【日時】設営 1月26日(水)

配布 1月31日(月)、2月1日(火)

【場所】平砂学生宿舍共用棟 1階食堂

【配布対象】希望する在学生

【配布予定】1人あたり：レトルト食品5個、缶詰2個、マジックライス1個、マジックパスタ1個、サバイバルパン2個、フリーズドライビスケット1個等

【配布方法】待ち時間の短縮及び新型コロナウイルス感染症対策強化のため、事前登録制による配布とする。

【募集人数】各日10人程度

活動期間

1月26日(水)、1月31日(月)、2月1日(火)

参加学生

T-ACT ボランティア：27名 (延べ人数)

活動報告

●学生部学生生活課：石塚正彦

第5回目となる本事業では、SMC (株) 筑波技術センター様からご提供いただいたレトルト食品を中心に缶詰類等を学生達に届けるため、教職員と全代会、T-ACT ボランティア学生が協同しこの支援事業に取り組みました。これまでと同様に、新型コロナウイルス感染症対策に万全を期し、円滑に支援活動を行うことができました。また、全代会のみなさんは今回が初めての運営協力となりましたが、事前の打合わせや、活動日当日にも積極的に運営に携わっていただき、SNS等を効果的に活用したことにより、これまで以上に多くの学生に本事業の周知・支援を行うことができました。

また、これまでの T-ACT ボランティア活動に参加経験のある学生が、今回の食糧支援ボランティア活動にも参加してくれたことに感謝しています。いまだ収束の見えないコロナ禍ですが、学生のみなさんが本事業を通して新しい学びや発見を得ることができたのであれば、私達職員も嬉しく思います。

最後に、これまでと同様に今回も学内外の方々からたくさんのご協力・ご支援をいただきました。改めてこの場で感謝の気持ちをお伝えさせていただきます。

●T-ACT ボランティアアドバイザー：木田江里華

今回の支援活動には、過去に食糧支援ボランティア活動に参加経験のある方が、リピーターとして多く参加してくださいました。その中には第2回目からの参加経験をお持ちで、私達や運営スタッフよりも経験豊富な方もいらっしゃり、現場でご本人から当時の様子を伺うことができ、また、本支援事業に対する改善案等の素直な意見を聞かせていただけたことを嬉しく思いました。また、それと同時に、今後は経験者の方々の希望があれば、運営側として携わっていただきながらご自身達の知識や能力を生かしていただけるのではないかと考えました。今後食糧支援活動が行われる際には、引き続き全代会に運営協力を仰ぎ、学生・教職員が協力し合い、より多くの方々へ支援の手が届くことを期待しています。

T-ACT サポーター会等で、食糧支援の実施アイデア (SNS の更なる活用方法、支援者へのメッセージ作成等) や、運営協力メンバー希望者を募るとともに、学生側のニーズをヒアリングすることにより、本事業や、地域団体と連携して行うプロジェクト型ボランティア活動の中でも本支援事業から得た知見を活かしていきたいです。

●学生参加者：遠藤駿（総合学域群第1類 1年）

活動の成果

当日は誘導や物資配給の手伝いを担当した。活動を通じて初対面の方と親睦を深めたり、留学生にもジェスチャーなどを交えて説明したりすることができた。何より誰かの役に立っているという実感を覚え、非常に貴重な経験を得ることができた。

今後の課題

誘導は看板などでも代替でき得る一方、物資の補充にはどうしても人手が必要となるので、人員をもう少し配給の方に充てても良いのではないかと感じた。また留学生がおでん缶を酒と誤認するようなこともあり、次回は宗教的な配慮を適切に行えるようにしたい。

●学生参加者：野村遥（生物資源学類 1年）

活動の成果

平砂共用棟の旧食堂で防災備蓄品の配布を行った。様々な国籍の方々が受け取りに来られたため、学生の多様性を感じることが出来た。受け取りに来た大学生の協力も有り、全体として受け渡しが非常にスムーズに進んだ。たくさんの学生と関わる貴重な体験だったと思う。

今後の課題

外国籍の大学生が受け取りに来た時に積極的にコミュニケーションを図ることが出来なかったことは今後の課題だと思う。ただ、ボランティア参加者同士では作業を行いながらも互いに話をする事が出来たので良かった。

●学生参加者：谷口萌香（芸術専門学群 1年）

活動の成果

食糧支援の会場設営準備を行いました。会場設営準備に参加したのは初めてでしたが、前回参加したボランティア同様、充実した活動でした。

今後の課題

現場で指示を出す人が複数いて、作業内容が若干わかりづらく感じました。

●学生参加者：大二唯斗（総合学域群第1類 1年）

活動の成果

他のボランティアの方と全代会の方と協力して物資運搬や設営などを素早く行うことができた。



今後の課題

作業手順が分かりにくかった部分があった。

●学生参加者：宮本大翔（人文学類 1年）**活動の成果**

希望学生に食料を配布、その際に誘導。他学類の方と交流ができた他、支援を受けに来た海外の方と英語で少しお話することができた。

今後の課題

もう少し英語で話せるようになりたい。

●学生参加者：河部真依（体育専門学群 2年）**活動の成果**

食糧支援配布を通して、筑波大生のために提供して下さる企業さんのありがたさを感じた。また、配布したときに毎回丁寧にお礼をしてくれる方も多くいて、この活動をやってよかったなと思った。

●学生参加者：羽岡愛望（体育専門学群 2年）**活動の成果**

食料の配布を行うことができ、訪れた多くの人とコミュニケーションがとれた。

今後の課題

外国の方に説明をすることが難しく、話すときに緊張した。

●学生参加者：野嶋彩未（体育専門学群 2年）**活動の成果**

防災食の配布や案内を行った。受け取る人が終わりごろに一気に来たが、周りの人と協力し合いながらスムーズに配布することができた。多くの人に配布できて良かった。

今後の課題

3つで1セットのものを組み合わせながら、配布するのが大変だった。なるべく笑顔で渡すようにはしたが、忙しい時間帯は余裕がなく、組み合わせるのに必死になってしまった時もあったので、事前に準備しておくようにすれば良かった。



●学生参加者：Muhammad Wildan Gifari（グローバル教育院（一貫制博士課程）ヒューマニクス学位プログラム 2nd）
活動の成果

I joined the food distribution event at Hirasuna Dining Hall from ~3 pm to ~7pm on 31st January 2022. I helped distributing flavored rice. Around less than half of the total supplies were distributed

●学生参加者：尚暁歆（人文社会科学研究群人文学学位プログラム 博士後期1年）
活動の成果

1月26日は会場のセッティングと企業から頂いた食糧の搬入でした。予定の2時間で仕事を全部完成できました。1月31日と2月1日は午後3時～7時まで食糧の配布をしました。定刻までに全てを配布しきれず、残りがありましたが、運営から運動サークルへ呼びかける等して全ての食糧を配布することができました。

今後の課題

1月26日の設営スタッフの中にコロナの濃厚接触者がいたことがT-ACTから報告され心配しましたが、後に行われたPCR検査にて陰性であることが分かり、本人も他のみんなも無事でよかったです。今後このような多数の人が集まる活動は、各々がより一層事前の健康確認に注意し、濃厚接触アプリやアマビエちゃんなどで状況確認を徹底し参加することを心掛けるべきであると思います。

配布食糧が余らないように事前の宣伝をもっと広く行う等の対策を講じなければならないと思います。

●学生参加者：匿名希望
活動の成果

活動内容としては、配布する食糧を外から室内へ運び、当日配布する順番に設置するというものだった。2時間という限られた時間の中でいかに効率的に重たい荷物を無駄なく運べるかが重要となっていた。配られた資料や先輩の指示に従って動くだけでなく、自分からも「ここに置いたらどうですか？」などと質問もした。また、パレットジャッキの操作方法も習得できた。

今後の課題

重たい荷物を運ぶ時、いかに無駄なく一発でその配置に持っていかれるかが難しく、最初の机の配置や下準備の大切さ、また、みんなの共通認識が大切だと感じた。荷物を運び入れる前に、しっかりと配置を定めておき、床にテープなどで印をしておいたりするのが効果的なのかなと考えた。



●学生参加者：匿名希望

活動の成果

防災用食品の配布。大量の食品があったが、比較的多くの方に配ることが出来たのではないかと思います。

今後の課題

同種類の食品が連続で並んでいたにも関わらず、取り方は異なっていた（1こずつとどれか1つ）ため、同じコーナーだと思って通り過ぎてしまう人や1こずつもらえると勘違いする人が多かった。同種の配置を連続させない等の工夫があると防止できるかもしれない。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

このボランティア活動を通じて、多くの人と出会い、また多くの留学生の方々のお役に立つことができました。

今後の課題

私は日本語が堪能ではないので、このボランティア活動に参加することに不安を感じていました。しかし、ボランティアをしている人々がとても親切で、たくさん助けてくれました。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

・提供会場の整備、支援物資の搬入・陳列を行った。このような活動は、人々の善意で成り立っていること、指揮者が変わると実施形態にも大きな変化が生じることを改めて感じた。

今後の課題

指揮を執る部門が代わったことで、作業効率の低下が見られたように思う。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

食品を学生に配布する仕事をさせていただきました。私は初めてボランティア活動に参加させていただきました。最近あまり人に会えていなかったもので、人に会えることが嬉しくて楽しかったです。また、留学生の方と話す機会もあり、とてもよい経験ができました。

今後の課題

日が落ちてくると寒くなったのですが、頂いたカイロを使うことで温まることができました。英語でコミュニケーションをとることが難しかったので、もっと英語力を強化したいです。



2021年度 実施状況報告

つくばアクションプロジェクト（以下、T-ACT）は、学生が自らの関心に基づく多種多様な自発的活動を、新たな人間関係を構築しながら実行するよう促進することで、学生の人間力を育成する筑波大学の人間力育成事業である（図1）。その始まりは、2008年度に文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に採択された事業「共創的コミュニティ形成による学生支援—学生・教職員が一体となった新たな自主的活動の創生—」にある。学生支援GPが終了後も、筑波大学の人間力育成支援事業の一環として続けられている。

T-ACTには、学生が企画立案し展開するT-ACTアクション、教職員が企画立案し展開するT-ACTプラン、地域活動団体が実施する社会貢献活動に学生が自発的参加をするT-ACTボランティア（2012年度から開始）の3種類の活動がある。

T-ACTが支援する諸活動は、学生・教職員・地域による共創的コミュニティをベースに、半年以下の単発的・短期的活動であるため、アクティブな流動性をもつことを特徴としている。学生はそれらの活動を通して、様々な活動へ積極に加わる参加力、経験からより豊富な気持ちや教訓を感じ取る体験力、他者と関わり協調するコミュニケーション力、人をまとめ率いる統率力、ビジョンを具現化し創造する企画力といった「人間力」を養うことになり、自主性と社会性を備え、将来社会を担う人材として成長することができると期待されている。2018年度からは、T-ACTアクションの支援対象として、ビジネスにつながりうる活動も含めるようになった。すなわち、プレ的なビジネス体験を支援し、ビジネスに関するノウハウを体感しつつ、さらに発展的な支援につなげるという機能も担いつつある。

本報告では2021年度のT-ACTの支援活動についてのデータをまとめる。なお、データは2022年3月までにT-ACT推進室で把握できたものに限られる。その中でも過去10年分のデータを示すこととする。データの出自である学生からの活動報告等の資料は、提出されるタイミングが様々であるため、これまでの活動の全てが本報告の執筆時点で出揃っていないわけではない。したがって、本報告のデータは今後更新されることがある。

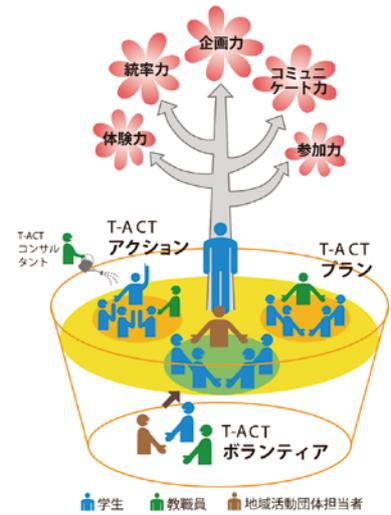


図1 共創的コミュニティ形成によるT-ACTの展開と学生の成長

1. T-ACTで申請された企画等の状況

2021年度のT-ACTアクション・プランの企画申請数は40件（アクション35件、プラン5件）であり、そのうち15件（アクション10件、プラン5件）が承認された（図2）。また、2021年度までの累積承認企画数は921件となった。2021年度に申請された企画における、プランナーは39名（重複者を除く実数は35名）であり、そのうち教職員のプランナーは3名であった（図3）。なお、プランナー数がアクション・プラン企画申請数よりも多いのは、前年度に申請された企画が次年度に承認される等によって、年度の申請数と認められる企画数が異なってくるからである。学生オーガナイザーは96名（実数は86名）、教職員パートナーは23名（実数は20名）

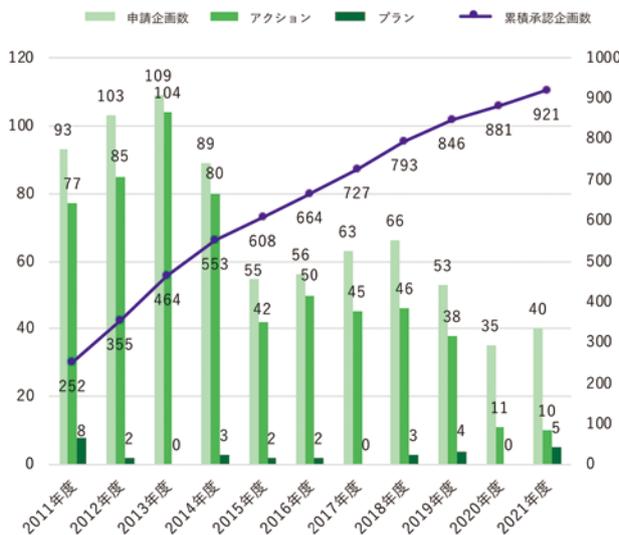


図2 アクション・プランの企画承認数の変遷

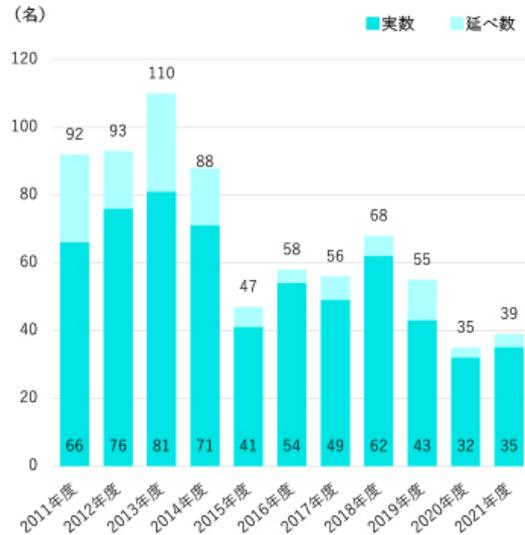


図3 プランナー数の変遷

であった（図4、図5）。T-ACT ボランティアに登録されている団体数は28件であり、登録団体から申請され、募集が承認されたボランティア企画は11件であった（図6）。T-ACT ボランティアに参加した筑波大学生の実数は132名であった（図7）。

2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、2020年度に引き続き全学的に課外活動が制限されている状態が継続されていた。T-ACT における各種の活動も課外活動の一環であることから、全学的な制限の中での活動となったため、2020年度と同様に全ての活動において例年を大きく下回る企画数・参加者数となった。

T-ACT アクション・プランにおいては、昨年度から引き続き、全学的な課外活動への制限が緩和される傾向にあり、感染予防対策を万全としたうえで対面や外出を伴う活動であれば認める体制に徐々にではあるが取り戻された。しかし、年度の前期では月ごとに感染状況に伴う課外活動の方針の変更があった。そのため、急な変更に対応できるようにオンライン上での活動と対面での活動を併用したハイブリットな活動形態が推奨された。また、オンラインによる実施を予定していた進行形の活動が、課外活動への制限緩和により、プランナーの希望によって対面での実施へと変更することもあった。その他にも、課外活動の方針の変更に合わせて、企画の開催時期を見合わせることもあり、プランナーと T-ACT フォーラムとの間で対面での開催実施について慎重な判断が求められる一年であった。新規の活動に関しては、当初より活動形態をオンライン上のものとして考えることができたものもあれば、対面でなければ実施できない企画もあり学生の希望に添えないものもあった。年度の終わりに向かうにつれ課外活動の方針も安定したことにより、対面での実施が含まれる学生の多種多様な活動企画の相談も増えたため、企画申請数の回復につながったと考えられる。T-ACT 新型コロナウイルス感染対策チェックリストに基づき、企画承認のために考慮しなければいけない事項は前年度と変わらないが、既に実施済みのハイブリット企画にならうことが可能であるため承認までの困難さが増えたとは言えないだろう。そのため、承認数は回復に向かっていると考えられる。

T-ACT ボランティアは、2020年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受けた。全学的に課外活動の制限されている状態が継続され、学外での地域の人々との活動が前提となる T-ACT ボランティアの実施はいっそう困難であったと言える。T-ACT ボランティア登録団体においては、オンラインを活用した活動

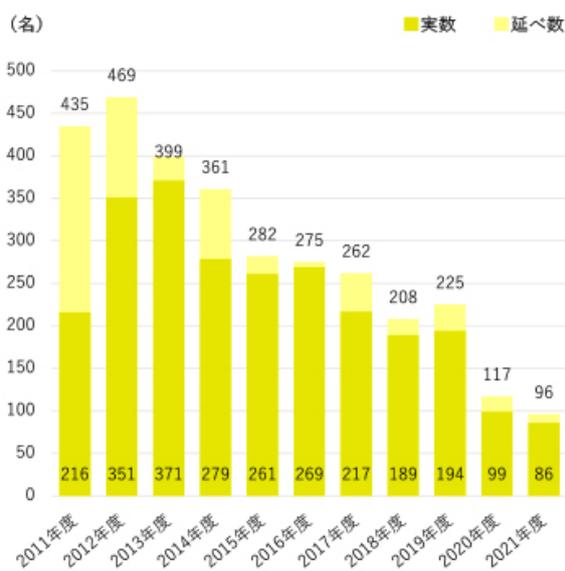


図4 学生オーガナイザー数の変遷

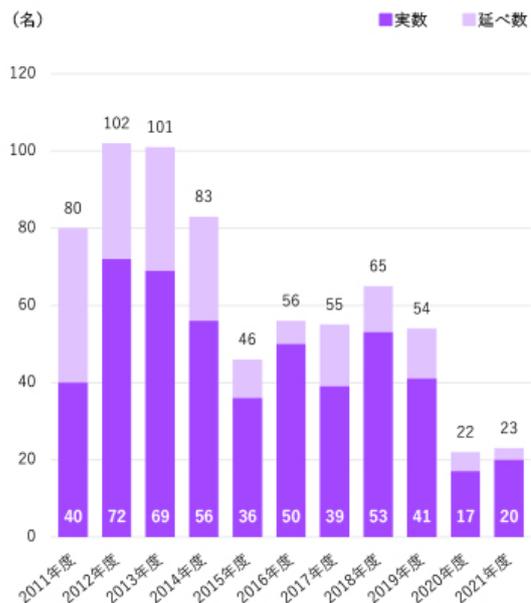


図5 教職員パートナー数の変遷



図6 T-ACT ボランティアの登録団体数と承認活動数の変遷

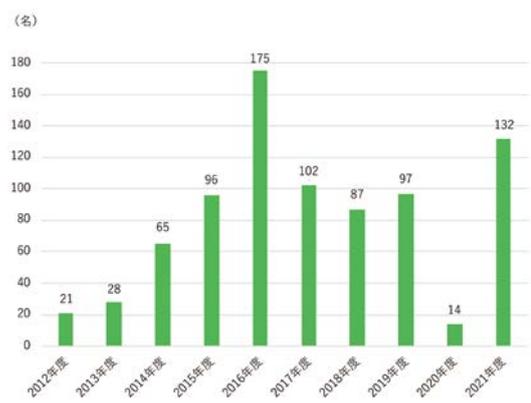


図7 T-ACT ボランティアに参加した学生数の変遷

形態を取入れる等の取り組みや、感染症対策を徹底する等の対応が求められた。また、T-ACT ボランティアでは、T-ACT アクション・プランとは異なり、まずは主催である地域団体において実施の可否が検討されるが、先述の対策を講じてもボランティアに参加する利用者数の減少が響いたことにより、いくつかの地域団体においては活動を縮小、又は休止せざるを得ない状況であった。このことはT-ACT ボランティア登録団体数、ボランティア活動数に影響を及ぼしたと考えられる。こういった状況下であっても特筆すべきは、大学が主導となり、協力団体として全代会が加わって実施された第5回食料支援事業へのボランティア参加者数である。地域団体主催のボランティア活動ではないが、T-ACT がボランティア募集の窓口となるとともに、参加した学生のうち希望する学生に対してT-ACT からの認定証（ボランティアに参加したことを証明するもの）を発行したり、後述する活動報告会で報告の機会を設ける等を行い、T-ACT ボランティアに準ずる活動として取り組むことができた。この食料支援事業には27名（延べ人数）の学生がボランティアとして参加しており、ボランティア活動参加のニーズがあることを示している。また、参加した学生の動機や感想を聞くと、ボランティア活動を通じての人との交流を求めていることが示唆される。

2022年度においては、新型コロナウイルス感染防止のための制限緩和の中で、T-ACT の活動は、対面での実施に限るのではなく、良い意味でオンラインでの活動を取り入れ、活動形態に幅を持って多くの参加者を巻き込みながら展開されていくだろうと思われる。ICT 環境を上手く活かし、T-ACT アクション・プラン・ボランティア、それぞれの特性に合わせて、学生の活動できる機会をどのように増加させていくかを検討することは、今後の発展のための課題であると言える。

2. T-ACT フォーラムの利用状況

T-ACT フォーラム来室者数の変遷を図8に示した。2021年度は新型コロナウイルス感染防止のために、年度の前期においては来室を基本的に控えてもらい Web システムを用いた遠隔相談での相談を行った。後期においては、プランナーの希望により対面での相談を可としながら、遠隔相談による体制を残した。実際に来室した者と遠隔相談を行った者とを合わせて、利用者数として計上した。2021年度の延べ利用者数は269名であり、実利用者数は217名であった。そのうち、遠隔相談で利用した者は69名であった。また、来室者（学生、教職員、地域団体からの来客など）の来室目的の割合を図9に示した。T-ACT アクションの新規申請に関する相談などの利用（A 新規）が29%、T-ACT アクションの運営のための相談や作業といった利用（A 継続）が32%、T-ACT プランの新規申請に関する相談などの利用（P 新規）が3%、T-ACT プランの運営のための相談や作業といった利用（P 継続）が0%、T-ACT ボランティアに関する学生からの相談（V 学生）が17%、T-ACT ボランティアに関する地域団体からの相談（V 団体）が2%、T-ACT サポーターの来室（サポーター）が4%、総合科目に関する利用（授業）が0%、その他の理由による学生の利用（その他（学生））が9%、その他の理由による教職員の利用（その他（教職員））が0%、その他の理由による学外からの来室者の利用（その他（学外））が2%であった。

T-ACT 各種活動への申請数や参加者数と同様に、T-ACT フォーラムへの来室者数も昨年度に続き例年に比較して減少傾向が維持された。新型コロナウイルス感染予防のために、T-ACT フォーラムへの来室制限を続けていることが大きな理由であると言える。来室者数の減少傾向やT-ACT 活動の制限によって、利用目的の割合にも変化が見られたと考えられる。特にオンライン上での活動やできる範囲を模索する余地が多かった、T-ACT アクションに関する遠隔相談の数が多いと言える。遠隔相談の活用は、利用者の増加という観点からも今後も必須であり、その数が多いことは、T-ACT が今後も有効に活用される証左になると考えられるが、遠隔相談だけでは代替できない支援もT-ACT には多い。たとえば、物品の貸し出しや印刷機の使用などは、T-ACT フォーラムに来室することが前提となる。学生との相談の中では、こういったT-ACT フォーラムに来室して受けることのできる支援を受けられなくなったことが、個別具体的な困難として挙がるが多かった。また、2019年



図8 T-ACT フォーラム来室者数の変遷

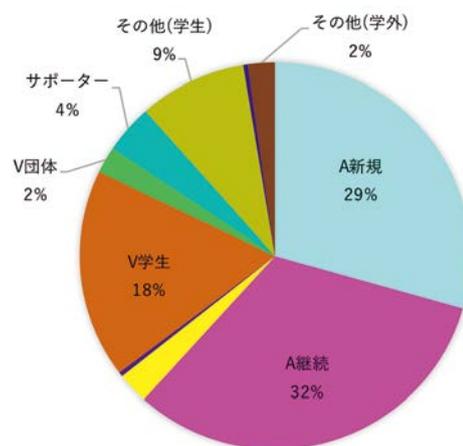


図9 T-ACT フォーラム利用目的

度以前は、T-ACT フォーラムに来室することで、T-ACT のスタッフや学生同士の交流も生まれ、そこから新たな人間関係や活動の充実につながることもあった。こういった T-ACT フォーラムで人と対するからこそ得られる支援や機会を喪失していることは、学生の体験にとって痛手であると考えられる。今後は、感染予防を念頭に置きつつも、2019年度以前は自然に行うのでできていた、対面で会うからこそその効果を、どのように補強していくかも検討する必要がある。

3. T-ACT による人間力の成長

T-ACT アクション・プランの利用者の活動終了後の人間力の成長に関する調査を、Web アンケートで行っている。参加力、体験力、コミュニケーション力、統率力、企画力の5つを人間力の指標として想定し、それにくわえて体験を通じた自己理解の深まりについて、それぞれを測定する質問項目を定めている(表1)。

調査対象は T-ACT アクション・プランの活動を終了した学生もしくは教職

表1 人間力を測定する項目

参加力：積極的に活動に取り組む力
活動の実現に向けて自分なりに努力できた 活動に積極的に関わることができた 活動の実行に貢献することができた 活動にできるだけ多く参加できた 互いに協力し合いながら、活動を進めることができた
体験力：活動の中で感じとり考える力
活動を通して、新しいまたは忘れていた自分の長所に気づくことができた 活動を通して、自分の改善すべき点を知ることができた 活動を通して、喜怒哀楽を感じることもできた 活動を通して、なんらかの新しい発想を得ることができた いろいろな出来事を見聞きできた 活動に参加して、いろいろと考えさせられる体験ができた
コミュニケーション力：他者と関わる力
他のメンバーに対して自分の意見を伝えることができた 他のメンバーと積極的に関わることができた 自分の気持ちを伝えることができた 他のメンバーの意見に耳を傾けることができた
統率力：メンバーをまとめる力
他のメンバーに対して公平に接することができた 孤立したメンバーがいなくどうか注意を払うことができた 指示を出し、効率よくメンバーを動かすことができた 活動の目的、あるいは目標を達成させることができた リーダーシップを発揮することができた
企画力：創造し計画し実現する力
活動に関して様々なアイデアを発想することができた 活動を実現するために適切な計画を立てられた 活動を実現する際に生じる問題点を予測しておくことができた ある程度計画通りに活動を遂行できた 活動に関係する情報を多く集めることができた
その他
自分について考えさせられる体験ができた

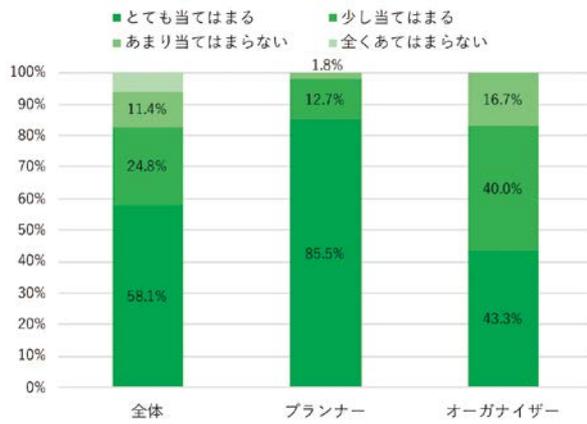


図10 T-ACT 参加時の役割毎における参加力の成長

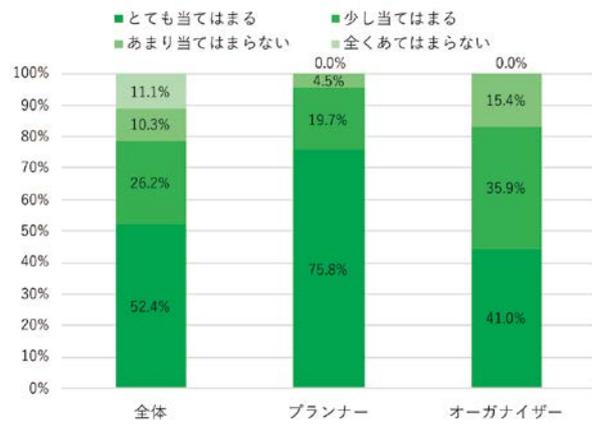


図11 T-ACT 参加時の役割毎における体験力の成長

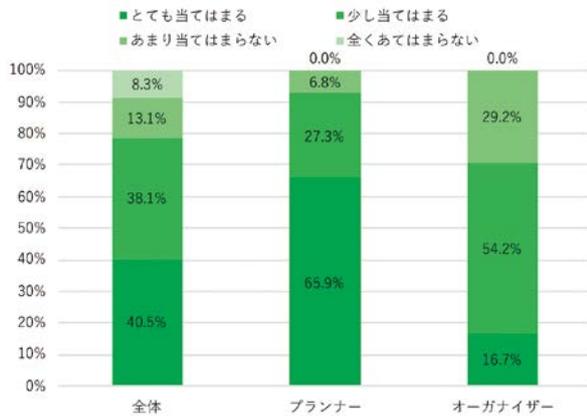


図12 T-ACT 参加時の役割毎におけるコミュニケーション力の成長

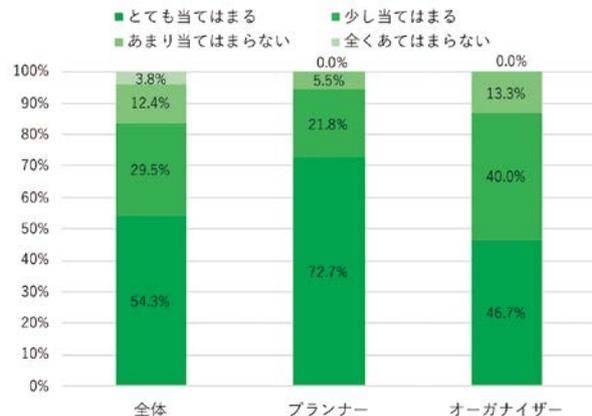


図13 T-ACT 参加時の役割毎における統率力の成長

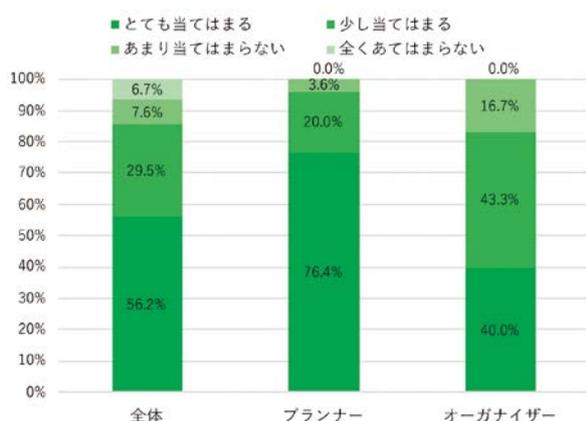


図14 T-ACT 参加時の役割毎における企画力の成長

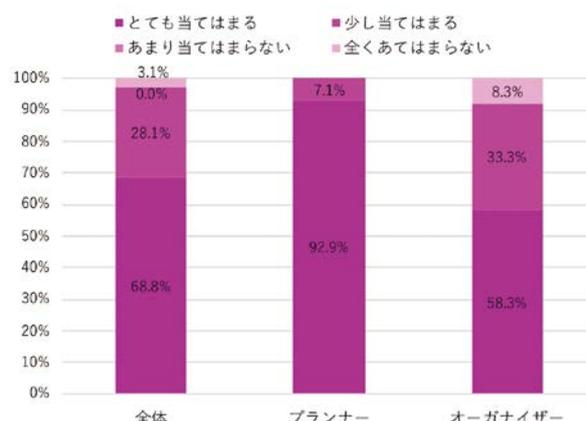


図15 T-ACT 参加時の役割毎における自己理解の深まり

員であった。活動中に表1の質問項目をどの程度感じたかを4件法で尋ねた。5つの人間力についての回答結果は図10から図14までに示した。自己理解の深まりについての項目の結果については図15に示した。2021年度の調査対象は21名であり、そのうちプランナーが11名、オーガナイザーが6名、パーティシパントが4名であった。なお、パーティシパントは4名であったため、パーティシパントのみの回答状況は示さないこととした。

全体の回答状況をみると、いずれの項目も「とても当てはまる」「少し当てはまる」と回答した割合が75%を越えており、T-ACTへの参加によって人間力の成長や自己理解の深まりを得られる学生が多いことを示している。役割別でみると、オーガナイザーとしての参加よりもプランナーとしての参加の方が、人間力の成長や自己理解の深まりを得られている傾向があるのは例年通りである。プランナーといった、企画においてより重要な役割にいる学生の方が、総合的に見て豊かな体験ができることは、体験型の学習機会を提供しているT-ACTならではの特徴であると言える。各人間力を見てみると、より高次の力であると定義されている統率力、企画力といった能力の方が、達成が難しい傾向にあることも想定通りの結果である。より高次と考えられている人間力についても、T-ACTに参加して役割をステップアップしていくことで、徐々に達成できるようになると言えるであろう。こういった結果は、毎年の活動報告で確認できる。特に今年度においては、新型コロナウイルス感染拡大の影響があったため、活動そのものへの制限が多かったが、例年通りに各人間力の発揮が見られる。したがって、活動する機会さえあれば、多くの学生が人間力の成長や自己理解の深まりを得られることが、あらためて示されたと言えよう。

4. 公開シンポジウムの開催

T-ACT推進室は、学生のさらなる活動の発展と地域参画を促進するため、筑波大学内外に向けて学生の活動とT-ACTの成果を発信し、意見交換や交流による関連組織との連携を図るイベントを開催している。それが公開シンポジウムと活動報告会である。特に公開シンポジウムにおいては、上記の目的の他にもT-ACTの支援体制を振り返り、今後の支援のあり方を考えるという目的も含まれる。今年度は新型コロナウイルス感染予防の観点から、オンラインによる実施を行った。

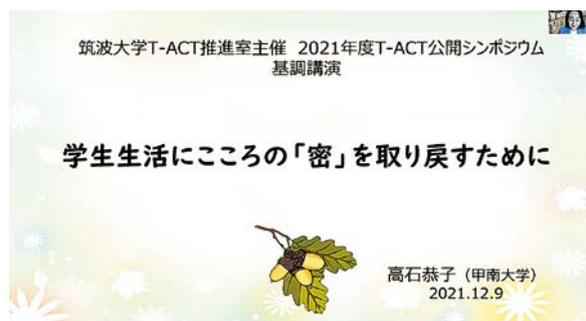
○開催概要

日時：2021年12月9日(木) 14:30～17:00

場所：Zoomを用いたオンライン形式での開催



太田圭副学長による開会の挨拶



第1部 学生生活にこころの「密」を取り戻すために



第1部 学生生活にこころの「密」を取り戻すために

第2部 パネル・ディスカッション
「ポストコロナにおける新しいつながり方の創出に向けて」

○当日の様子

2021年度の公開シンポジウムは「T-ACT for New Normal ーポストコロナにおける新しいつながり方の創出に向けてー」というテーマのもとで開催した。本学大学生および教職員、広く一般の来場者などあわせて計68名が参加した。

太田圭副学長（学生担当）の挨拶後、第1部ではT-ACTコンサルタントよりT-ACT制度の紹介された。その後、コロナ前入学学生、コロナ後入学学生によるT-ACTアクション（学生中心の活動）の活動が報告された。そして、甲南大学文学部教授の高石恭子氏による基調講演『学生生活にこころの「密」を取り戻すために』では、コロナ禍において生じた喪失体験と全国の様々な学生支援活動についてご講演いただいた。

第2部では、『ポストコロナにおける新しいつながり方の創出に向けて』と題し、パネルディスカッションが行われた。パネリストに高石恭子氏、NPO フュージョン社会力創造パートナーズの理事長であり、茨城大学 社会連携センター講師を務めている武田直樹氏をお招きし、学生と本推進室員も交えて、新しい生活様式の下でオンラインも活用しながら学生の企画を実現させ、学生同士のつながりや学生と社会とのつながりの機会を増やしていくことの重要性について幅広い議論が行われた。ポストコロナにおいては、大学が学生の活動をエンパワーするような支援が必要であるとともに、学生同士が支え合い、活性化し合うという視点が重要である。学生支援に関する知見を共有し、学生の持つ自発性の意義について考えを深めるシンポジウムとなった。

5. 活動報告会および企画表彰

2021年度の活動報告会は、例年通り上半期と下半期の2回実施するのではなく、活動数の減少を鑑み2020年度及び2021年度に活動を対象とした1回の実施となった。活動報告会は9月27日（月）（18:00～20:00）に、Zoomを用いたオンライン形式で開催された。参加者は筑波大学生22名、本学教職員12名、学外参加者10名、計44名であった。

2020年度及び2021年度に活動を行ったT-ACTアクション（学生中心の活動）3件とT-ACTボランティア（地域団体中心の活動）2件、5件の活動報告が行われました。新型コロナウイルス感染拡大による様々な影響を受け、大きく制限される中での活動であったが、そういった中でも自分たちのできる活動を考え、「やってみよう」活動に取り組んだ報告がなされた。様々な困難がある中で、うまく実現できた部分だけでなく、理想的にはできなかった部分も含め、自らの経験として生かす学生の姿が伝わる会となった。留学生のボランティア活動の発表もあり、言語の壁を超えて自身の能力を生かしながら地域のために活動している姿が印象的であった。また、情報交換会として、参加者間の交流を深めるために、オンライン形式で気軽な交流ができる時間も設けた。発表を行った学生と参加者間とで積極的な質疑応答や交流がなされました。

昨年度に引き続き今年度も、例年行っていた、T-ACTアクション・プランへの表彰（活動奨励を目的に、参加者の人間力をより高めたと評価される企画への賞の授与）は行わなかった。代わりにこのような困難な状況下でT-ACTアクション・プラン・ボランティアにおいて活動をした全ての学生に対して、その取組を称えることとした。そのため、活動に参加した学生のうち、希望する学生に対して、T-ACT推進室からの表彰を行った。あわせて学生の「やってみよう」実現のために尽力いただいた本学教職員や地域団体に対し、感謝の意を表する賞も贈呈した。これらの表彰や感謝状の贈呈については、表2および表3にまとめた。

表 2 2021年度に表彰された企画

賞	承認番号	企画名
T-ACT 推進室表彰	20010A	筑波の春を取り戻せ 実行編
T-ACT 推進室表彰	20011A	ドコイコ [Ver.1]
T-ACT 推進室表彰	21003A	つくばマナトピア～学びの祭典～

表 3 2021年度に表彰されたボランティア参加者

T-ACT 推進室表彰	21001V	外国籍子ども校外学習サポート教室 参加学生 1 名
T-ACT 推進室表彰	20004V	新型コロナ禍における学生への食事支援事業 参加学生 4 名

グッド・パートナー賞	遠藤優介(人間系)	20010A 筑波の春を取り戻せ 実行編
ボランティア感謝状	非営利ボランティア団体 伴の会 in Tsukuba	21001V 外国籍子ども校外学習サポート教室
ボランティア感謝状	一般社団法人 アイネット	21004V 茨城県のひきこもり支援をもりあげよう

編集後記

全世界的に猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症の影響によって、新しい生活様式への転換が求められる一年でした。一方で、T-ACTの本質、すなわち、学生が個々のアイデアを実現させるべく、仲間を集め、共に活動を創ってゆくことが変わることはありませんでした。逆境の中にあっても、学生達の「やってみたい」という思いは力強く、その逞しい姿をそばで見させていただきました。「コロナ禍だからこそ周囲の人々を元気づけたい」という思いが素地となっている企画も多かったように思います。課外活動制限下においても、そうした「学生による学生支援」が生まれてくる所に、筑波大学の懐の深さを垣間見たように思いました。また、この一年は、学生支援組織の教員という立場からも、ICTを活用したハイブリッド支援が、コミュニティ拡大のために有効であり、これまで手の届かなかった学生へのアプローチとなりえることが実感できました。

誠に残念ながら、今年度でコンサルタントを離職することとなりましたが、今後も、T-ACTが、学生同士が支え合い、活性化し合う「学生による学生支援」のためのプラットフォームであることを願います。コロナ禍における学生支援を取り巻く状況という観点からは、社会的交流の欠如による精神的健康への影響が懸念されます。そのため、中途退学、留年、休学に対する支援課題としてのT-ACTが担う役割は益々大きくなることが予測されます。学生の主体性と社会性の育成を図る本事業は、世界に誇るモデルであり、今後は立場を替えて「自発的活動に焦点を当てた学生支援」の効果を検証すべく、共に歩みを進めさせていただきたいと思っております。

T-ACT コンサルタント
田中 圭

2021年度は、いまだ続く新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、学生の課外活動は大きな影響を受けることとなりました。T-ACT ボランティアでは、たくさんの地域団体から地域ボランティア活動への参加の機会いただき、また、多くの学生がその活動に飛び込んで従事してくださいました。学内支援事業では、本年度もT-ACT ボランティアの枠組みを利用して「食糧支援事業」が行われ、第5回目では学生生活課主導の元、全代会が協力団体として初めて運営に参加しました。全代会参加の経緯をあまり話す機会がなかったのですが、実は「ボランティアをやりたい」という1人の全代会学生からの相談がきっかけでした。その方は、過去に行われた食糧支援事業に食料を受取る側として参加した際にT-ACT ボランティア学生が活動に従事している姿を見て“楽しそう”と興味を持ったそうです。そして、活動への参加相談のためにT-ACT フォーラムにいらっしゃったことがきっかけとなり、学生生活課との幾度かの打合せを経て全代会としての参加が決定しました。決定後は、活動の構想から参画することで学生発の斬新なアイデアが多く運営に反映されました。その一例として、SNSを利用した広報活動が挙げられます。配布する食品の紹介動画を作成し、日本食に親しみのない留学生にも食品がどういったものか一目見て分かる工夫等は受取る側の目線に立った配慮が行き届いていました。全代会が加わることにより今までにない新しい試みを行うことができ、また、過去の食糧支援ボランティア活動参加経験者が多く参加してくれたことで多くの方々に支援が行き届いたと思っております。

学生のみなさんの“やってみたい”という気持ちと行動する力は周囲の人に様々な影響を与え、思ってもみなかった相乗効果をもたらすことがあります。もし、みなさんがもつ能力や経験を活かして何かをやりたいという気持ちがあればお気軽にT-ACTに相談ください。みなさんが充実した学生生活を送れるようにスタッフ一同でサポートします。

最後に、いつも温かく学生を見守ってくださっている地域活動団体の皆様からのご支援とご厚情は感謝の念に堪えません。T-ACTが地域と学生の絆を繋いでいく場所であることを目指してこれからも邁進して参ります。

T-ACT ボランティアアドバイザー
木田 江里華

2021 年度 T-ACT 推進室員一覧

	氏名	所属	職名
室長	加賀 信広	人文社会系	教授 学生生活支援室長
副室長	杉江 征	人間系	教授
室員	木村 周平	人文社会系	准教授
	星野 豊	人文社会系	准教授
	石川 香	生命環境系	助教
	中内 靖	システム情報系	教授
	後藤 嘉宏	図書館情報メディア系	教授
	村田 知弥	医学医療系	助教
	大林 太郎	体育系	助教
	大友 邦子	芸術系	准教授
	田附あえか	人間系	助教
	青柳 悦子	人文社会系	教授
	土井 裕人	人文社会系	助教
	唐木 清志	人間系	教授
	慶野 遥香	人間系	助教
	田中 博	計算科学研究センター	教授
	桶谷 雅人	人間系	助教
	田中 圭	学生生活支援室	助教 T-ACT 専任教員
	鷹巣 明美	学生部学生生活課	課長

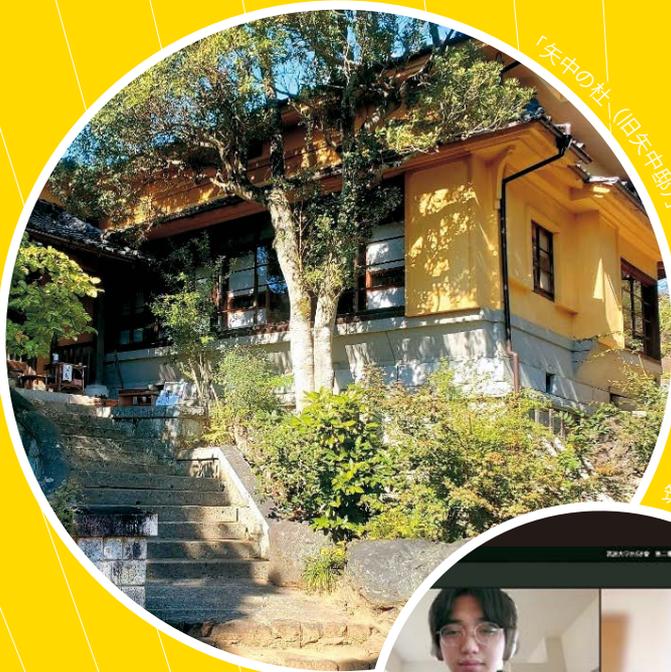
2022 年度 T-ACT 推進室員一覧

	氏名	所属	職名
室長	加賀 信広	人文社会系	教授 学生生活支援室長
副室長	杉江 征	人間系	教授
室員	松崎 寛	人文社会系	准教授
	茅根 由佳	人文社会系	助教
	小林 幹佳	生命環境系	准教授
	中内 靖	システム情報系	教授
	後藤 嘉宏	図書館情報メディア系	教授
	村田 知弥	医学医療系	助教
	大林 太郎	体育系	助教
	川島 史也	芸術系	助教
	水野 雅之	人間系	准教授
	青柳 悦子	人文社会系	教授
	土井 裕人	人文社会系	助教
	唐木 清志	人間系	教授
	慶野 遥香	人間系	助教
	田中 博	計算科学研究センター	教授
	鷹巣 明美	学生部学生生活課	課長

つくばアクションプロジェクト活動報告書

2022 年 11 月発行

筑波大学 T-ACT 推進室
〒305-8577 つくば市天王台 1-1-1
TEL 029 (853) 2222



「矢中の社（旧矢中邸）」の保存活用



【第5回】食糧支援ボランティア募集！ Food Pantry Volunteer Recruitment



筑波大学かぶき會 第二編 T-SUKUBA DAIGAKU KABUKI-KAI/DAINIBA



アイシティecoプロジェクト in 茨城



Support



BLUE ONE BEAT! ~ The 2nd scene ~ SDGsをもっと身近に~



〜はなす〜プロジェクト



【学習支援ボランティア募集！】貧しい子どもたちのための読書会

STUDENTS



T-ACT